60-1242
1200501272656
60
.242

始

192
ゑ

醫學博士
文學博士 富士川游撰

日本醫學史綱要

東京 克誠堂發行

60-1242.

日本醫學史綱要序言

一。余が我邦醫學の歴史を敍述して一書を編し、日本醫學史と題してこれを世に公にしたのは明治三十七年の秋であつた。今からざつと三十年の前である。その後、余自身の探求によりても、又他の學者諸家の熱心なる努力によりても、事實の增補若しくは訂正を要すべきものが少なくない。再版の機會もあらば、改修を加へむと思ふて居るのであるが、目下の處、容易にその目的を達することが出來ぬやうに思はれる。

二。しかるに、我邦の醫學史の研究は、三十年前日本醫學史刊行の時と異なりて、近時、壯年の學者の間に、醫史研究の志を懷きて熱心にその道に盡精せられる人が多くなつた。この時に方りて、たとひ粗笨のものにしも、體系的に我邦の醫學の歴史を敍說せるものが必要であると信じて、余はさきに刊行したる日本醫學史よりして、その綱要を拔萃し、これを日本醫史學會發行の中外醫事新報に連載した。固より簡略にして、要領を得ぬところもあるべきと思はれるが、しかも全く無きにはまさることであると考へ、今一册に纒めて、これを世に公にすることにしたのである。

三。前に刊行せる日本醫學史には日本醫事年表を附錄した、沿革の跡を一目の下に見ることが出來るために便

日本醫學史綱要目次

第一章　太古ノ醫學

有史以前ノ醫學……一
神祇時代ノ醫學……二
醫人ノ鼻祖……三
神祇時代ノ病理學……五
神祇時代ノ醫術……七
參考書籍……一一

第二章　奈良朝以前ノ醫學

韓醫方ノ輸入……一三
佛教ノ渡來……一三
唐醫方ノ輸入……一四
大寶律令……一四
參考書籍……一六

第三章　奈良朝ノ醫學

僧醫……一七
施藥院……一九
萬葉集……一九
參考書籍……二〇

第四章　平安朝ノ醫學

大同類聚方……二一
金蘭方……二二
醫心方……二三
此期ノ醫學……二四
解剖學……二五
生理學……二六
病理學……二八
內科……二八

利と信ずるがこれはさきに別に單行本として刊行したものがある。これも既に絶板となつたのであるが、追て訂正を加へて再び刊行したいと思ふから、この綱要の中には年表を省略した。

四。この書は紙頁の都合上、江戸幕府時代の末造までにて筆を止めた。明治時代の醫學の歴史につきては、近時田中香涯氏の明治大正醫學史を始め、緒方正清氏の婦人科史、岡崎桂一郎氏の外科史、岡田和一郎氏の耳鼻咽喉科學史、久保猪之吉氏の日本耳鼻咽喉科學年表、小川劍三郎氏の日本眼科學小史等その他、各科に渉りて敍説せられたるものがあるから、この書にこれを省略したことは讀者に對して左ほどの不便を與へることはないと思ふ。

五。この書に插みたる諸家の肖像は、概ねその家に秘藏せられたるものを寫したのであるが、その內には、その家及び緣故の家には傳はらずして奔走の結果、他の方面にてこれを手にしたものもある。或は他の研究者の厚意によつてこれを寫すことが出來たものもある。ここに謹で此等の人々に對してその厚意を謝する。

昭和八年六月上浣

富士川游

外科……三一
婦人科……三三
兒科……三八
耳科……三九
眼科……三九
口齒科……四〇
鍼灸科……四〇
按摩科……四三
藥物科……四三
養生科……四四
參考書籍……四五

第五章　鎌倉時代ノ醫學

宋醫學ノ輸入……四六
僧醫……四六
萬安方及ビ頓醫抄……四八
此期ノ醫學……四八
解剖學及ビ生理學……四九
病理學……四九
內科……五〇
外科……五一
兒科……五二
婦人科……五三
療病院……五三
醫事制度……五六
參考書籍……五七

第六章　室町時代ノ醫學

明醫方ノ輸入……五九
此期ノ醫學……六一
內科……六二
外科……六三
婦人科……六四
眼科……六五

兒科……六七
黴毒ノ發現……六七
參考書籍……六八

第七章　安土桃山時代ノ醫學

金元醫學ノ輸入……七〇
此期ノ醫學……七一
內科……七三
外科……七九
眼科……八〇
婦人科……八一
兒科……八二
老人科……八三
鍼灸科……八三
口中科……八五
耳科……八六
鼻科……八六
藥物科……八七
西洋醫學ノ輸入……八八
南蠻流外科……九一
施藥院……九四
參考書籍……九六

第八章　江戸時代ノ醫學

江戸時代前期

本道……九七
李朱醫方……九七
劉張醫方……一〇五
古醫方……一〇七
外科……一〇九
和蘭流外科……一一〇
楢林流外科……一一〇
吉田流外科……一一二

西流外科……一二三
栗崎流外科……一二三
村山流外科……一二三
桂川流外科……一二三
カスパル流外科……一二三
眼科……一二六
兒科……一二六

江戸時代中期

古醫方……一二五
儒醫一本論……一二八
萬病一毒論……一三〇
吉益流醫方……一三三
一毒論ノ反對者……一三六
氣血水論……一三七
後世家……一三九
折衷學派……一四〇
和方家……一四一
產科……一四二
婦人科……一四五
兒科……一四六
口中科……一四六
咽喉科……一四六
耳科……一四七
鼻科……一四七
眼科……一四七
法醫學科……一四八
藥物科……一五〇
鍼科……一五一
婦人科……一二七
口中科……一二七
鍼灸科……一二八
本草科……一二九
藥物科……一三三
醫史學……一三四

診科……一二五
西洋醫學ノ輸入……一二五
小塚原觀臟……一二七
解體新書……一二八
解剖學……一二三
和蘭流外科……一二〇
吉雄流外科……一二〇
西流外科……一二一

江戸時代後期

此期ノ醫學……一二一
古醫方……一二一
考證學派……一二三
漢蘭折衷派……一二六
外科……一二八
眼科……一二九
產科……一二九
賀川流產科……一二九
蛭田流產科……一二〇
桂川流外科……一二一
吐法……一二二
刺絡……一二六
灸法……一二六
溫泉……一二七
醫學教育……一二七
養生科……一二九
兒科……一二九
痘科……一二九
種痘科……一二三
精神病科……一二五
黴毒科……一二六
按摩科……一二七
鍼科……一二八
診科……一二九
藥物科……一二〇

本草科……二二
養生科……二二三
易醫論……二二四
和方家……二二五
西洋醫學ノ發達……二二六
西洋醫學所……二二三
精得館……二二四
醫學諸科ノ發達……二二六
物理學……二二六
化學……二二八
解剖學……二二八
生理學……二二五
病理學……二二七

第九章　疾病史

疫病……二八九
痘瘡……二九〇
水痘……二九三
麻疹……二九三
風疹……二九五
猩紅熱……二九六
腸窒扶斯……二九六
發疹窒扶斯……二九八
診斷學……二九八
內科……二六〇
外科……二六九
眼科……二七三
產科……二七五
婦人科……二七七
兒科……二七七
整骨科……二七八
藥物科……二八〇
植物學……二八二
軍陣醫學……二八四
衛生學……二八六
參考書籍……二八七

虎列刺……二九九
流行性感冒……三〇一
赤痢……三〇三
麻拉里亞……三〇四
癲病……三〇五
ペスト……三〇七
實布垤里……三〇七
呼吸器病……三〇八
喘息……三〇八
肺結核……三〇九
百日咳……三一一
肋膜炎……三一二
胸水……三一二
消化器病……三一三
食道狹窄……三一三
食道痙攣……三一三
胃加答兒……三一三
鼓脹及ビ腹水……三一四
特發虎列刺……三一五
腹膜炎……三一五
腎臟病……三一五
膀胱病……三一六
神經系病……三一七
腦出血……三一七
癲癇……三一八
歇私的里……三一〇
毘剝昆垤里……三一〇
精神病……三一一
生殖器病……三一一
黴毒……三一二
膿淋……三一三
物質代謝機病……三一四
糖尿病……三一四
雜載……三一六
脚氣……三一六
小兒暴瀉……三一九

目次終

流行黃疸……三九
狂犬傷……三〇
鼠毒……三一
十二指腸蟲病……三二
恙蟲病……三三
參考書籍……三四

日本醫學史綱要

富士川　游撰

第一章　太古ノ醫學

有史以前

有史以前ノ醫學

我日本國ノ有史以前ノ時代ニ關シテハ、近時人類學者及ビ考古學者ノ研究ニヨリテ知リ得タルトコロ尠カラズ。當時ノ住民ガ遺シタル物品及ビソノ住居シタル遺跡ガ多クハ沖積層ニ存スルコトニ徵シテ、ソレガ歐洲學者ノ所謂新石器時代ニ屬スルコトハ明ナリ。而シテコノ時代ニ生存セル民族ハ今ノ「アイヌ」ノ祖先ナリシカ、又ハ坪井正五郎博士ノ唱ヘタルガ如キ一種ノ人種（「コロボツクル」）ナリシカニツキテハ論爭アリ。現時ノ趨勢ニテハ「アイヌ」ノ祖先ナルベシトノ說ニ贊成スルモノ多シ。ソレハ兎モ角、ソノ民族ノ遺骨ニツキテ齲齒及ビ骨ノ病的變化ヲ發見シタル報告アリ、又ソノ土偶ニツキテ見ルニ遮光器ヲ用ヒタルモノアリ。ソノ他ノ病症ニツキテハ固ヨリ形跡ノ徵スベキモノアラズト雖モ、人類ガ外圍ノ自然界ニ接觸スルコ

原始醫術

(1) Animismus
(2) Hovorska
(3) Urmedizin

トニヨリテ當然招致スベキ外科的損傷ヲ以テ第一ノ疾患トシ、次グニ娩產ノ障碍ヲ以テシ、又嗣グニ身體內部機能ノ異常ヲ以テセルコトハ推知スルニ難カラズ。思フニソノ醫術ハ動物ニ存スル本能的療法ニ加フルニ、生氣主義[1]的ノ思考ニ本ヅキテ施セル方術(例之、唾液ニテ嘗メルコト、摩擦スルコト、吸吮スルコト、搔クコト、異物ヲ除クコト、藥ヲ飲ミテ嘔吐スルコト等)ニ過ギズ、ホヴォルスカ[2]ノ所謂原始醫術[3]ナリシナラム。

參考書籍

(1)日本石器時代ノ住民　醫學博士小金井良精「人類學研究」所收(二八九頁以下)
(2)日本石器時代人民論　理學博士坪井正五郎著　東洋學藝雜誌第二六一、二六三及ビ二六五號所載
(3)日本太古ノ民族ニ就テ　文學博士喜田貞吉　史學雜誌第二十七編第三號
(4)有史以前ノ日本　文學博士鳥居龍藏著
(5)考古學　文學博士高橋健自著
(6)日本考古學　八木奬三郎著
(7)日本石器時代ノ黴毒ニ就テ　醫學博士足立文太郎　東京醫學會雜誌第九卷第十四及ビ十六號

神祇時代

神祇時代ノ醫學

我日本國ノ歷史ハ天之御中主神(アノミナカヌシノカミ)ニ始マル。天之御中主神ヨリ鸕鷀草葺不合神(ウガヤフキアハセズノカミ)ニ至ルマデ代々ノ間

神人無別ノ世

(1)古事記三卷大安麿奉勅撰和銅五年(西暦紀元七一二年)
(2)日本書紀三十卷舍人親王及太安麿奉勅撰養老四年(西暦紀元七二〇年)
(3)風土記元明天皇和銅六年(西暦紀元七一九年)。今ニ存スルモノハ常陸風土記及ビ備後因幡常陸等ノ一部分ノミ

ハ神ト人ト別アルコトナシ。歷史家之ヲ神代(カミヨ)ト稱ス。ソノ年代ハ今ヨリ之ヲ詳ニスルコトヲ得ズ。降リテ人皇ノ代ニ至リテモ、神武天皇ヨリ九世九代ヲ經テ開化天皇ニ至ルマデ、大凡四五百年ノ間ハ尙ホ神人無別ノ世ナリ。ソレ故ニ國初ヨリシテ此期ニ至ルマデノ間ヲ醫學上ノ神祇時代トス。

神祇時代ノ事情ヲ傳フル記錄ニシテ今ニ存スルモノ三種アリ。古事記[1]ト日本書紀[2]ト風土記[3]トコレナリ。是等ノ載籍中、神祇時代ノ事ヲ記スルニ方リテハ神話ト歷史ト混淆錯雜シテ、事實ノ眞相ヲ窺フニ苦シムモノアリ。又醫術ニ關スル部分ハ固ヨリ寥々タリト雖モ、シカモソノ大要ヲ窺フニ足ルモノアリ。

醫人ノ鼻祖

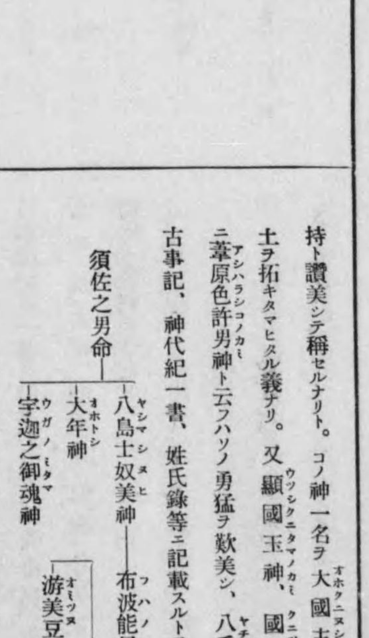
日本書紀ニ一書ヲ引テ『夫大巳貴命(カノオホアナムチノ)與(ト)少彦名命(スクナヒコナノ)、戮力(アハセ)一心(ヒトフニンナ)、經營(ツクルアノシタラマタ)天下、復爲(ウツシキ)顯見蒼生(アラヒトクサ)及畜產(ケモノ)、則定其療病之方(オサムルノリ)』ト記載セリ。コレニ依リテ、歷史家或ハコノ兩神ヲ以テ我邦醫學ノ鼻祖ナリトセリ。

醫人ノ鼻祖

大巳貴命、古事記ニハ大穴牟遲神ト書ス。萬葉集ニハ大汝、大穴道、於保奈牟知ナドト書シ、三代實錄、延喜式ニハ大名持ト書シ、姓氏錄ニハ大奈牟智神ト書シ、文德實錄ニハ大奈母智ト書シ、日本書紀ニ『大巳貴此云ニ於保奴(オホアナムチ)娜武智』トアルニヨリテオホアナムチト唱ヘ來タリタレドモ、本居宣長ノ說ニ據レバオホナムヂト濁リテ讀ムベシ。名持(ナモチ)トイフ言葉ハ人ヲ讚美スル稱呼ニテ、コノ神ハ天下ヲ造リ治メタマヘル御名ノ世ニスダレタレバ大名

大穴牟遲神

持ト讃美シテ稱セルナリト。コノ神一名ヲ大國主神、大國魂神、大物主神トモイフ、天下ヲ伏セテ多ク彊土ヲ拓キタマヒタル義ナリ。又顯國玉神、國作大神トモ云フハソノ國土ヲ經營シタマヒシ功績ヲ稱スルナリ。一ニ葦原色許男神ト云フハソノ勇猛ヲ歎美シ、八千矛神トイフハ多數ノ矛ヲ持テル意味ニテソノ武威ヲ稱揚スルナリ。古事記、神代紀一書、姓氏錄等ニ記載スルトコロニ據レバ、大穴牟遲神ハ素盞嗚尊六世ノ孫ナリ。



コノ名ノ神ノ中、布波能母遲久奴須奴神ト深淵之水夜禮花神トハ餘ノ神ノ名ノ樣ニ異ナリテ不審ナリ。平田篤胤ハ大穴牟遲神ヲバ素盞嗚命六世ノ孫トイフ傳ノ廣クナレル後ニソノ世數ヲ合ハサントシテ中古ニ揑造セシモノナラムト曰ヘリ。

大穴牟遲神已ニ八十神ヲ平ゲテ、出雲ノ御大御前ニ來マストキ、海ノ波ノ白ク立チタル間ヨリ、天之羅摩船(1)(神代紀一書ニ以ㇾ鵝羽爲ㇾ衣ニ造ル)浮ビ來タル神アリ、大穴牟遲神取リテ掌中ニ置キ之ヲ翫ブ、スナハチ跳リテソノ頰ヲ齧ム、ヨリテソノ物ヲ怪トテ使ヲ遣ハシテ天神ニ白サシム、高皇產靈神(古事記ニハ神產巢日トス)コレヲ聞テ曰ク、『吾ガ產メル兒一千五百座アリ、其中ノ一兒最モ惡シク、教養ニ順ハズ、指間ヨリ漏レ墮ツルモノ必ズ彼ナリ、宜シク之ヲ愛養スベシ』ト、コレスナハチ少彦名命コレナリ。日本書紀ニハ一書ヲ引テ、大穴牟遲神ト少彦名神トガ遭遇シタルトコロヲ出雲國五

(1)羅摩子一名丸閼和名加賀美、白蘇和名夜主加賀美

少名毘古那神

十狹狹之小汀トナセリ。五十狹狹之小汀ハ出雲ノ西北海岸ニテ杵築郡イナサ濱ナルベシ。延喜式神名、出雲風土記ニ出雲郡ニ因佐神社トアルハ或ハソノ遺跡ナルベキカ。御大御前ハ出雲ノ東北海岸ニテ、出雲風土記ニ島根郡美保崎又ハ美保郷トアルトコロ或ハソノ遺跡ナルベキカ。今ハソノ何レカ是ナリトモ辨ヘ難シ。

少彦名命、古事記ニハ少名毘古那神ト書ク。本居宣長ノ說ニ據レバ毘ノ字濁音ナリ、スクナビコナト讀ムベシ。コノ神ノ形體ノ短小ナルヲ指シテ云フトコロノ稱呼ナリ。コノ神、國外ヨリ渡來シ、又後ニ至リテ常世國ニ去レリト言フ。常世ノ國トハコノ皇國ヲ遙カニ隔リタル國ヲ指ス。少彦名命ハ遠ク國外ニ去リタマヒシカ、或ハ崩御シタマヒシコトヲ指シテ云ヘルカ。

然レドモ、大穴牟遲神、少名毘古那神、兩神ガ醫方ニ關シテ爲シタマヒシ事跡ハ、大穴牟遲神ガ創傷ニ對シテ蒲黃ヲ貼傅スルコトヲ敎ヘタマヒシト、火傷ニ對シテ蚶貝ヲ黑燒トシテ塗敷セルト、二神ガ酒ノ釀法ヲ改修シ、依リテ少名毘古那神ヲ久斯神(1)ト稱セラレタルニヨリテ少ナクトモ酒ヲバ一部分、藥物トシテ用ヒラレタルコト、及ビ二神ガ溫泉ニ浴シテ治療ノ法ヲ施サレタルコト(1)等ノ數項ニ過ギズ。思フニ、コノ兩神ハソノ當時已ニ久シク行ハレタル療病ノ方法ヲ集メテ以テ醫方ノ則ヲ立テタルモノナラム。固ヨリ醫方ノ鼻祖トスベキニアラズ。國史ニ明記セルトコロニヨリテ之ヲ我邦第一ノ醫人トスベキノミ。

(1)クシノカミヲ約メテ言フ、藥ノ神ノ義

(1)伊豫國風土記

神祇時代ノ病理學

我ガ神祇時代ニアリテハ、『人ハ更ナリ、天モ地モミナ神ノ靈ニヨリテ成レルモノナレバ、天地ノ間ナル吉事

(1)古事記傳本居宣長著卷九
神氣

(2)古事記傳本居宣長卷二十三
(2) Dämonen

モ、凶事モ、スベテ神ノ意ナリ。顯人(ウツシヒト)ノ顯ニ行フ事(顯露之事(アラハニ))ノ外ニ幽事(カミコト)(神事)アリ、顯ハニハ目ニモ見エズ、誰爲(タガナ)ストモナク、神ノ爲シ給フ業ナリ(1)』ト信ゼルガ故ニ、疾病モ亦、神ノ意ニ因ル、何神ニテモ此方ヨリ侵スコトアレバ祟リテ病マスルナリ。故ニ神氣(カミノケ)ノ稱アリ。後ノ世ニ物氣(モノノケ)ト稱スルハ、死人ニマレ、又生人ニマレ、人ノ祟ヲナスヲ云フモノナレドモ、コレモ祟ヲナスハ神靈ナレバ、神氣(カミノケ)ト同ジ意義ニテ、古言ナリト云フ說アリ(2)。別ニ荒ブル神(煩神、八十禍津日神、大禍津日神等)アリテ、ソノ神ノ暴戾ヨリシテ病ヲ生ズルコトアリト說ク、コレ希臘ノ太古醫史ニ病ハ魔(3)ノ所爲ニシテ、魔ハ本ト神ニ出ヅ、コレニ善ト惡トアリテ、一ハ病ヲ起シ、一ハ病ヲ治スルト云フニ似タリ。

疾病ハ此ノ如ク、神ノ祟ニ因リテ起ルノ他、人ノ身ニ穢氣惡毒アルニヨリテモ病ノ之ニ乘ジテ起ルコトアリ、伊邪那岐神ガ黃泉國(ヨモツクニ)ニテ汚穢ニ觸レテ煩神等ノ惡神ヲ生ミシガ如キ是ナリ。人ノ身ニ不祥ノ行爲アリテモ病ノ起ルコトアリ。伊邪那岐神、伊邪那美神ガ、天柱ヲ廻ルトキ、陰神先ヅ唱ヘシコト、陰陽ノ理ニ違ヘリトテ、生レタル兒神(蛭兒神)ガ三歲ニ至ルモ脚尙ホ立タザリシト云フガ如キ是ナリ。コレ等ハ人ノ身ニ穢氣惡毒アリ。若シクハソノ行爲ニ正シカラザルコトアレバ獨リソノ身ガ病ニ惱ムノミナラズシテ、ソノ害毒ヲ子孫ニ傳フルモノナルコトヲ說ク、コレ疾病ノ先天性原因ヲ認メタルナリ。

ソノ他、伊邪那美神ガ火神ヲ產ミシトキ、悶熱懊惱シテ嘔吐セリトノ記載アリ。素盞嗚尊ガ宮殿ノ下ニ陰カニ糞便ヲ入レ置キタルニ天照太神コレヲ知ラズシテ糞上ニ坐シ、ヨリテ擧體不平ナリシトノ記事アリ。

神祇時代ノ醫術
祈禱

禁厭

(1)古事記神代卷上
(2)延喜式鎭火祭祝詞

又神武天皇ガ皇子手研耳命ト軍ヲ帥テ進ミテ熊野荒坂津ニ至リタルトキ神ガ毒氣ヲ吐キタルタメニ人物ミナ瘁(オエ)ヌトノ記載アリ。コレ物ニ傷ブラレ、若クハ毒ニ中リテ病ヲ起スコトヲ認メタルナリ。

支那ノ後漢書ノ東夷列傳ニ我邦ノ事ヲ記スルノ條ニ『行來度レ海、令ヲ一人不ニ櫛沐一不レ食レ肉、不ヲ近ヲ婦人ニ、名曰ニ持衰一云云、如シ病疾遭レ害、以爲ニ持衰不ヲ謹、便共殺レ之』トアリ。魏志ノ倭人傳、杜佑通典ノ東夷上編ニモ同樣ノ紀事アリ。持衰トハ肉ヲ食ハズ、婦人ヲ近ヅケズ、喪人ノ如クナルヲ云フモノニシテ、其修養ノ謹嚴ナラザルニヨリテ疾病ヲ起スモノナリト考ヘタルモノナラム。

神祇時代ノ醫術

神祇時代ノ醫術ハ、ソノ疾病ノ本態ニ關スル思考ニ相應シテ、第一ニ用ヒラレタルハ祈禱ナリ。若シ病アレバスナハチ占合シテ(鹿ノ肩骨ニ刻シ、樺皮ヲ以テ之ヲ燒キ、其粉末ノ狀ヲ見テ之ヲ判ズルナリ)神ノ敎ヲ仰グヲ旨トシ、歌舞シテ祈禱シ、以テ神靈ヲ調和スルヲ以テ治病ノ方法トシタリ。

禁厭(ハラヘ)ノ方法モ亦治病ニ用ヒラレタリ。禁厭ハマジナヒト訓ジ、解除、祈禱(イノリ)ノ類ヲスベテ言フコトナレドモ、今ハ狹キ意味ニテ、桃ヲ用ヒテ鬼ヲ避ケ(1)、水、匏、川菜、埴ヲ用ヒテ火神ノ荒ブルヲ防ギタル(2)類ヲ云フ。療病ト禁厭トハ竝ビ行ハレテ、療病ノ方、禁厭トナリ、又禁厭ノ法、療病トナリシモノナルベシ。

鎭火祭、鎭魂祭等ノ祭ハ主トシテ壽ノ長カランコトヲ祈リ、鎭花祭ハ專ラ病アラセザル祭ニシテ、病アルトキハ大祓、道饗祭ヲ行フコト古クヨリ行ハレタリ。コレ固ヨリ祭ナレドモ、病ヲ療スル方ニ取リテハ尙ホ禁厭ナリ。

藥物內用

(1)方術原論

藥物

藥物內用　病ヲ療スルニ方リテ祈禱、禁厭、更ニ一歩ヲ進メテ藥物ヲ內用スルニ至リシモ、禁厭ノ創マリタル時代ヲ距ルコト遠カラザルベシ。但シ病ハ神ノ意ニ本ヅクトセシコトナレバ、藥物ノ內用モ、ソノ病ヲ療スルコトハ奇シキ神ノ靈ニヨルトセルニテ、藥物ノ內服モ禁厭ノ意ニ出デタルモノナルベク、始メヨリシテソノ藥理學的效用ヲ求メシニハアラズ。

伴信友ガ說ハ『病ヲ療ス藥食モ、イヒモテ行ケバ病ヲ禁厭除ラシムル術ナガラ、其術ヲ行フヲクスルトイヒ、其術ニヨリテ食フ藥ヲ久須利ト云ヘルナリ』トイヒ、ソノ方ハモト神ノ幽事ニテアルガ中ニモ、現身ニ觸レテマノアタリ奇シキ貴トキ術ナレバ、ソノ術ヲ行フヲクスシ、クススナド云ヒ、ソノ術ニヨリテ內用スルモノヲバクスリト言ヘルモノナルベシ。

藥物ノ內用ハ酒ヲ以テ其始トスベシ。素盞嗚尊ノトキ、既ニ酒アリ。又大穴牟遲神、少名毘古那神ガ釀酒ノ法ヲ改修セシコトモ諸書ニ見エタレバ、酒ガ古クヨリ用ヒラレタルコトヲ知ルベシ。コレ支那ニテ酒ヲ以テ藥物ノ始トナスニ異ナラズ。

藥物　酒ノ外ニ、藥物トシテ應用セラレシモノハ、主ニ草木ノ皮、根、果實及ビ葉ト、一二動物及ビソノ臟器トナリシコトハ推定スルニ難カラズ。試ミニ古事記ノ神代卷ニ載セラレタル植物及ビ動物ヲ檢スルニ、其數甚ダ多ク植物ニテハ葛、菘菜(蕪菁)、蒲黃、薄、葦、比々羅木、樺、桃、赤酸醬、柏、樫、眞堅木、楓、擧樹、蘿、檜、茜、葡萄、海布、蜀椒、薏子、吳桃、竹、海蓴等アリ、動物ニハ鷄、千鳥、鴨、翠鳥、鵜、鼠、蜂、蠅、兎、猪、鷺、蟾蜍等アリ、其中ニテ蒲黃、桃

(1)備急八藥新論三卷

外科

(1)古史傳

ノ如キハ現ニ之ヲ治病ノ用ニ供シタルコト記錄ニ見エタリ。ソノ他ノ物ノ中ニモ或ハ之ヲ藥物トシテ用ヒラレタルモノアリシナラム。

佐藤方定ハ仁古太(人參)、於宇(附子)保寶加志波(厚朴)、阿滿紀(甘草)、依毘須加良美(胡椒)、爾須那(丹砂)伊奴萬面(巴豆)、飫寶師(大黃)ノ八藥ヲ擧ゲ、コノ八藥ハ神代ヨリ已ニ藥物トシテ行ハレタルモノナルコトヲ詳述セリ。

外科　創傷ニ對シテ出血ヲ止メ、疼痛ヲ鎭ムルノ目的ニ一定ノ藥物ヲ貼傳セリ。大穴牟遲神ガ赤裸ナル白兎ヲ治シ玉フニ蒲黃ヲツクシメ、又大穴牟遲神ガ燒石ニテ火傷セラレタルトキニ蛤(キサガヒ)ヲ焦シ、水ニテ母ノ乳汁ノ如クニシテ塗リテ治癒セシメタルコトアリ。

平田篤胤ハクスリハ貼傳ノ義ナリトシ、太古ノ藥ハ貼傳ヲ主トセルコトヲ說ケリ。ソノ說ニ據レバ、クスリハクスルテフ活語ノ體語ニナレルニテ、本ハ貼傳ルコトノ古言ナルヲ、藥ヲ用フルコトハ貼傳ルヨリシテ始マレルガ故ニソレヲ名負ハセタルナリ。古ハクスリトモクスヂトモ言ヒケント覺ユ。世ニクスヂトテ固リ物ヲ粘ルモノアルハ古言ノ遺レルナルベシト云フ。又平田篤胤ノ考ニ據レバ、本草和名ニ芍藥一名、解食、和名衣比須久須利、一名奴美久須利トアリ、奴美久須利ハ飫藥ニテ、コレハ藥ハ傳ルガ本ナルガ故ニ、飫デ病ヲ治ス藥ヲバ殊ニ飫藥トイヘルナリ、然ルラ後ニハ飫藥ノ方ノ漸々ニ精シク弘クナリシ故ニ、マタ更ニ傳藥トイフ語モ出來ニケム、衣比須久須里ト云フ由ハエビストト云フ語ハ常ニ異ナレル事物ヲ言フ語ニテ、クスリハツクヘキ物ナルニ飫ムハ異ナル故ニ衣比須藥トイヘルナリト云フ。

稍〻後ノ代ニ至リテハ塗抹、外敷ノ他ニ、刺鍼ノ術モ行ハレタルモノト思ハル。神祇時代ニハ已ニ鍼モアリ

産科

兒科

衛生

水治療法

温泉

シコトナレバ膚肉ニ針シテ血ヲ取リシコトモアリシナラム。日本書紀、允恭天皇紀ニ、『久離(ウカリ)ニ篤疾ニ不レ能ニ歩行一、且我已欲レ除レ病、獨非ニ奏言一、而密破レ身治レ病、猶勿(ナシ)レ差(イエルコト)』トアルトスナハチ刺鍼ノ術ヲ施セシモノカ。

産科　伊邪那美神ノ時已ニ産室ノ備アリ、産スルトキニハ必ズ新ニ家ヲ建テ、コレヲ産屋トシ、産畢レバ火ヲ以テ室ヲ焚キタリ。助産ニ關スル伎術モ已ニ此時ニ存セシナルベシ。

兒科　木花開耶姫(コノハナサクヤヒメ)ノ産ニ方リテ、竹刀ヲ以テ其兒ノ臍帶ヲ截リシコト見ユ。又乳母ヲ以テ其兒ヲ養ヒシコトモ見エタリ。コレヲ兒科ノ濫觴トスベシ。

衛生　鎮魂ノ法アリ。魂ヲ鎮メ和ラグルコト神ニ仕フルガ如クニシテ、穢サズ、傷メザルコトヲ專トシ、且ツ五穀ヲ多ク食シ、酒ト菜トヲ少シク取リ、肉ヲ稀ニ食フテ性命ヲ養フベシトセルモノニシテ、衛生ノ意先ヅコニ現ハレタリ。

水治療法　身體ノ汚穢ヲ拔除スルノ意ニテ沐浴大ニ行ハレシガ、コレモ治病ノ法トシテ用ヒラレタリ。支那ノ書、兩朝平壤錄、潛確居類書等ニ我邦上古ノ風俗ヲ記スルノ條ニ『其俗信レ巫、疾無ニ醫藥一、病者裸而就ニ水濱一、杓レ水、淋ニ沐之一、面ニ四方一、呼ニ其神一、誠禱卽愈』ト記載セルヲ見レバ當時我邦ノ俗ハ水治療法ニヨリテ病ヲ治スルコトヲ主トセルニ似タリ。

温泉ニ浴シテ病ヲ醫スルコトモ大穴牟遲神、少名毘古那神ノ頃ニ始マレリ。コレ續日本紀ニ引クトコ

ロノ伊豫風土記ノ文ニ徵シテ明ナリ。

參考書籍

(1)古事記　太安麿奉勅撰　和銅五年成
(2)日本書紀　舍人親王及太安麿奉勅撰　養老四年成
(3)風土記　元明天皇和銅年間成
(4)風土記逸文　栗田寛校訂
(5)古語拾遺　齋部廣成　大同二年
(6)古事記傳　本居宣長　天保十五年
(7)奇魂　佐藤方定　天保二年
(8)醫方正傳　花野井有年　嘉永五年
(9)古醫道沿革考　櫨田直助

奈良朝以前

(1)四層紀元前九七年乃至紀元七〇九年

第二章　奈良朝以前ノ醫學

崇神天皇ノ朝、始メテ神ト人トノ別アリテヨリ、大和ノ盛世ヲ經テ、文武天皇ノ朝ニ至ルマデノ間ヲ奈良朝以前ノ時代トス。此期ノ前半ハ韓土服屬ノ世ニシテ、文學技藝、彼地ヨリ次第ニ傳ハリテ韓醫

韓醫方ノ輸入

(1)西紀紀元前約一五〇〇年

(2)西暦紀元前三三年

方コノ期ニ興レリ。後半ヲ佛教渡來及ビ隋唐往來ノ世トス、隋唐ノ文藝ニ依倣シテ唐醫方始メテ起レリ。又佛教ノ渡來ニヨリテ間接ニ印度ノ醫術ヲモ傳ヘタリ。左ニソノ歴史ノ梗概ヲ述ブベシ。

韓醫方ノ輸入

我邦ト高麗半島トノ交通ハ已ニ神代ニ始マリ、支那トノ交通ハ彼地ノ周ノ代(1)ノ頃ニ始マル。而カモコレ我ガ西陲一部人民ノ彼土ニ往復セシニ止マレリ。崇神天皇ノ代、任那ニ通ズル(2)ニ至リテ外國ノ風漸ク我邦ニ入リ、神功皇后新羅ヲ征服シテヨリ以來、文藝智巧ノ海外ヨリ傳輸セラレ、我邦文化ノコレガタメニ影響ヲ受クシコト明ナリ。次デ應神天皇ノ時ニ及ビテ、百濟ヨリ論語及ビ千字文等ノ書籍ヲ貢シ、支那ノ學問ハコレニ依リテ傳ハリ、儒教モ亦コレニ伴ナフテ輸入セラレタリ。

是ヨリ先キ、孝靈天皇ノ朝、秦ノ徐福、仙藥ヲ求メテ我邦ニ來タリ斯土ニ留マル。ソノ帶フルトコロノモノニ百工技藝アリ、醫人モ亦ソノ中ニアリシト云フ。然レドモ公ニ外國醫方ノ採用セラレタルハ允恭天皇ノ朝ニ始マル。允恭天皇ノ三年(1)秋八月、新羅王、金波鎮漢紀武(2)ヲ調貢大使トナシ、御調八十一艘ヲ貢進ス、此人深ク醫方ヲ知リ天皇ノ疾ヲ治シテ效アリ、天皇之ヲ歎ビ厚ク賞シテ國ニ歸ヘシ給フ。次デ雄略天皇ノ三年(3)詔シテ良醫ヲ百濟ニ徵シ給フ、百濟貢スルニ高麗ノ醫德來ヲ以テス、德來徵ニ應ジテ來タリテ難波ニ居ル。子孫世々醫ヲ以テ業トナシ、難波藥師ト稱ス。

(1)西暦紀元四一四年

(2)金ハ姓、波鎮ハ官、漢紀ハ號、武ハ名

(3)西暦紀元四五八年

佛教ノ渡來

(4)西暦紀元五五二年

(1)西暦紀元後六〇二年

欽明天皇ノ十四年(4)夏六月、詔シテ使ヲ百濟ニ遣ハシ、醫博士・曆博士・易博士等ヲシテ遞番ニ來朝セシメ、且種々ノ藥物ヲ附送セシム。翌年春正月百濟國詔ヲ奉ジテ醫博士王有陵陀、採藥師潘量豐・丁有陀ヲ貢ス。コレニ依リテ韓醫方益〻熾ナルニ至レリ。

佛教ノ渡來

欽明天皇ノ朝ニ、百濟ヨリシテ佛像・佛具・經論ヲ獻ジタリ、朝廷ノ議始メハ之ヲ排斥シタレドモ、後漸次ニコレヲ信奉シ、推古天皇ノ三十一年ニハ寺四十六所、僧八百十六人、尼五百六十九人ノ多キニ達シ、佛教モ漸ク興隆シタリ。ソレマデノ風、病アレバ神ヲ祈リテ之ヲ治スルヲ例トセルガ、ココニ至リテ佛陀ニ祈願シテ病ヲ治スルコト行ハレ、僧侶ノ醫ヲ兼ヌルコト、既ニ端ヲ此ニ發セリ。

勸勒像

推古天皇ノ十年(1)冬十月。百濟ノ僧勸勒來朝シテ歴書・天文・遁甲・方術等ノ書ヲ獻ズ。此時書生三四人ヲ選ビテ就テ學バシム。山背臣日竝

唐醫方ノ輸入

(1)西暦紀元六〇八年

大寶律令

大寶令

立方術ヲ受ク。勸勒ハ僧侶ニシテ、醫方ニ通ズルモノカ。思フニ當時此類ノ人多カリシナラム。

唐醫方ノ輸入

推古天皇ノ十六年(1)九月醫惠日・倭漢直福因等ヲ隋ニ遣ハシテ醫ヲ學バシム。後十五年ニシテ歸朝シ、支那ノ醫方ヲ我邦ニ傳ヘタリ。當時支那ニアリテハ隋亡ビテ唐コレニ代リ、醫學ニハ病源候論・千金方等ノ著述アリ、所謂隋・唐醫學ハ韓醫方ニ代ハリテ我邦ノ醫學ノ上ニ著明ノ影響ヲ致シタリ。約メテ言ヘバ、神祇時代ノ醫學ハ神秘的・魔術的ナリシニ、ソレガ進ミテ經驗的・宗教的ノ醫術トナリ、此時代ニナリテ更ニ印度及ビ支那ノ自然哲學的醫學ノ影響ヲ加フルニ至リタルナリ。

大寶律令

孝德天皇ノ卽位元年始メテ年號ヲ立テテ大化ト曰ヒ、又隋・唐ノ制ニ倣ヒテ法ヲ立テシカ、未ダ律令ヲ定ムルニ及バズ、天智天皇ノ時ニ至リテ令十二卷ヲ選定シ、天武天皇ノ時ニ之ヲ修正シ、文武天皇ノ大寶元年ニ至リテ天智天皇以來ノ制ニ據リテ律六卷、令十一卷ヲ選定ス、之ヲ大寶令トイフ。コニ至リテ我邦始メテ制度アリ。而カモソノ醫疾令ハ散佚シテ世ニ傳ハラズ。類聚三代格・政事要略・令集解・續日本紀等ノ諸書ニ引用セル所ノ逸文ヲ輯メテ僅ニソノ梗概ヲ見ルベキノミ。

醫疾令

(1)體療、創腫、少小、耳目口齒科

職員令ニ據レバ、中務省ニ內藥司アリ、正・佑・令史・侍醫・藥生等アリテ、御藥ヲ司トル。宮內省ニ典藥寮アリ、頭・助・允・大屬・少屬・醫師・醫博士・醫生・針師・針博士・針生・按摩師・按摩博士・按摩生・咒禁師・咒禁博士・咒禁生・藥園師等アリテ總テ醫事ヲ掌ドル。內藥司・典藥寮ノ外、衞門府ニ醫師一人、左右衞士府ニ醫師各二人、左右兵衞府ニ醫師各一人、太宰府ニ醫師一人、諸國ニ醫師一人アリ。ソノ醫師ニ任ゼラレルモノハ典藥寮及ビ國學ノ敎習ヲ卒ヘ、一定ノ考試ヲ經タルモノニシテ、博士ハ醫師ノ內ノ法術優長ナルモノヲ採リテ之ニ任ズル制ナリ。

學校ニハ大學ト國學トアリ。大學ハ之ヲ京師ニ置キ、大學寮ニテ之ヲ管シ、國學ハ每國ニアリテ國司之ヲ掌ドレリ。醫學ノ敎育モ亦コレニ準ジ、ソノ學校ニハ大學ト國學トアリ、大學ハ典藥寮ニ屬シ、藥師ノ姓ノモノ及ビ二世醫術ヲ承ケタル名家ノ子弟ヲ取リ、又次ニ庶人ノ聰明ナルモノヲ取ル。國學ハ國每ニアリテ、醫方ヲ敎授スルコト典藥寮ノ敎習ニ準ズ。

醫疾令ニ據レバ習學ノ年限ハ體療ヲ學ブモノハ七年、少小及ビ創腫ヲ學ブモノハ各五年、耳・目・口・齒ハ四年、針生ハ七年、按摩生ハ三年、咒禁生ハ三年、女醫ハ七年ヲ定トス。

敎授ノ法、醫生ハ甲乙經・脈經・新修本草ヲ講讀シ、兼テ小品方・集驗方等ノ方ヲ習ハシメ、已ニ諸經ヲ讀メバ、業ヲ分チテ(1)敎習セシム。針生ハ素問・黃帝針經・明堂・脈訣等ノ書ヲ講讀シ兼テ流注經等ノ書ヲ講ゼシム。按摩生ハ按摩・傷折ノ法及ビ判縛ノ法ヲ學ブ。咒禁生ハ咒禁シテ解忤・持禁スル

ノ法ヲ學ブ。女醫ハ安胎・產難及ビ創腫・傷折・針灸ノ法ヲ學ブ。

考試ノ法、醫生・針生・按摩生・咒禁生ハ博士一月ニ一タビ之ヲ試ミ、典藥ノ頭助一年ニ一タビ之ヲ試ミ、宮內ノ卿・輔、年ノ終ニスベ試ミ、業成ルノ日ハ其行狀及ビ學術ノ成績ヲ具シテ之ヲ太政官ニ申送セシメ式部更ニ之ヲ試ム。私カニ自カラ學習シテ醫療ヲ解スルモノアリテ考試ヲ請願スルモノアレバ醫針生ノ例ニ準シテ考試ヲ受ルコトヲ得セシム。國ノ醫生ハ醫師月每ニ之ヲ試ミ、年ノ終ニ國司之ヲ試ム。是ニ由リテ之ヲ觀ルニ、醫生ノ講讀スベキ課程ヲ定メ、考試ノ法則ヲ制シ、修學ノ年月ヲ限リ、私カニ學習セルモノヲ試驗シテ採用スル等、諸般ノ制度、略〻備ハレリ。又體療(內科)、創腫(外科)、少小(兒科)、耳・目・口・齒等專門ノ科目ヲ別ツコトモ已ニ此時ニ始マレリ。シカモ這般ノ制度ハ唐ノ制度ヲ摸倣セルモノニシテ、ソノ多クハ空文ニ止マリ、實際ニ行ハレタルハ僅ニソノ少部分ナリシコトヲ憾トスベシ。

參考書籍

(1)日本書紀
(2)日本書紀通證　谷川士清著
(3)令義解　清原夏野等撰　天長十年成
(4)醫疾令　塙保己一輯錄

奈良朝
(1)西暦紀元七一〇年
(2)西暦紀元七八四年

第三章　奈良朝ノ醫學

元明天皇ノ和銅三年(1)ヨリ桓武天皇ノ延暦三年(2)ニ都ヲ山城ニ移シ給ヒシマデ前後八代、七十餘年、帝都ヲ奈良ニ奠メ給ヒシ間ヲ奈良朝時代ト名ヅク。前期推古天皇ノ頃ヨリシテ隋・唐ノ醫方漸ク行ハレ、唐トノ交通益〻盛ナルヲ致シ、次ギテ此期ニハ支那ノ制度・文物ノ輸入ニ力ヲ盡セルナリ。又此時代ニアリテ、朝廷佛敎ヲ崇信シ、コレヲ勸奬スルコト太ダ至レルガ故ニ我ガ醫術ノコレガタメニ影響ヲ受クシコトモ亦尠小ナラズ。

僧醫

佛法ノ行ハルルコト漸ク盛ナルニ從ヒテ、僧尼ノ咒符・祈禱ヲ以テ災厄ヲ祓除スルニ兼テ治病ノコトニ干與スルコト益〻其度ヲ加フルニ至リ、僧ニシテ醫ヲ兼ネタルモノ此期ニ多シ。聖武天皇ノ病ミ給フヤ、看病ノ禪師一百二十六人ノ多キニ及ベリト云フニテ、ソノ盛ナルコトヲ推スベシ。ソノ中ニツキテ特ニ名聲ノ高カリシモノハ法藏・法蓮・法榮・鑒眞ナリ。

鑒眞

鑒眞ハ唐ノ楊州、江陽縣ノ人、年十四ノ時佛像ヲ見テ出塵ノ志ヲ起シ、父ニ乞フテ出家ス、鑒眞材識兼該博ク經論ニ涉リ、最モ戒律ニ精シ、天寶元年楊州ノ大明寺ニアリ、衆徒ノタメニ律ヲ講ス、是ヨリ先キ、我ガ天平五年、僧榮叡、普照等遣唐大使丹墀眞人廣成ニ從ヒテ唐ニ留學ス、二人竝ニ鑒眞ニ從フテ學ブ、因リテコレニ勸メテ東遊セシム、十五年十二月鑒眞遂ニ舟ヲ買テ楊州ヲ發ス、二弟祥彦、道興及ビ榮叡、普照等八十四人之ニ從フ、颶ニ遇ヒ僅ニ身ヲ以テ免カル、後五年再ビ發足ス、漂流シテ日南國ニ至ル、會々榮叡物化ス、鑒眞悲傷禁セズ、哭泣明ヲ失フニ至ル、後又船ヲ出スコト三次、竝ニ志ヲ得ズ、而カモソノ東遊ノ志堅クシテ拔クベカラザルモノアリ、天平勝寶五年十月我ガ遣唐使ノ船ニ托シテ東遊ノ途ニ上リ、弟子法進等八人之ニ從フ、六年正月二十六日太宰府ニ入リ、二月一日難波ニ到ル、次デ寧樂ニ入リ東大寺ヲ館トス、八年五月勅シテ和上ニ拜シ、次デ大和上ノ號ヲ賜フ、又戒院ヲ建テ僧尼ノ戒律ヲ學バントスルモノヲシテ就テ學バシム、戒院ハ則チ後ノ唐招提寺ナリ、七年五月六日物化ス、年七十七。鑒眞學問該博志行高潔、一代ノ師表タリ、鑒眞又醫藥ノ事ニ通ジ、殊ニ本草ニ精シ、本朝ノ諸藥物ソノ眞僞ヲ知ラザルモノ多シ、鑒眞ニ勅シテ眞僞精粗ヲ辨定セシム、鑒眞鼻ヲ以テ之ヲ別チテ一モ錯誤スルコトナシ、韓廣足就テ學ブ。後皇太后弗豫、

鑒眞像

鑒眞藥ヲ獻ジテ效アリ、因リテ大僧正ヲ授ケラレ、備前水田一百町ヲ賜フ、世ニ鑒上人祕方ヲ傳ヘ、又ソノ像ヲ祭ル、我邦名醫多シト雖モ、像祀セラルルモノハ鑒眞ト田代三喜トノミナリト云フ(1)。

(1)本朝醫談

施藥院

聖武天皇ノ天平二年(2)始メテ皇后職ニ施藥院ヲ置カル、コレ皇后藤原氏(光明皇后ト稱ス)ノ意ニ出デ、饑病ノモノヲ療養スルトコロナリ。コレヲ慈惠醫院ノ始トス。

是ヨリ先キ、天武天皇ノ白鳳八年冬十月、詔ジテ僧侶ノ老ヒタルモノ、或ハ病メルモノヲ收容スルタメニ舍屋ヲ建テ、コレヲ保護セシメラレタルコトアリ。或ハ云フ、コレヨリ先キ、養老七年、興福寺内ニ施藥・悲田ノ二舍アリト。又云フ、是ヨリ先キ、聖德太子ノ四天王寺ヲ建テラレシトキ、既ニ敬田院・悲田院・療病院・施藥院アリ、爾來諸處ニコノ四院アリテ、貧窮及ビ重病ノモノヲ養ヒ、又ハ貧窮者ニ業ヲ授ケ、生ヲ遂ゲシム、而シテソノ敬田院ノトハ僧侶ノ舍、殘三院ハ多クハ惡疾、穢多ノ聚マルトコロナリト。

(2)西暦紀元七三〇年

萬葉集

萬葉集

萬葉集ハ孝謙天皇ノ朝ニ橘諸兄コレヲ撰ビ、次デ大伴家持コレヲ增訂セルモノト傳フ、ソノ多クハ奈良朝時代ノ人ノ歌ヲ集メタルモノナリ。固ヨリ歌詠ニシテ、學術ノ書ニアラズト雖モ、作者ハ各階級ヲ含ミ、尙ホコノ中ニ當時ノ醫學的思想ヲ模索シ得ルモノアリ。山上憶良ガ天平五年ニ造レル「沉痾自哀文」ノ中

平安朝

(1)西暦紀元七八四年
(2)西暦紀元一一八六年

ニ、自己ノ宿痾ヲ歎キテ、我レ何ノ罪アリテカ、コノ重疾ニ遭フカトイヒ、龜トノ門ヲ叩キ巫祝ノ室ヲ問フテソノ教ニ隨テ幣帛ヲ奉シ祈禮スルモ病ハマスマス重シ、楡樹、扁鵲、華陀、和緩、葛稚川、陶隱居、張仲景等ノ大醫ハ今アラザレバ敢テ及ブベカラズト歎シ、更ニ任徵君ノ言ヲ引テ、「病ハ口ヨリ入ル、故ニ君子ハソノ飲食ヲ節ス」トアレバ、人ノ疾病ニ遇フハ必ズシモ妖鬼ナラズト述ベタリ、既ニ張仲景ノ名ヲモ擧ゲタレバ、當時ノ醫家ハ既ニ隋・唐醫家ノ所說ヲ明ニシ、疾病ヲ生ズルニハ身體內ノ原因トアリ、內因ハ身神疲勞・怒・悲歎・陰陽二氣不調ニシテ、外因ハ風・寒・暑・濕等ナリトスルノ說ヲ知リ居レルナルベシ。憶良ガ自哀ノ文ニ徵シテモ、コノ般ノ消息ヲ推測スベシ、又萬葉集ノ歌ノ中ニ夏瘦セニウナギヲ食フテ效アリトノ意味ヲ示シタルモノアリ。古來ヨリ傳ハレル民間療術ノ方モ多ク存シタルナルベシ。

參考書籍

(1)續日本紀　菅原道眞奉勅撰　延曆十三年成
(2)萬葉集

第四章　平安朝ノ醫學

桓武天皇ノ延曆三年[1]ニ帝都ヲ山城ニ遷シ給ヒシヨリ文治二年[2]源頼朝ガ幕府ヲ鎌倉ニ開キタルマデ、

大同類聚方

凡ソ四百年ノ間ヲ平安朝トイフ。我邦古代祭政一致ノ治ハ隋・唐トノ交通ニヨリテ漸次ニ變化シ、此期ニ至リテハ敬神・崇佛ヲ以テ國政ノ大綱トナシ、嵯峨天皇以來ハ佛教ノ歸依殊ニ深ク、國民ノ思想ハ一ニ佛教ノ左右スル所トナリ、疾疫起レバ僧徒ヲシテ加持・祈禱セシメテ醫藥ヲ後ニシ、穢惡ヲ忌ムノ極、病人ヲ厭ヒテ之ヲ路上ニ棄ツルノ弊習ヲ致セシコトアリ。佛教ニ竝ビテ陰陽・五行ノ說モ傳ハリ、陰陽寮・陰陽博士アリテ朝儀ニ拘忌多ク、風俗ハ唐風ヲ摸シテ益〻浮華トナレリ。我ガ醫學ハ斯ノ如キ社會ノ風潮ニ際シ、力ヲ窮メテ唐ノ醫方ニ依倣シ、殊ニ遣唐留學生ノ歸朝シテ盛ニ支那ノ文物ヲ傳ヘタルニヨツテ隋・唐ノ醫學ハ益〻盛ニコノ時代ニ行ハルルニ至レリ。

大同類聚方

大寶醫疾令ノ制ニ據レバ、當時醫學ヲ修ムルモノノ讀習スベキハ甲乙經・脈經・本草・素問・黃帝針經・明堂・小品方・集驗方等舶載ノ醫書ナリシガ、コレニ次ギテ病源候論・千金方等隋・唐醫書ノ多クハ支那ヨリ輸入セラレタリ。コレ等ハ當時醫家ノ金科玉條トスルトコロナリシガ、平城天皇ノ時ニ至リテ勅シテ大同類聚方一百卷ヲ撰セシメラルルニ及ビテ始メテ我邦撰述ノ醫方書アリテ現ハル。

平城天皇古傳ノ失スルコトヲ憂ヒ玉ヒ、命ヲ國造、縣主、稻置、別首又ハ諸國大小神社、又ハ民間ノ名族、舊家等ニ下シテソノ傳來スルトコロノ藥方ヲ徵シ、出雲廣貞、安倍眞直等ヲシテ、之ヲ選出類聚セシメ、大同類聚方

(1)大同三年（西暦紀元八〇八年）大同類聚方成ル）

(2)眞田本　出雲本　豐後本　因幡本　北畠本　衣川本　松岡本　駿河本　延長本　抜萃本

百卷ヲ選ビ、之ニヨリテ施治セシム、是ニ於テ古ノ遺方復々世ニ現ハルルヲ得タリ(1)。

日本後記ヲ案スルニ大同三年ノ條下ニ安倍眞直・出雲廣貞等ガ勅ヲ奉ジテ選集スルトコロノ大同類聚方、功畢リテ上表スルトコロノ文ヲ載セタリ。惜カナコノ大同類聚方ハ佚シテ傳ハラズ、今日坊間ニ存スルトコロノ大同類聚方數種(2)ノモノハスベテ後人ノ假托ニ出デタル僞本ニシテ一モ信用スベキモノアラズ。

出雲廣貞像

大同類聚方ノ撰者出雲廣貞ハ、攝津ノ人、侍醫トナリ、中外記、典藥助、但馬權椽ヲ兼ス、大同三年勅ヲ奉ジテ安倍眞直ト共ニ大同類聚方一百卷ヲ撰ブ、又別ニ命ヲ蒙ムリテ唐制ニヨリテ、藥升大小ノ量ヲ定ム、廣貞後ニ內藥正ニ擧ゲラレ、宿禰ノ姓ヲ賜フ、難經開委ノ著アリ、貞觀十二年歿ス。

安倍眞直ハ左京ノ人、弘仁二年進士ヲ主殿頭兼豐後守トナリ、次デ左少辨ニ任ゼラル。

金蘭方

清和天皇ノ貞觀年間、菅原岑嗣、物部廣泉、當麻鴨繼、大神虎主等詔ヲ奉ジテ金蘭方五十卷ヲ撰シ、同十年(1)書成リテ上進ス。金蘭方ト題シテ今ノ世ニ傳ハルモノ(2)ハ後人ノ假托ニ出ヅルモノニシ

金蘭方

(1)西暦紀元八四六年
(2)北畠家傳來本　文政年間大江廣彥校刊本

テ、調進藥方ノ如キハ延喜式ヲ抄出セシモノノ如ク、醫方ハ主ニ千金方ニ依據セルニ似タリ。

菅原岑嗣、左京ノ人、父出雲朝臣廣貞、醫術ニ精シ、岑嗣家業ヲ繼ギ、弘仁十四年醫博士ニ任ジ、天長四年內藥佐ヲ兼ス、後累遷シテ典藥頭トナル、貞觀五年自カラ辭シテ隱退シ、十年出雲姓ヲ改メテ菅原トス、貞觀十一年卒ス、年七十八。

物部廣泉、ソノ傳ハ後ニ出ヅ。

當麻鴨繼、齊衡三年典藥頭トナリ、後主殿頭ニ轉ジ侍醫ヲ兼ス、貞觀十五年三月卒ス。

大神虎主、右京ノ人、本姓神直、後大神朝臣ノ姓ヲ賜フ、承和二年左近衞醫師トナリ侍醫ニ遷リ、貞觀二年內藥正ニ任ズ、同年卒ス、年六十三。

醫心方

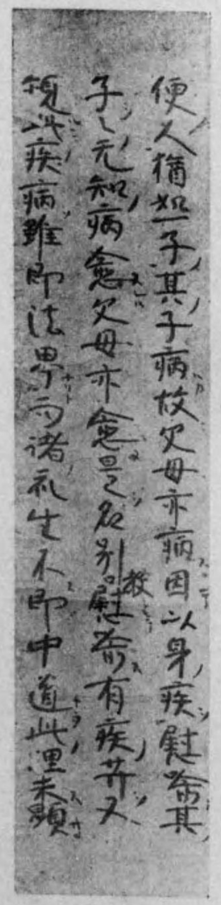
醫心方ハ丹波康賴ノ撰述スルトコロニシテ全部三十卷、主ニ隋ノ巢元方ノ病源候論ニ依リテ說ヲ立テ、參スルニ隋・唐方書百餘家ノ論ヲ以テシ、主療諸方ヨリ本草、藥性、鍼灸、養生、服石、房內、食餌等ニ至ルマデ、悉ク載セザルハナシ。康賴ガコノ書ヲ撰ビタルハ天元五年(1)ニシテ、圓融天皇ノ永觀二年十一月二十八日、書成リテコレヲ奏進セリト云フ。實ニ九百餘年前ノ撰述ニ係リ、又、我邦ニ現存セル方書ノ最古ノモノトス。其中ニハ本國ノ支那ニハ既ニ佚亡セルトコロノ遺典ヲ收メタレバ、コレニ依リテ隋・唐醫學ノ眞相ヲモ窺フコトヲモ得ベシ。

醫心方

(1)西暦九八二年

丹波康賴、丹波、矢田郡ノ人、其先ハ後漢ノ靈帝ニ出ヅ、靈帝五世ノ孫阿留王、應神天皇ノ時ニ歸化ス、天皇コレヲ大和國檜隈郡ニ封ジ以テ使主トナス、其子都賀ニ二子、山木、志努アリ、志努別ニ家ヲ成シ、出デテ丹波國ニ居ル、其五世ノ孫ヲ大國ト云フ、康賴ハ大國ノ子ナリ、特ニ醫術ニ精シ、丹波宿禰ノ姓ヲ賜ヒ、累遷シテ鍼博士、佐衛門佐、兼丹波介ニ至ル、天元五年醫心方三十卷ヲ撰ブ、其書、隋唐方書ヲ捃摭シ、稱シテ本邦方書ノ府庫トナス、永觀二年、書成リテ奏進ス、又以テ諸生ヲ課試ス、長德元年四月十九日卒ス、年八十四。

丹波康賴像



丹波康賴遺墨

此期ノ醫學

醫心方及ビ其他二三ノ書籍ニ據リテ、平安朝時代ニ於ケル醫學ノ狀況ヲ各科ニ別チテ略述スレバ、大要以下ニ擧グルガ如シ。

解剖學

此期ノ解剖學ハ他ノ諸科ト同ジク、コレヲ支那ノ醫學ニ得タリ。支那ノ古醫書、『靈樞ニ『其死可ニ解剖而視ヒ之』ノ語アリ、漢書王莽ガ傳ニ翟義ノ黨王孫慶ヲ誅シ、大醫尙方ト巧屠トヲシテ共ニ之ヲ刳剝セシメ五藏ヲ量度セルコトヲ記シ、文獻通考ニ楊介ノ存眞圖一卷ノ名ヲ揭グ、其他歐希範ノ解剖圖、華陀ノ內照圖等アリテ傳ハル。コレニ據リテ見ルニ、支那ノ古代ニアリテ、屍ヲ解キ見タルコトナキニアラザリシモ、ソノ觀察甚ダ粗鹵ニシテ、僅ニ臟腑ノ名目ヲ擧グルニ過ギザリシナリ。

支那醫學ノ所說ニ據レバ、人體ノ骨ニハ完骨、枕骨、曲領骨、缺盆骨、叉骨、巨骨、肩骨、肘外大骨、肘內大骨、輔骨、踝骨、兌骨、椎節、腰髖骨等ノ名稱ヲ擧ゲ、脊椎（椎節）ハ二十一個ヨリ成レリトセリ。筋肉及ビ關節ノ個々ニツキテ記述スルトコロナシ。內臟トシテハ五臟六腑ヲ擧ゲタリ。五臟ハ主要ノ內臟ニシテ心、肝、脾、肺及ビ腎ヲ云フ。而シテコノ五臟ハ各、宇宙ノ元素（木、

〔註〕ココニ載スルトーロノ解剖圖ハ正和四年（西暦一三一五年）梶原性全カ撰フトコロノ萬安方中ニ載スルモノ。恐クハ歐希範ノ解剖圖ヲ寫セシモノカ。

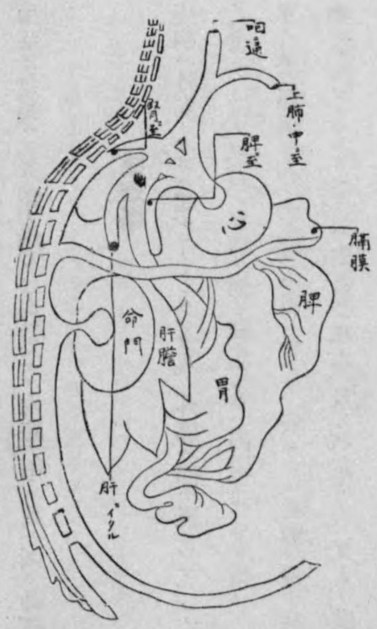
火、土、金、水）ニ相當スルモノトシテ、四季、色及ビ味モソレニ相應シテ各個ニ配當セラル。

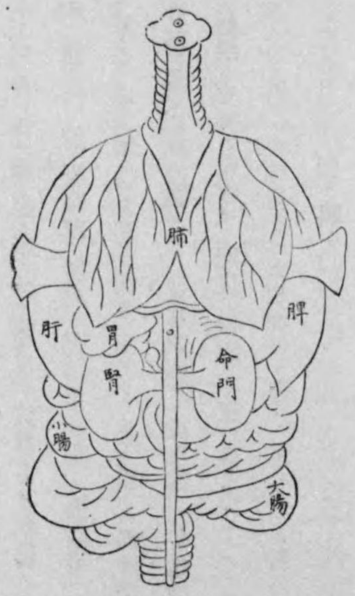
	〔元素〕	〔四季〕	〔色〕	〔味〕
心臟	火	夏	赤	苦
肺臟	金	秋	白	辛
腎臟	水	冬	黑	鹹
肝臟	木	春	青	酸
脾臟	土	各季節ノ最後ノ十八日	黃	甘

腑ハ主要內臟ノ補助タルモノニシテ、胃、大腸、小腸、膽、膀胱、三焦コレニ屬ス。

臟腑ハ脈ニヨリテ連絡セラレ、ソノ脈ハ竝ビニ手足ニ出デ、腹背ニ循環シ、全身至ラザルトコロナシ。而シテ、ソノ脈ハ手ニ三陰・三陽アリ。足ニ三陰・三陽アリ、共ニ之ヲ十二經トシ、別ニ任脈・督脈ヲ併セテ十四經トス。所謂經絡ノ說コレナリ。

生理學





當時ノ生理學ハ自然哲學的ノモノナリキ。ソノ根本トスルトコロハ陰陽ノ原理ニシテ、コノ陰ト陽トノ二個ノ原理ニヨリテ臟腑ノ機能ヲ說明セリ、卽チ、臟ヲ陰トナシ、腑ヲ陽トナス。臟ハ藏ニシテ、神ハ心ニ藏ル、魂ハ肝ニ藏ル、精ハ腎ニ藏ル、魄ハ肺ニ藏ル、志ハ脾ニ藏ルト云フ。

六腑ノ中、胃ハ倉稟ノ官、水穀ノ海、六腑ノ大源ナリ。大腸ハ傳導ノ官、小腸ハ受盛ノ官ナリ。膽ハ清淨ノ府、中正ノ官ニシテ決斷出テ、腎ハ作强ノ官ニシテ技巧出ヅトナセリ。

腦及ビ脊髓ハコレヲ骨ノ髓トシテ貴要ナル內臟ノ中ニ列セズ。神經ニツキテハ殆ド全ク無知ナリキ。

病理學

疾病ハ外邪ノタメニ起ルモノトセラレタリ。外邪ハ卽チ風ニシテ、コノ風ハ宇宙ニ遍滿スルトコロノ四時五行ノ氣ナリ。コノ氣若シ皮膚ノ間ニ藏ルルトキハ內通ズルコトヲ得ズ、外泄ルルコトヲ得ズシテ病ヲ成ス、又外邪ノ氣ガ經脈ニ入リテ五臟六腑ニ行クヤ、各々ソノ臟腑ニ從テ病ヲ生ズ。而シテ外邪ノ氣ヲシテ、コレニ乘ジテ病ヲナサシムルモノハ寒・熱・風・濕及ビ飮食ナリ。又人ノ虛實・男女・老少・地理・風俗ニヨリテモ疾病ノ成生ニ相異アリ。外邪ニ中ラズト雖、內因ニヨリテ病ヲ生ズルコトモ亦認メラレタリ、內因ニヨリテ病ヲ生ズルハ喜・怒・憂・思ノ神ヲ傷ブリ、貧賤ノタメニ形神ノ苦シムニヨリテ疾病ヲ釀スノ類ナリ。

此ノ如キハ、隋・唐醫家ノ所說ニ本ヅクモノナルガ、醫心方ニハ又、南海寄歸傳ヲ引テ、四大不調ノ說ヲ擧ゲ、地大增セバ身ヲシテ沈重ナラシメ、水大積レバ涕涎ヲシテ常ニ乖カシメ、火大盛ナルトキハ頭胸壯熱ヲ起シ、風大動クトキハ氣息擊衝スト說キタリ。コレ印度ノ醫說ヲ傳ヘタルナリ。乃チ知ル、當時ノ醫學ト支那ノ醫說ト、印度ノ醫說トヲ交ヘ採リタルモノナルコトヲ

內科

大寶令ニ體療トアルハ、身體諸病ヲ治スルトイフ意味ニテ、本ト唐ノ制ニ倣ヒテ名ヅケラレタルナリ。支那ニテモ後ニハ方脈科又ハ大方脈科ト稱シ、我邦ニテモ後世ニハ本道ト稱シタリ。コレスナハチ、今日ノ內科ナリ。

コノ期、嵯峨天皇以後、淳和、仁明、文德諸天皇、心ヲ醫術ノ事ニ留メ玉ヒ、勉メテ醫道ヲ振興セシメ玉ヒシヨリ、名醫哲匠ノ世ニ出デシモノ尠カラズ。羽栗翼、小野藏根、出雲廣貞、安倍眞直、物部廣泉、菅原梶成、菅原岑嗣、當麻鴨繼、大神庸主、丹波康賴、深根輔仁等ハ其選ナリ。

羽栗翼。山背國乙訓郡ノ人、父古麻呂、學生ヲ以テ阿倍仲麿ニ從ツテ唐ニ入リ、女ヲ娶リテ翼ヲ生ム、翼年十六ニシテ天平六年父ト共ニ歸ル、初メ僧タリシモ後還俗シテ醫方ヲ學ビ名醫ノ間エアリ、延曆五年內藥正トナリ侍醫ヲ兼ス、延曆十七年歿ス。

小野藏根。明醫ヲ以テ世ニ聞ユ、集註太素三十餘卷ヲ選ブ。

出雲廣貞、傳ハ前ニ前ヅ。

安倍眞直、傳ハ前ニ出ヅ。

物部廣泉、傳ハ別ニ出ヅ。

菅原梶成、右京ノ人、醫術ニ精シ、承和元年遣唐使ニ從フテ唐ニ入リ、六年夏歸朝ノ途次、暴風ニ遇ヒ辛フツテ大隅ニ漂著ス、十年鍼博士トナリ、次デ侍醫ニ任ゼラル、仁壽三年病ヒテ歿ス。

菅原岑嗣、傳ハ前ニ出ヅ。

當麻鴨繼、傳ハ前ニ出ヅ。

大神庸主、傳ハ前ニ出ヅ。

丹波康賴、傳ハ前ニ出ヅ。

深根輔仁、醍醐天皇ノ時、明醫ヲ以テ世ニ聞ユ、延喜十八年掌中要方ヲ著ハス、是ヨリ先キ輔仁、侍醫トナリ、養生鈔七卷、及ビ本草和名二卷ヲ著ハス。

醍醐天皇ノ時ニ至リテ延喜式成リテ、醫生ハ太素經、新修本草。小品方、明堂經、八十一難經等ヲ講讀スベキコトヲ制定セラレシヨリ、唐醫方ハ愈〻隆盛トナリ、一方ニハ病源ヲ論說シ、藥性ヲ分別スルコトヲ習ハシメテ、基礎ノ學科トシ、一方ニハ病ニ當リテ藥ヲ合シ、方ニ依リテ藥ヲ服スルノ法ヲ行ハシメ、コレヲ臨牀學科トナシタリ。

臨牀學科ハ主ニ治療ノ方法ヲ講ズルモノニシテ、先ヅ病源ヲ洞視シテソノ侵サルルトコロヲ知リ、食ヲ以テ之ヲ治シ、食療シテ癒エザルトキハ藥ヲ用フル（千金方）ヲ法トシ、又病ノ陰ニ起ルモノハ先ヅ其陰ヲ治シ、陽ニ起ルモノハ先ヅ其陽ヲ治シ、ソノ根本ニ向ツテ治ヲ施ス（太素經）ヲ則トセリ。所謂原因療法ナリ。

治療ノ法則トシテハ病ノ脈ニ主スルモノニハ灸刺ヲ用ヒ、病ノ節ニ生ズルモノニハ熨引ヲ施シ、病ノ肉ニ生ズルモノハコレヲ治スルニ鍼石ヲ以テナシ、病ノ咽喝ニ生ズルモノハ之ヲ治スルニ藥ヲ以テシ、筋脈通ゼズシテ病、不仁ニ生ズルモノニハ按摩醪藥ヲ施用ス（太素經）ルヲ例トセリ。コレ全ク支那ノ唐醫方ニ依據セルモ

ノニシテ康賴ノ曾孫、丹波雅忠ガ醫略抄ヲ著ハシテ、甚ダ簡略ニ唐醫方ヲ說キタルニ至リテ、ソノ方法ハ益〻普及セラレタリ。

丹波雅忠ハ忠明ノ子、長元七年典藥頭ニ試シ、右衞門佐ニ補ス、永承中丹波介トナル、任滿チテ京ニ歸ル、時ニ後冷泉天皇不豫、雅忠ニ命ジテ藥ヲ上ラシム、效アリ、丹波權守ニ任ゼラル、次デ施藥院使ニ任ゼラル、施藥院使專ラ當道ニ任ズルコトハ雅忠ヨリ始マルト云フ、承曆四年高麗王妃病ム、王書ヲ太宰府ニ送リテ厚弊ヲ以テ良醫ヲ求ム、時人雅忠ヲ以テ選ニ擬シタレドモ、朝廷其書辭ノ禮ヲ失ナフヲ咎メテ之ヲ却ケ、太宰府ヲシテ報牒セシム、內ニ『雙魚難レ達ニ鳳池之月ニ、扁鵲何入ニ鷄林之雲ニ』ノ語アリ、コレヨリ世ニ雅忠ヲ稱シテ日本扁鵲ト云フ、永保元年雅忠、晉唐方書ニ就テ救急方ヲ摘錄シ、醫略ヲ著ハス、寬治二年二月、年六十八ニシテ歿ス。

丹波雅忠像

斯ノ如ク、唐醫方ノ隆盛ヲ窮ムルト同時ニ、コノ時代ニハ佛法ノ弘通ノタメニ、我ガ醫術モソノ影響ヲ蒙ムリ、或ハ絕粒ノ法ヲ稱揚シ、或ハ療病ノ咒ヲ施用スルコト盛ナルニ至レリ。當時ノ俗人社會ニアリテハ佛敎ヲ信ズルコト更ニ甚シク、朝廷ヲ始トシテ、諸人ノ疾病ヲ療スルニ讀經祈禱ヲ主トセシコトハ續

日本紀、日本後記、續日本後記、文德實錄、三代實錄、類聚符宣鈔、源氏物語、榮花物語等ノ諸書ニ散見スルトコロニ徵シテ明ナリ。

外科

醫疾令ニ創腫科トアルハ外科ナリ。別ニ鍼科アリテ諸瘡病ヲ療シ、按摩科アリテ傷折(骨折、脫臼)ヲ療シタレバ、當時ノ外科ハ、コノ兩科以外ニアリテ、藥物內用及ビ膏藥貼傅等ニヨリテ瘡瘍ト創瘍トヲ治療セルモノナラン。

當時創腫科ノ敎課書トシテ用ヒラレタルモノハ鬼遺方、集驗方、千金方、廣濟方等ナレバ、其術ノ程度ハコレヲ推測スルニ難カラズ。仁明天皇ノ承和年間ニ、大村直福吉、勅旨ヲ奉ジテ治瘡記ヲ撰ビタリト傳フルモ、其書ハ佚シテ傳ハラズ。我邦第一ノ外科書ガ如何ナル內容ヲ有セシカヲ知ルヲ得ザルヲ憾トス。

醫心方第十五卷ヨリ第十八卷ニ至ルマデノ冊中ニ、創腫科ニツキテ、記述セリ。コレニ據ルニ、瘡瘍ヲ治スルニハ主ニ膏藥ヲ用ヒ、化膿ノ傾向アルモノハ局部ニ溫罨法ヲ施シ、或ハ灸ヲ施シ、既ニ膿瘍ヲ成スニ至レバ鋒針ヲ用ヒテ之ヲ破ブリ、膿汁ヲ排泄シタル後ニ藥湯ニテ之ヲ洗ヒ、膏藥ヲ貼スルヲ法トス。

消炎、鎭痛ノ目的ニハ水蛭ヲ貼シ、冷石又ハ冷鐵ヲ以テ腹上ニ熨シ、又ハ粢粉ヲ熱テ黑クシ、鷄子白

ヲ以テ練リテ之ヲ腫上ニ傳ク等ノ法ヲ行フ。內服藥トシテハ、膿瘍ヲ消散シ、又ハ止痛化膿ノ目的ニ一定ノ藥品ヲ應用セリ。

創傷ニ對シテハ止血ノ目的ニ石灰、紫檀屑、白灰、牡蠣末、石膏末等ヲ撒布シ、或ハ葛葉、生青蒿、艾葉等ヲ揉ミテ之ヲ貼シ、故ルキ布帛ニテ繃帶シ、尙ホ止血セザルトキハ食鹽內服ヲ命ジ、或ハ蒲黃粉ヲ撒布シ、青布ヲ燒テ灰トナシテ之ヲ傳ク、金創ノ大ニシテ創口哆開セルモノハ桑皮ヲ取リ、綖テ皮膚ヲ縫ヒ、其上ニ蒲黃粉ヲ撒布ス。湯火傷ニ對シテハ冷灰ヲ水ニ和シテ之ヲ漬シ、又ハ鷄子白ヲコレニ塗リ、若シクハ豆醬、石膏ノ類ヲ塗ル。獗犬ノ人ヲ嚙ミタルトキハ、ソノ惡血ヲ嗽キ去リテ其處ニ灸シ、又ハ人屎ヲ以テコレニ塗リ、燈殘油ヲ取リテ創中ニ灌グ。外科治術ノ方法ハ概子此類ナリ。

婦人科

支那ノ醫學ニアリテ、婦人科ノ專門ヲ立テタルハ元ノ世ニシテ、コレヨリ先キ、帶下醫、乳醫、褥醫等ノ目アリシモ、周ノ代ニハ婦人科ヲ疾醫ノ內ニ置キ、唐ノ代ニハ體療科ニ婦人科ヲ含マシメタリ。大寶ノ醫疾令ニ女醫ノ目アレドモ、婦人科ニハアラズ。醫心方ニハ千金方ヲ引テ、血氣不調ト妊娠及ビ娩產トニヨリテ起ルトコロノ疾病ヲ以テ婦人ニ特有ノモノトシテ、別ニ婦人門ヲ別チタリ。

助產ノコトハ、人類ノ生殖機能ニ關聯シ、太古混沌ノ世ニアリテモ既ニ必要ノ上ヨリシテ產屋ニ關スル

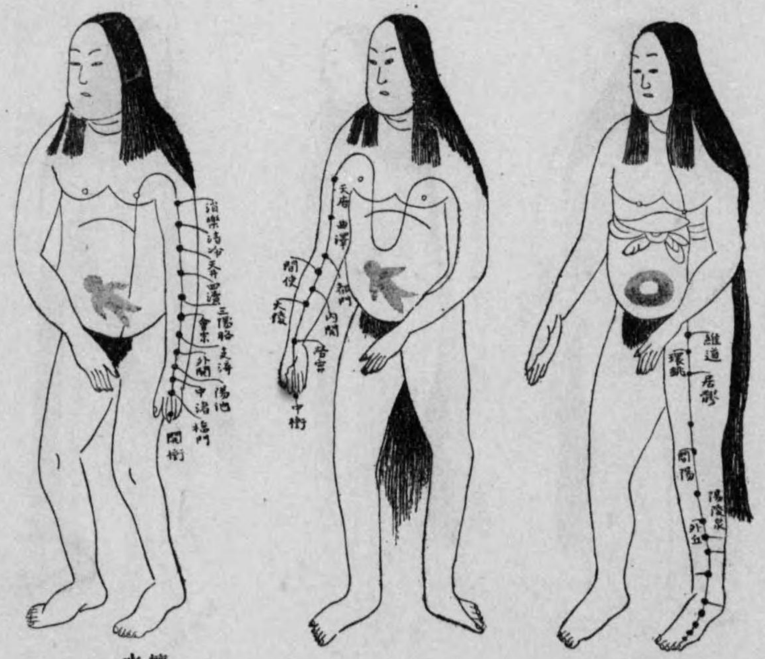
記事アリ、娩産ニ際シテ禁厭ノ法ヲ行ヒタルコトモ傳ヘラル。大寶令ニ擧グルトコロノ女醫ハ安胎産難ノ法ヲ主ドルモノニシテ後ノ代ニ産婆ト名ヅクルモノノ發端ト見ルベシ。養老六年ニ始メテ置カレタル女醫博士ハ女醫ヲ敎導スルノ職ニシテ、典藥寮ニテ産婆ノ養成ヲ事トセシナラン。

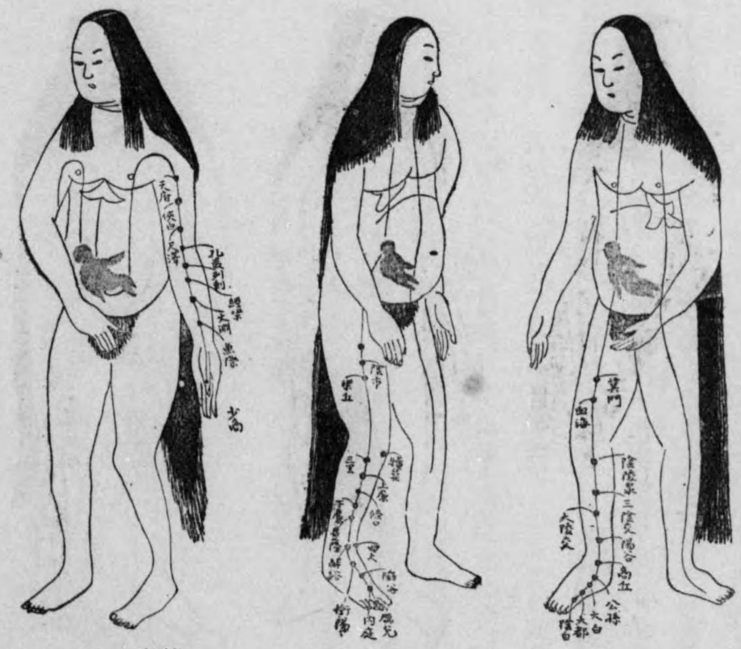
丹波康賴ノ醫心方ニハ産經、千金方、小品方、病源候論、醫門方、子母秘錄、葛氏方、集驗、耆婆方、僧深方、廣濟方、錄驗方等諸書ニ依リテ安胎産難ノ法ヲ敍述セリ。今、コノ書ニ說クトコロニ據リテ當時ノ婦人科及ビ産科上ノ知識ノ程度ヲ推知スベシ。

ソノ妊娠ヲ論ズルヤ、先ヅ胎兒ノ發育ヲ敍述シテ、妊娠一月、名ヅケテ始形トイフ、妊娠二月名ヅケテ始膏トイフ、兒精成ル、妊娠三月名ヅケテ始胎トイフ、此時ニ方リテ未ダ定儀アラズ、物ヲ見テ化ス。故ニ僂者、侏儒、醜惡ノモノヲ見ルトキハ外像ハ内ニ及ビ、ソノ兒ハ醜惡ノモノタルベシ。妊娠四月、始メテ水精ヲ受ケテ血脈ヲ盛ル、妊娠五月始メテ火精ヲ受ケテ以テ血氣ヲ盛ル、妊娠六月初メ

懷身一月、名曰始形、一月足厥陰脈養、不可鍼灸、

妊婦脈圖（醫心方所載）


足厥陰脈
足少陽脈
足陽明脈
足太陰脈
足少陰脈
足太陽脈
足少陽脈
足陽明脈
足太陽脈
足少陽脈
足陽明脈
足太陽脈
足少陽脈
足陽明



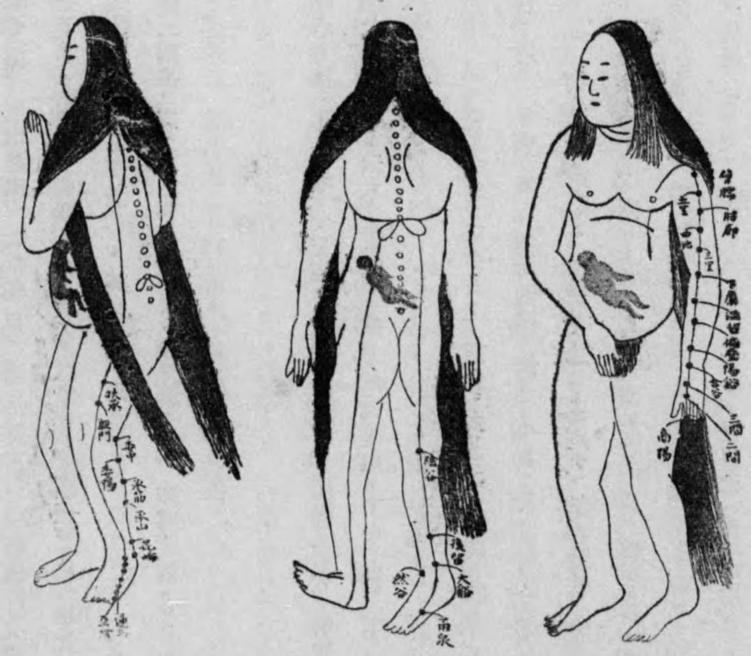
懷身五月、始受ニ火精一以成ニ血氣一
五月足太陰脈
養不レ可ニ鍼灸一

懷身六月、始受ニ金精一以成ニ筋骨一
六月足陽明脈
養不レ可ニ鍼灸一

懷身七月、始受ニ木精一以成ニ骨髓一
七月手太陰脈
養不レ可ニ鍼灸一

ニ相應シテ修身禁食ノ法ヲ說キタリ。

ソノ娩產ヲ論ズルヤ、先ヅ產婦ノ用意ヲ說キ、產時ニハ死喪、穢家ノ人ヲシテ來タリ視セシムベカラズトイヒ、產婦ソノモノヲ以テ既ニ穢惡ト認ムル上ニ、穢惡ノモノヲシテコレヲ視セシムルトキハ



懷身八月、始受ニ土精一以成ニ膚革一
八月手陽明養
不レ可ニ鍼灸一

懷身九月、始受ニ石精一以成ニ皮毛一
九月足少陰脈
養不レ可ニ鍼灸一

懷身十月、俱已成
十月足太陽脈
養不レ可ニ鍼灸一

產スルコト難ク、已ニ產スレバ兒ヲ傷フルトナシテ忌ムコト甚シ。

次デ產室ヲ設クルノ則ヲ說キ、禁厭以テ產ニ易カラシムルノ方ヲ擧ゲタリ。

產難ノ時ニ方リテハ、陀羅尼經ノ咒文ヲ唱ヘ、或ハ『上天蒼蒼、下地鬱鬱爲ニ帝王臣、何

故不レ出、速出速出、天帝在レ戸、爲レ汝著レ名、速出速出』ト祝シ、或ハ産難時、門戸窓牖瓶釜等スベテ蓋アルモノヲ開クトキハ效アリト說キタリ。横産ニシテ手足先ヅ見ハルルモノニアリテハ兒ノ足底ニ鹽ヲ塗リ、急ニ之ヲ搔クカ、其父ノ名ヲ足ニ書クカ、又ハ符文ヲ朱書シテ之ヲ呑マシメ、若シクハ梁上ノ塵三指撮ヲ以テ之ヲ服セシムルコトノ法ヲ施シタリ。産科手術トシテハ擧グベキモノナシ。

兒科

醫心方第二十五卷ニ小兒病ノ部門ヲ立テタリ。産經ヲ引テ、初生ヲ嬰トナス、長サ一尺六寸、重十七斤ナルベシト云ヒ、小品方ニ據リテ年六歳以上ヲ小トナシ、十八歳ヲ少トナシ、二十歳ヲ壯トナスト別チタリ。

初生ノ兒ニ對シテハ先ヅ口中舌上ノ銜血ヲ去リテ以テ痞病ヲ成スコトヲ防ギ、甘草湯ヲ與ヘテ胸中ノ惡汁ヲ去リ、朱蜜ヲ與ヘテ精神魂魄ヲ鎭メ、牛黃ヲ與ヘテ肝膽ヲ增シ、熱ヲ除キ、驚ヲ定メ、惡氣ヲ避クシム。初生兒ヲ浴セシムルニ良日ト忌日トヲ別チ、調養禁食ヲ命ズルニ各、ソノ法アリ。

小兒變蒸ノ說アリ、變ハ上氣ニシテ蒸ハ體熱ナリ、以テ血氣ヲ長ズルモノニシテ、輕キハ身體發熱シテ微驚スルノミナレドモ、重キハ熱高ク脈亂レ食慾ヲ失ヒ叫泣シテ苦シム、小兒生レテ一定ノ期日ヲ劃シテ數次變蒸ノ候ヲ呈スト說ク、コノ說ハ後ノ代ノ兒科ニアリテモ信用セラレタリ。

耳科

大寶令ニハ醫生ノ耳目口齒ヲ學フモノハ四年ニシテ成ルト記シテ、耳科ヲバ眼科及ビ口齒科ト併セタリ。醫心方ニモ耳、鼻、口、齒諸病ヲ併セテ第五卷ニ說キタリ。ソノ說ニ據レバ、腎ニ精氣アリテソノ氣耳ニ通ズルモノニシテ、若シ血氣ヲ勞傷シ、兼テ風邪ヲ受クルトキハ腎氣ヲ損シテ精脫シ、精脫スレバ則チ耳ハ聾ストナシタリ。聾ニ五種アリ、風聾(掣痛)勞聾(黃汁出ヅ)乾聾(耵聹生ズ)虛聾(蕭々聲ヲナス)亭聾(膿汁出ヅ)コレナリ、コレヲ治スルノ法ハ、綿ニ蚍膏ヲ裹ミテ耳ヲ塞ギ、又ハ鯉魚、鼠、雀、伏翼等ノ腦ヲ取リテ、綿ニツツミテ之ヲ耳中ニ入ル等ナリ。耳鳴ハ風邪虛ニ乘ジテ耳ニ入リ、氣ハ相擊ツガ故ナリトナシ、耳痛ハ風ノ腎經ニ入ルニ本ヅクト說ク。耳內膿ヲ生ズルハ血氣耳ニ至リテ熱氣ノ聚積スルニヨル、耳中ヨリ膿血出デテ癒エザルハ蟲アルナリ。百蟲ノ耳ニ入ルヲ防グニハ蘆ノ管ヲ以テ耳ヲ吹キ、又ハ生薑汁、韭汁等ヲ耳內ニ灌ギ、又ハ銅器ヲ耳邊ニ近ヅケ打チテ聲ヲ作セバ卽チ出ヅト云フ。

眼科

唐醫方ニハ未ダ眼科ノ目アラズ、故ニ大寶令ニモコレヲ別ノ科トセズ、耳、目、口、齒ト併セ稱シタリ。醫心方ニモ、耳、鼻、口、齒ノ諸病ト供セテ眼病ヲ論ジタリ。ソノ說ニ據レバ五藏六府、陰陽精氣皆

上ボリテ目ニ注グガ故ニ、若シ風邪ノ侵ストコロトナレバ目ハ不明トナルナリ。別ニ異狀ナク、瞳孔ノ黑白分明ナレドモ物ヲ見ザルモノハ淸盲ト名ヅク、コレ虛熱ト風トヨリ起ルトコロナリ、金鍼ヲ用ヒテコレヲ決スベシ。一タビ針セバ便チ豁然トシテ雲開キテ日ヲ見ルガ如クナルベシトイフ。白內障ノ類ヲ指シテ云フカ。晝ハ精明ニシテ暮ニ至レバ則チ物ヲ見ザルモノアリ(雀盲)、コレニハ生雀ノ頭ノ血、又ハ鼠ノ膽ヲ取リテ目ニツケ又ハ猪ノ肝ヲ空腹ニ食セシメテ效アリ。若シ目ニ翳ヲ生ズルトキハ鎌ニテコレヲ截リ、其中ニ血脈ノ處アレバ鉤ニテ割斷スベシ。コレニ據リテ當時既ニ眼科小手術ノ行ハレタルコトヲ知ルベシ。其他、眼病ノ治方ヲ擧グルモノ灸法、藥汁ノ點眼、膏藥ノ貼傅等ニ過ギズ、咒法ノ如キモ亦屢〻用ヒラレタリ。

口齒科

口腔、舌、脣、咽喉、喉頭ノ疾病ノ擧ゲ、療法トシテハ藥物ノ內服、貼傅ノ外ニ、鈹針ヲ以テ之ヲ刺シ、小鐵片ニテコレヲ灼ク等ノ方法ヲ擧ゲタリ。

齒科ニ關シテハ齲齒、齒齦腫、齒齗、等ノ諸症ヲ記載シ、治療ノ方法トシテハ、藥物ノ他ニ、灸法烙鐵及ビ符咒ヲ用ヒタリ。

鍼灸科

大寶令ニ定ムルトコロニ據レバ、宮內省典藥寮ニ、醫師、醫博士、醫生ニ對シテ針師、針博士、針生アリ。內經ニ湯藥其內ヲ攻メ、針灸其外ヲ攻ムト言ヘルヲ見テモ明ナルガ如ク、針灸ハ藥物療法ニ併ビテ行ハレ、ソノ主トスルトコロハ邪氣ヲ瀉スルニアリ。唐以來支那醫方ニアリテ盛ニ行ハレタルモノガ我邦ニ移レルナリ。ソノ說ニ據レバ病源ノ起ルトコロハ臟腑ニ本ヅキ、臟腑ノ脈ハ竝ビニ手足ニ出デ、腹背ニ循環シ、全身至ラザルトコロナシ、ソノ經脈ノ出ヅルトコロ、流ルルトコロ、注グトコロ、過グルトコロ、行クトコロ、入ルトコロノ諸點ヲ孔穴ト名ヅケ、鍼灸ハスベテ此部ニ施スベシトセリ。醫心方ニハ頭部諸穴六十八、面部諸穴三十九、頸部左右諸穴二十、肩部左右諸穴二十六、手部左右諸穴百二十、背部諸穴七十九、胸部諸穴四十三、腹部諸穴七十四、側脇部左右二十、足部左右諸穴百六十九、合計六百六十穴ヲ擧ゲタルガ、コノ孔穴ノ數、千金方ニ六百五十穴ヲ擧ゲタルニ同ジカラズ、蓋シコレ明堂經ニ載スルトコロノ六百四十九穴ヲ本トシ、更ニ諸家ノ所說ニヨリテ六十一穴ヲ撰ビ取リタルナリ。

用フルトコロノ鍼ニハソノ大小長短ニヨリテ九種ノ別アリ。鑱鍼、員鍼、鍉鍼、鋒鍼、鈹鍼、員利鍼、豪鍼、長鍼、大鍼コレナリ。又コレヲ用フルノ方法ニハ白鍼法ト燔鍼法トアリ、燔鍼トハ油火ニテ鋒鍼ヲ燒キ、或ハ蠟、烏麻子脂、蔓菁荏子脂中ニテ之ヲ燒キ、過熱紫色ヲ呈スルニ至ルヲ用ヒテ鍼刺スルナリ。

按摩科

薬物科

薬經太素

灸法ハ鍼スベキモノニシテ鍼スベカラザルトキニ用フ。孔穴、主治鍼術ニ同ジ。

按摩科

支那ニアリテハ按摩ハ治療ノ一術トシテ太古ノ時代ヨリシテ已ニ行ハレ、素問ニハ按摩、按蹻、導引ノ法アリ。我邦ニアリテハ大寶令ニ按摩ノ專門アリ、按摩シテ傷折ヲ療スルノ法ヲ主トリシガ、タダ按摩シテ筋骨ヲ調暢シ邪氣ヲ散洩セシムルノミナラズ、鍼ニテ折傷ノ瘀血ヲ判決セルナリ。導引ハ本ト印度ニ出デ、千金方ニハ婆羅門按摩法トシテコレヲ擧ゲタリ。醫心方ニハ養生ノ部ニ導引ヲ論ジ、人ノ肢體骨節中ノ惡氣ヲ去リ正氣ヲ存セシムルモノトセリ。自按摩ノ一式ニシテ體操ニ屬スルモノナリ。

薬物科

桓武天皇ノ時、和氣廣世、薬經太素二卷ヲ著ハシテ、草木、果菜、蟲獸、玉石、二百五十四種ノ薬品ヲ擧ゲテ、ソノ氣味及ビ主治ヲ論ゼリ。コレヲ我邦薬物書ノ始トナス。ソレヨリ後百年、醍醐天皇ノ延喜年間ニ深根輔仁アリテ本草和名二卷ヲ著ハセリ。

和氣廣世、備前藤木ノ人、其先ハ垂仁天皇ニ出ヅ、父清麻呂、民部卿ニシテ造宮大夫、美作備前國造ヲ兼ス、廣世學ヲ好ム、文章生ニ補セラル、累進シテ典薬頭トナリ、大學頭ヲ兼ス。廣世又、大學寮南ニ弘文院

ヲ設ケ、内外經書數千卷ヲ置ク、歿年詳ナラズ。

深根輔仁、本姓ハ蜂田薬師、和薬使主ト其先ヲ同ジクス、世醫ヲ以テ朝ニ仕フ、文主ニ至リテ深根宿禰ノ姓ヲ賜フ、時ニ承和元年ナリ、其子孫ニ宗繼トイフモノアリ、貞觀九年醫博士ニ任セラレ、内薬正、針博士ヲ歷テ、仁和三年加賀介ヲ兼ネ、醫ヲ以テ名アリ、輔仁ハソノ孫ナリ、侍醫、權醫博士ニ累遷ス、延喜十八年勅ヲ奉ジテ掌中要方ヲ撰ブ、本草和名モ亦勅ヲ奉ジテ此時ニ撰進セルトコロナリト傳フ、深根一ニ深江ニ作リ、又滋根ト記セルモノアリ、深根ヲ以テ正シトスベシト云フ。

本草和名ニ收ムルトコロノ薬物、合セテ一千二十五種アリ、醫心方ニ收ムルトコロノ薬品ハ本草内薬八百五十種、本草外薬七十種ニシテ、薬物ノ性味、和名、採薬時節ヲ示シタリ。コレニ據リテ見ルニ、當時薬物ニツキテノ學科ハ所謂本草學ニシテ、薬物ノ性味ヲ辨識スルヲ主トセルモノナルガ、ソノ他、薬物ヲ調合シ、又コレヲ應用スルノ法(丸薬、散薬、水煮、酒漬、膏煮)ヲモ攻究セリ。

薬舛大小ノ量ハ出雲廣貞、勅命ヲ奉ジテコレヲ制定セリト傳フ。醫心方ニハ本草經ヲ引テ、十黍ヲ以テ一銖トナシ、六銖ヲ一分、四分ヲ一兩、十六兩ヲ一斤トナセリ。散薬ヲ量ルニ刀圭トイフハ方寸匕ヲ十分セルニテ、方寸匕ハ匕正方一寸ヲ作ル、四刀圭ヲ一撮トナシ、十撮ヲ一夕トナシ、十夕ヲ一合トナス。丸薬ヲ量ルニ細麻ノ如シトイフハ卽チ胡麻ナリ、大麻ノ如シトイフハ卽チ大麻子ナリ、胡豆ノ如シトイフハ青斑豆ナリ、梧子ノ如シトイフハ二大豆ヲ以テコレニ准ズト說キタリ。

養生科

攝養要訣

房内

服石

養生科

我邦上古ヨリ鎮魂祭アリテ壽ヲ祈ルノ風アリ、養生ノ意ハ先ツココニ現ハル、シカレドモ醫家ガコノ事ニツキテ講究スルニ至リシハ後代ニシテ、物部廣泉ガ攝養要訣二十卷ヲ著ハシタルヲ以テ斯科專書ノ嚆矢トスベシ。

物部廣泉、左京ノ人、本ト伊豫國風早郡、姓ハ物部首、後京兆ニ隷ツテ朝臣ノ姓ヲ賜フ、廣泉少フシテ醫術ヲ學ビ、多ク方書ヲ見ル、天長四年醫博士兼典藥允トナリ、遷テ侍醫トナル　後累遷ツテ侍醫、内藥正トナル、貞觀元年正五位下ヲ授クラレ、參河權守ニ轉ズ、内藥正侍醫故ノ如シ、廣泉藥石ノ道當時獨歩ノ稱アリ、齡老境ニ至リテ鬚眉皎白、皮膚悅澤、體氣猶ホ强シ、卒スル時年七十六

攝養要訣ノ書ハ佚シテ今ニ傳ハラズ、丹波康頼ノ醫心方ハ此書ニ後ルコト約百五十年ニシテ世ニ公ニセラレタルガ、醫心方ニハ千金方、養生要集等ニヨリテ身體、行止、坐起、飲食、言語、衣服、居處等ニ關シテ衞生ノ方則ヲ說キ、又房内(房事ニ關スル衞生)及ビ食禁ノコトヲモ敍述シタリ。殊ニ精神ノ身體ニ及ボス影響ヲ擧ゲテ衞生ノ方法ヲ說キタルコトハ注目ニ價スベシ。

別ニ服石ノ一門アリ、コレハ性理ヲ調和シ、命ヲ養フヲ以テ主トスルモノニシテ、同ジク養生ノ一方トシテ見ラルベキモノナリ。服石トハ五石散、鐘乳諸石、丹藥等ヲ服スルモノニシテ、支那ニアリテハ魏晉六朝ヨリ唐時代ニ至ルマデ盛ニ流行シ、我邦ニアリテモ平安朝時代ニ行ハレシコトハ仁明天皇ガ自カラ五石ヲ練

鎌倉時代ノ醫學

(一)西暦一一九二年

リ金液丹ヲ服シ玉ヒシコトアルノ一例ニテモソノ大概ヲ察スルヲ得ベシ。

參考書籍

(1)類聚三代格
(2)延喜式
(3)奇魂一名尙古醫典
(4)本邦醫家古籍考　中川故著
(5)大同類聚方僞本辯　松浦彦禮著　天保二年
(6)大同類聚方考說　或曰伴信友撰或曰川崎重恭撰
(7)大同類聚方再考　櫨田貞助著
(8)續日本後紀
(9)釋日本紀
(10)文藝類纂　榊原芳野著
(11)三代實錄
(12)本朝醫談　奈須柳村著

第五章　鎌倉時代ノ醫學

後鳥羽天皇ノ建久三年ニ源頼朝ガ幕府ヲ鎌倉ニ開キタルヨリ北條氏滅亡ニ至ルマデ、凡ソ百五十年ノ

宋醫學ノ輸入

僧醫

間ヲ鎌倉時代トイフ。兵馬ノ權幕府ニ移リテ政治上ノ變動ヲ致シ、延イテ社會百般ノ事物ハ動搖ヲアラハシ、平安朝時代ニアリテ、主ニ貴族ノミヲ標準トシタル文物ハ武家政治ノ下ニ、比較的多數ノ國民ガ社會ノ表面ニ現ハレ、宗教ノ革新ハ社會革新ノ先驅ヲナシ、淨土宗、眞宗、禪宗、日蓮宗等ノ新宗派ヲアラハスニ至レリ。醫學モコノ政治上及ビ宗教上ノ革新ニ併ビテ、內容上ノ革新ヲナシ、ソノ外觀ハ平安朝時代ノ燦然タルニハ及バザルモノアリト雖モ、實質的ニハ進步ノ跡ノ著シキモノアルヲ見ルナリ。

宋醫學ノ輸入

平安朝時代ノ中葉以後ハ支那ニアリテハ宋時代ニ相當シ、ソノ太宗ノ朝ニ太平聖惠方百卷ノ撰述アリ。徽宗ノ朝ニ和劑局方五卷ノ撰述アリ。是等ノ書ハ、ソノ病門ヲ分ツコトハ病源候論ニ據リタレドモ、治療ノ方法ハ當時ノ醫家、性理ノ說ヲ主張シ、門戶ノ見盛ニシテ、唐醫方ノ所說ト同ジカラザルモノアリ。遣唐留學生ノ制ハ既ニ廢セラレタレドモ、鎌倉幕府ガ力ヲ佛敎殊ニ禪宗ノ弘通ニ致セシヨリシテ僧侶ノ支那ニ往來スルモノ絕ヘズ。支那ノ醫方ハ是等ノ僧徒ニヨリテ他ノ學藝ト共ニ傳ヘラレタリ。

僧醫

僧侶ノ醫ヲ兼ヌルコトハ既ニ其端ヲ奈良朝時代ニ發シ、平安朝時代ニアリテモ僧侶ニシテ醫ヲ善クスルモ

ノアリシガ、コノ期ニ至リテ佛敎殊ニ禪宗ハ武家ノ間ニ興隆シ、名僧ノ支那ニ來往セルモノ多ク、我ガ醫學モ亦、僧侶ノ力ニヨリテ新知識ヲ直接ニ宋ヨリ得ルコトトナリ、從テ僧侶ニシテ名醫ノ聞エアリシモノ亦尠カラズ、蓮基、榮西、佛嚴、賢禪房、大善房、筑紫醫師法師、重源、智玄、心寂房、行蓮、金蓮、興心、空體、梶原性全等ハソノ選ナリ。

蓮基、丹波氏ノ族、壽永三年、長生療養方ヲ撰ス。

榮西、備中ノ人、賀陽氏、年十九叡山ニ入リ台敎ヲ學ブ、仁安三年宋ニ赴キ數閱月ニシテ歸朝ス、文治三年再ビ宋ニ赴キ、建久二年歸朝シテ京都ニ居リ、始メテ禪宗ヲ唱フ。建保三年鎌倉ニアリ、偶〻源實朝病アリ、榮西ソノ宿醒ニシテ病ニアラザルヲ察シ、淸茶一盞ヲ進ム、且ツ喫茶養生記ヲ撰ビテ獻ズ。此歲七月病ミテ歿ス。智玄、下野國安蘇郡、糟尾鄕ニ居ル、嘗テ宋ニ赴キ、醫方ヲ學ビテ歸朝ス、後鳥羽天皇不豫、藥ヲ獻ジテ效アリ、法眼ニ敍セラル、世ニ錄事法眼ト稱ス。

行玄、嘉祿年中、幕府ノ醫事ヲ司トル。

心寂房、明月記ニ出ヅ、治術ニ精シカリシニ似タリ、傳記詳ナラズ。

金蓮房、治術ヲ施シタルコト明月記ニ出ヅ。

興心房、明月記ニソノ名見ユ。

梶原性全、傳ハ後ニ出ヅ。

萬安方及ビ頓醫抄

(1)西暦一三〇三年
(2)西暦一三一五年

萬安方及ビ頓醫抄

萬安方及ビ頓醫抄ノ二書ハ共ニ梶原性全ガ撰述スルトコロニシテ、此期ニ於ケル醫學ヲ代表スベキモノナリ。頓醫抄ハ五十卷ヨリ成リ、後二條天皇ノ嘉元元年(1)ニ撰述セラレ、萬安方ハ六十二卷、花園天皇ノ正和四年(2)ニ撰述セラレタルモノニシテ、甲ハ邦文ヲ用ヒ、乙ハ漢文ヲ用ヒタルノ差ノミニテ、兩書ノ内容ハ略ボ同ジク、共ニ病源候論ノ目ニ依リテ病門ヲ分チ、千金方、千金翼方、聖惠方、三因方、百一方、事證方、濟生方、和劑局方等ノ諸書ヲ參酌シ、唐、宋醫方ヲ折衷シ、單方ヲ抄錄シ、加フルニ自家經驗ノ說ヲ以テセルモノナリ。

梶原性全、傳記詳ナラズ、或ハ云フ、和氣氏ノ族、淨觀ト號ス、名醫ノ稱アリ、博覽强記、自カラ言フ、見ルトコロノ方書凡ソ二百有餘部、二千有餘卷、コレ皆、漢魏唐宋經驗ノ方法ニシテ、コレニ加フルニ試效スルトコロヲ以テシテ萬安方、頓醫抄ノ二書ヲ成スト。

此期ノ醫學

萬安方及ビ頓醫抄及ビ其他二三ノ書籍ニ據リテ、鎌倉時代ニ於ケル醫學ノ狀況ヲバ各科ニツキテ略述スベシ。

解剖學及ビ生理學
病理學
五運六氣

解剖學及ビ生理學

平安朝時代丹波康賴ノ醫心方ノ中ニハ、彼此ノ箇處ニ解剖學及ビ生理學ニ關スル記述ヲ散見スルニ過ギザリシガ、コノ期、梶原性全ノ頓醫鈔卷四十三及ビ萬安方中ニハ五臟六腑形候ト題スル一門ヲ置キテ、身體(タダ内臟ノミ)ノ構造及ビ機能ニ關スル說明ヲナシ、併セテ略圖ヲ載セタリ。シカレドモソノ所說ハ醫心方ニ於ケルモノト大差ナシ。(二五頁解剖學ノ條下參照)

病理學

病理ヲ說クニ方リテハ宋醫ノ所說ト佛典ノ醫說トヲ混淆シタリ。大要左ノ如シ。

宋ノ醫方ニテハ、疾病ノ原因ヲ分チテ三トス。内因、外因、不内外因コレナリ。内因トハ七情ノタメニ臟腑ヨリ發シテ肢體ニアラハルルモノ、外因トハ六淫ノタメニ經絡ニ起リ、臟腑ニ舍ドルモノ、不内外因トハ飲食・饑飽・叫呼・傷氣及ビ虎狼・毒蟲・金瘡・壓溺ノ類ノタメニ起ルモノヲ云フ。

當時支那ニテハ性理ノ說盛ニ行ハレ、醫學ニアリテモ、ソレニ本ヅキテ五運六氣ヲ以テ病理及ビ治療ヲ論ジ、ソノ所說ハ我邦ニモ傳ハリテ五運六氣ノ說ハ此頃始メテ行ハレタリ。ソノ五運トイフハ木、火、土、金、水、五行運轉ノ氣ニシテ、六氣トイフハ初、二、三、四、五、終、六節次序ノ氣ナリ、蓋シ人ノ生ルルヤ五行一身ニ備ハリ、生氣(陰陽)内ニ根スト雖モ、亦天地ノ氣ノ卷舒スルニ從ヒ、五

運六氣亦コレニ應ジテ其脈ニ現ハルルナリ。若シ天地ノ氣和シ、節令時ニ、氣運調フテ寒熱順ナルトキハ則チ人ハ健康ニシテ疾苦ナシ、コレニ反シテ天地ノ氣ニ太過不及アルトキ、若シ運不及ナルトキハ風、熱、燥、濕、寒アリテ各、一氣ヲ司ドリ運大過ナルトキハ勝タザルモノ邪ヲ受ケ、順ヲ以テ相承ケ、逆ヲ以テ相勝チ、勝復循環ノ道行ハルルナリ。此ノ如クナルガ故ニ疾病ヲ治スルニ方リテハ歳令(五運六氣)ヲ詳ニシ、ソノ形證(疾病)ヲ察シ、脈息ヲ明ニシ、陰陽ヲ別チ、五運六氣ノ補瀉ヲ求ムルコトヲツトムベシトセリ。

此ノ如キ性理ノ說ニ本ヅキテ病理ヲ說クニ併ビテ、此期ニハ佛敎ノ所說ガ醫學ニ影響ヲ及ボセルコト甚シク、四大(地、水、火、風ノ四大集マリテ人體ヲ成ス)不調、飲食不調ニ因ルトコロノ疾病ハ醫術ニヨリテコレヲ治スベキモ、罪業ニヨリテ起ルトコロノ病ハ罪障懺悔ノ力ニヨラザレバコレヲ治スルコトヲ得ズト說キタリ。

內科

此期ノ內科ハ主ニ和劑局方、聖惠方等宋ノ醫方ニ依據セルモノナルガ、和劑局方ハ病原ヲ載セズ、各方ノ下ニ證候ヲ條列シ、ソノ證候ニ隨テ治方ヲ立テタリ。コレ千金方等ノ唐醫書ノ病源ヲ論ズルヲ前ニシ、コレニ依リテ治方ヲ立テタルトハ其趣ヲ異ニセリ。建保三年(1)禪宗ノ僧侶榮西ガ選ビタル喫茶養生

(1)西暦紀元一二一五年

記ハ本トヨリ醫家ノ書ニアラズト雖モ、ソノ書、當時ノ醫術ノ缺陷ヲ擧ゲ、宜シク支那及ビ印度ノ醫風ニ倣フテ五臟和合ト遣除鬼魅トヲ以テ療病ノ眼目トナスベシト說キタリ。五臟和合トハ五臟味ヲ受ルコト同ジカラズ(2)好味多ク入レバ則チ其臟强ク、傍ノ臟ニ尅テ互ニ病ヲ生ズ、辛、酸、甘、鹹ノ四味ハ恒ニ之ヲ食フト雖モ苦味ハ多ク食ハズ、故ニ四臟ハ恒ニ强クシテ心臟ハ恒ニ弱シ、故ニ心ヲ調ヘテ以テ萬病ヲ除クベシ、若シ眼ニ病アレバ肝臟ノ損ト知リ、酸性ノ藥ヲ以テ之ヲ治スベシ、耳ニ病アレバ腎臟ノ損ト知リ鹹性ノ藥ヲ以テ之ヲ治スベシ、鼻ニ病アレバ肺臟ノ損ト知リ辛性ノ藥ヲ以テ之ヲ治スベシ、舌ニ病アレバ心臟ノ損ト知リ苦性ノ藥ヲ以テ之ヲ治スベシ、口ニ病アレバ脾臟ノ損ト知リ甘性ノ藥ヲ以テ之ヲ治スベシ、身弱ク意消セバ又心臟ノ損ト知ルベシ。此ノ如クニシテ、五味ノ養生ヲ主トシ、別ニ祕密眞言ニヨリテ五部ノ加持ヲナシ內外相資テ身命ヲ保ツコトヲ要ス。遣除鬼魅トハ鬼魅魍魎ガ種種ノ病ヲ致スヲ除クノ法ニシテ、宗敎的・魔術的ノモノニ屬ス。

玉海・明月記・臺記・山槐記等ノ當時ノ諸家ノ日記書類ニ散見スルトコロニ據リテ考フルニ、醫書ノ所說ハ兎モ角モ、實際ニ治病ノ方法トシテ實際ニ盛ニ行ハレタルハ灸治、湯治トニシテ、ソレガタメニ却テ疾病ヲ增惡スルノ實例モ多カリシト見エテ、頓醫鈔・萬安方・醫談鈔等ニハコレヲ濫用スルコトヲ戒メタリ。

諸病ニツキテ禁好物ヲ言フコトモ此期ノ治術ニ於テ主要トセルモノニシテ、灸治スル間、湯治スル間、ソ

(2)肝臟好酸味、肺臟好辛味、心臟好苦味、脾臟好甘味、腎臟好鹹味

外科

(1)土佐光長畫奇疾草子ニ針ヲ烙キテ背部ノ腫物ヲ療スルノ圖

兒科

ノ他、一切ノ諸病ニ禁ズベキ食物ト、食シテ好キ食物トヲ擧ゲタリ。

外科

醫疾令以來、瘡腫ト名ヅケラレタルモノハ此期ニ至リテ外科ノ稱呼ヲ得タリ。コレ外科精要・外科精義等ノ支那撰述ノ書ガ我邦ニ入リ來タリタルニ始マル。

梶原性全ノ萬安方ニハ『夫瘡腫之患、莫レ大於癰疽、明ニ於此二者、則腫毒丹疹可ニ以類推』ト曰ヒ、外科ノ治方ハ重キヲ癰ト疽トニ置キ、隋・唐以來ノ方書ノ說ニ本ヅキテ、湯液ヲ以テ其內ヲ疏シ、鍼灸ヲ以テ其外ヲ疏スルヲ主旨トシ、外科トイフト雖モ、其實內科ノ治術ト異ナルトコロナク、唯僅ニ腫物ニ針シ(1)、又ハ時ニ燔針ヲ用ヒタルニ過ギザルベシ。

兒科

兒科ハ醫心方ニアリテモ既ニ一部門ヲナセシガ、コノ時代、梶原性全ノ萬安方ニ至リテハ幼幼新書・嬰童寶鑑・顱顖經・嬰孺方・病源候論・千金方・千金翼方・聖惠方等ノ諸書ヲ引キテ、ソノ第三十九卷乃至四十九卷ニ於テ、兒童ノ將護及ビソノ疾病ニツキテ敍述セリ。コレヲ醫心方ノ僅々一卷ノ中ニ小兒ノ疾病ヲ論ゼルニ比シテ內容ノ豐富ナルコトヲ想フベシ。萬安方ハ幼幼新書ニ依リテ病門ヲ別チ、

婦人科

助產方術

療病院

治方ヲ擧ゲ、加フルニ自家ノ經驗ヲ以テセリ。單ニ唐・宋ノ方書ヲ抄錄セルモノニアラザルガ故ニ我邦ノ兒科ハ梶原性全ノ萬安方及ビ頓醫鈔ニ至リテ著シク發展シタリト云フベキナリ。

婦人科

萬安方ノ婦人科ハ主ニ婦人大全良方ニ依據シ、其他、宋ノ醫書ヲ引用シテ、婦人總療、月經異常、婦人血疾、血分、水分、脫血、血枯、痃癖、積聚、婦人淋病、妊娠惡阻、妊娠諸病、安胎、催生、產難、產後諸病ニツキテ敍述シタリ。

助產ノ方術ハ平安朝時代ニ於ケルト異ナラズ。婦女ヲ轉シテ男子トナスノ法、借地法、催生靈符等ハ既ニ醫心方ニモ揭ゲラレタレドモ、コレ等ノ諸法ハ平安朝時代ノ末造ヨリ鎌倉時代ニ至リテ殊ニ盛ニ行ハレタリ。其他、產婦行年ヲ推スノ法、日遊神ヲ推スノ法、妊娠ノ著帶ニ仙沼子ヲ入ルコト、御產ノ御座ヲ敷クトキ典藥頭ガ咒文ヲ讀ムコト、御產ノ時、法華經涌出品ヲ產所ニ置クコト、臨產ノ時散米ヲナシテ血暈ヲ止ムル禁厭トナシ、又胞衣ノ下ラザルトキニハ屋棟ヨリ甑ヲ落シテコレヲ厭フ等ノ諸法アリテ盛ニ行ハレタルコトハ山槐記・玉海等當時ノ記錄ニ散見スルトコロナリ。

療病院

聖德太子ガ天王寺ニ施藥・療病・悲田・敬田ノ四院ヲ創立セシヨリ、奈良朝ノ頃ニ施藥院ノ設立アリ。

極樂寺古繪圖寫眞（同寺所藏）

（I）續日本後記

平安朝時代ニ至リテ、仁明天皇ノ御宇ニ武藏國多摩、入間兩郡界ニ悲田所ヲ置キ、太宰府ニ續命院ヲ建テ、相模國ニ救急院、出羽國最上郡ニ濟苦院ヲ設ケテ、以テ飢病者ヲ救護セルコトアリ。鎌倉時代ニ至リテ、釋忍性トイフモノアリテ、奈良ニアリテ常施院、悲田院ヲ構ヘ、貧窶ノ病者ヲ收容シテ救護甚ダ力メタリ。ソノ奈良北山ニ於ケル十八間戸ハ癩病者ヲ收容セルトコロニシテ、我邦ニ於ケル癩病院ノ最古ノモノトスベシ。ソノ鎌倉桑谷療病所ノ如キハ二十歲間ニ病者ヲ收容シテ癒スルモノ四萬六千八百人、死者一萬四百五十人ニ上ボレリト云フ。

釋忍性、姓ハ伴氏、父名ハ貞行、大和磯城島ノ人、歲十一ニシテ信貴山ニ投シ、十三歲ノトキ誓フテ食肉ヲ斷チ道心ヲ祈ル、十七歲ニシテ東大寺戒壇ニ登リ、覺盛・叡尊ニ就キテ學ブ。仁治元年歲二十四ニシテ西大寺ノ住侶トナリ、常施・悲田ノ二院ヲ開設シ、布施ノ行ヲナス、常施院ヲ建テテ病客ヲ扶ケ、悲田院ヲ修シテ乞丐ヲ濟フ、行步ニ堪ヘザル疥癩人ヲバ自カラ負テ奈良市北山宿ニ至リ、衣服ヲ施シ、飲食ヲ與ヘ、現業ヲ戒ム。建長四年、三十六歲ニシテ鎌倉ニ赴キ、更ニ常陸ニ赴キ淸涼院ニ居リテ律學ヲ開ク、弘長元年鎌倉刺史北條長時（義時ノ孫）ノ延請ニヨリテ極樂寺ニ住シ、粗衣ヲ著ケ、美食ヲ食ハズ、儉約ヲ先トシ、山野ニ樹木ヲ植エ、病者ニ藥ヲ與ヘ、乞丐ニ食ヲ給シ、時人ノタメニ生如來ト尊崇セラル。桑谷病屋ハ極樂寺ニ接スルトコロニアリ、病者ヲ收容シテ、コレニ治療ヲ施シタルトコロナリ。忍性嘗テ四天王寺ニ詣デ聖德太子四院ノコトヲ聞キテ欽仰ノ念切ニシテ、コレヨリ處々ニ療病・悲田ノ二院ヲ構フト云フ。嘉元元年七月忍性病ミテ歿ス、年八十七。

醫事制度

僧醫

(1)建保二年
(2)土佐光信畫

醫事制度

醫事ノ制度ハ大寶令ニ定メラレシヨリ以來、奈良朝、平安朝ノ間ニ多少ノ變遷アリ。嵯峨天皇ノ弘仁五年ニハ醫生・針生ニ得業生ヲ置キ、課試ヲ經テ、コレニ任ゼラレタリ。朝野群載ニ記スルトコロニ據リテ見ルニ、得業生タルベキモノガ讀ムベキハ新修本草、黃帝明堂經、小品方ノ數書ニシテ、得業生ハ師傳ヲウケテ學ビ得タル書籍ヲ試ミテ後、コレニ補セラレタルモノト見ユ。然ルニ王政漸ク衰ヘテヨリ中古ノ諸官ハ上古ノ世襲ノ風ニ復シ、平安朝中葉以後ニアリテハ和氣・丹波ノ兩氏、典藥頭ノ官職ヲ世襲スルニ至リ、課試ノ制ハ自カラ廢セラルルニ至リ、鎌倉幕府ノ世ニアリテハ大寶令以來ノ繁文褥禮ヲ避ケ、簡潔質素ヲ旨トシテ律令ヲ制定シタレドモ、遂ニ醫事ノ制度ニ及バズ。和氣・丹波兩氏ガ世襲的ニ典藥頭ニ任ゼラルルコト、猶ホ前期ニ於クルニ異ナラズ。從テ和氣・丹波兩氏以外ニハ醫家ノ名アルモノ甚ダ稀ニシテ、醫家トイヘバ直チニ和氣・丹波ノ兩流ナルコトヲ想ハシムルホドナリキ。

鎌倉時代、禪宗ノ我邦ニ入ルニ及ビテ、學識アル僧侶ノ支那ニ往來セルモノ多ク、醫學モ亦、コレ等僧侶ノ手ヲ經テ直接ニ新知識ヲ宋ニ求ムルニ至リ、從テ僧侶ニシテ、醫術ニ名アルモノモ輩出シタリ。

建保職人歌合(1)七十一番職人盡歌合(2)ニ載スルトコロノ醫師ノ圖ヲ見ルニ、衣冠ヲ着ケタルノ狀、陰陽師、文者ト相似タリ。思フニ當時醫師ノ地位ハ陰陽師等ト同樣ナリシモノナラン。七十一番

(建保職人盡歌合所載)

(七十一番職人盡歌合)

職人盡歌合くすしノ詞書ニ『殿下ヨリ續命湯獨活散をめされ候間只今あはせ出候』トアリ、病家ヨリシテ藥劑ヲ乞ハレテ、醫師ノコレヲ調ヘタルコト、此頃ノ習俗ナリシカ。

參考書目

(1)文化史上ノ鎌倉時代　文學博士原勝郎

(1)元弘三年、西暦一三三三年

(2)元享釋書

(3)本朝醫談

第六章　室町時代ノ醫學

後醍醐天皇ノ時(1)、鎌倉幕府ハ滅亡シ、大權ハ皇室ニ復シタレドモ、幾モナクシテ延元ノ亂起リ、南北朝ノ分立トナリ、足利尊氏ハ北朝ノ天子ヲ擁シテ幕府ヲ京都室町ニ開キタリ、ソレヨリ十五代二百有餘年ニシテ、足利氏遂ニ滅亡セルマデノ間ヲ室町時代ト稱ス。尊氏ノ孫足利義滿ノ將軍タリシトキ南北合和シテヨリ八代足利義政ニ至ルマデ七十餘年ハ京都ハ左マデ擾亂セズ、天下小康ヲ得タレドモ、次デ應仁ノ亂起リテ京都ハ修羅ノ區トナリ、幕府ハ有レドモ無キニ同ジク、天下亂麻ノ狀トナリ、朝廷ノ衰替、京師ノ荒廢此時ヨリ甚シキハナシ。應仁ノ亂鎭マリタル後モ、群雄四方ニ割據シ、爭亂常ニ絶エズ、所謂戰國ノ狀況ヲ呈スルニ至レリ。社會ノ狀態此ノ如クナリシカバ學問ノ世界ハ暗黑トナリ、文事ハ度外視セラレタリ。然ルニ、此間ニアリテモ、京都ニハ二三ノ學者アリテ學術ノタメニ努力シ、諸候ノ中ニモ文事ヲ奬勵セルモノアリ、殊ニ僧徒ニハ學問ニ精シキ人少カラズ、足利義滿ノ時、明ト交通シテヨリ以來、彼邦トノ往復絶ユルコトナク、僧徒ノ明ニ渡リテ儒學ヲモ兼ネ修メタルモノ多カリシカバ、學問ノ權

明醫方ノ輸入

(1)西暦十四世紀

ハ僧徒ノ握ルトコトロナリ、我ガ醫學モ僧徒ノ手ニ歸シタリ。

明醫方ノ輸入

我邦南北朝ノ頃(1)ハ、支那ニテハ元亡ビテ明興リタル時代ナリシガ、元ニハ李果(東垣ト號ス)、朱震亨(丹溪ト號ス)等ノ大家アリ、明ノ洪武ヨリ嘉靖ニ至ル間ニハ王履、戴元禮、劉純、虞摶等ノ諸家アリ。コレ等諸家ノ論說ハ僧徒ノ彼邦ニ入レルモノニヨリテ我邦ニ傳ハリタリ。

支那ノ醫方ガ僧徒ノ力ニヨリテ我邦ニ傳ヘラレタルハ鎌倉時代以後殊ニ盛ナリシガ、此期ニ至リテハ僧徒ノ外ニ醫家ノ彼邦ニ入リテ直接ニソノ醫方ヲ傳ヘタルモノモ尠カラザリキ。

竹田昌慶、姓ハ藤原、太政大臣公經ノ子、後光嚴天皇ノ時、兄公定故アリテ關東ニ配セラレ采邑竹田ニ屛居ス、昌慶從フ、因リテ氏トナス、後赦サレテ京師ニ還リ、山城守ニ敍セラル、既ニシテ儒ヲ學ビ、遂ニ醫方ヲ修メ、剃髮シテ自カラ實乘僧都ト號ス。應安二年、年三十二歲ニシテ明ニ赴ムキ、金翁道士ニ親炙シテ醫家ノ群書及ビ牛黃圓等ノ祕方妙訣ヲ受ケ、名ヲ明室ト改ム、道士深ク其才ヲ愛シ、妻スニ其女ヲ以テシ、遂ニ二子ヲ產ム。明ノ洪武年間、太祖ノ后難產死ニ瀕ス、昌慶ヲ延テ之ヲ治セシム、藥一劑ニシテ皇子降誕ス、太祖大ニ喜ビ、封シテ安國公トス、永和四年醫家祕書及ビ銅人形等ヲ得テ歸朝ス。後圓融天皇弗豫、昌慶診ヲ奉シテ效アリ、左衞門督ニ任ズ、康暦二年法印ニ敍セラル。三子直慶、善慶、昭慶。善慶ハ應永十九年、後小松天皇ノ病ヲ治シテ效アリ法眼ニ敍セラル、二十八年法印ニ進ミ治部卿ニ任ゼラル。昭慶ハ快翁ト稱ス、長祿二年法眼ニ敍セラル、應仁

二年將軍足利義政ノ病ヲ治メテ效アリ、法印ニ陞敍セラル、其著ニ延壽類要アリ。

坂淨運、博學ニシテ醫術ニ精シ、後柏原天皇ノ病ヲ治シテ效アリ、法印ニ敍セラル、明應中明ニ赴キ、張仲景ノ方術ヲ傳ヘ、歸朝シテ其名益〻顯ハル。因幡守山名某醫方ヲ嗜ミ、淨運ニ就テ方書ヲ求ム、淨運其曾祖父淨秀ガ著ハストコロノ鴻寶祕要抄ヲ增シテ續添鴻寶秘要鈔ト題シテ之ニ與フ。

月湖、明監寺ト稱シ、又潤德齋ト號ス、何レノ人ナルヤヲ詳ニセズ、方ヲ求メテ明ニ入リ錢塘ニ寓シ醫ヲ以テ行ハル、明ノ景泰三年、全九集ヲ著ハシ、同六年又濟陰方ヲ著ハス、傳ヘ云フ、三喜明ニ入リテ月湖ヲ師トシ、李朱ノ醫方ヲ學ビ、居ルコト十二年ニシテ醫家方書ヲ携ヘ歸ルト、所謂方書ハ卽チ全九集ナリト。

田代三喜、傳ハ別ニ出ヅ。

吉田宗桂、意安ト稱ス、天文八年入明ノ使僧策彥ニ伴ナヒテ明ニ赴ムク。明人宗桂カ診治神察アルヲ以テ呼テ意安トス、蓋シ醫ハ意ナリトノ義ニ取ルナリ、同十六年再ビ明ニ赴キ國王ノ病ヲ治シ、醫名ヲ異域ニ顯ハス、子孫世々意安ヲ以テ通稱トス、元龜三年十月歿ス。

金持重弘、學ヲ好ミ醫ニ精シク、最モ鍼灸術ニ巧ナリ、天文十七年大內義弘ノ命ヲ承ケテ明ニ赴キ嘉賓館ニ寓スルコト年アリ、醫院諸工其技ニ服ス、歸ルニ臨ミテ尙藥俞璉文ヲ作リテ之ヲ贈ルト云フ。

和氣明親、後名ヲ眞長ト稱シ、剃髮シテ證玄ト云フ。蘭軒ト號ス、後勅ニヨリテ春蘭軒ト號ス、永正中、明ニ赴キ熊宗玄ニ從テ醫ヲ學ブ。

此期ノ醫學

福田方、五體身分集、管蠡備急方、棒心方等、此期ノ撰述ニ成レル諸書ニ據リテ見ルニ、此期ノ醫學ガ前期萬安方、頓醫抄等ノ敍述ニ同ジク、殊ニ宋以後ノ支那ノ醫書ヲ本トシテ其說ヲ立テタルコトハ明ニシテ、其間大ニ佛敎ノ影響ヲ受ケタルコトモ亦前期ノ醫學ニ異ナラズ。而シテ、コノ期ノ醫家ガ奉ジテ以テ金科玉條トセル支那ノ醫書ハ和劑局方、聖濟總錄、千金方、百一方等ノ諸書ナリシコトハ一條兼良ガ著ハストコロノ尺素往來ニ記スルトコロニ徵シテ推知セラルルコトナリ。又此期ノ醫家ガ病理ヲ論ズルニ方リテハ主ニ三因方ニ據リ、治療ニ用ヒタル藥方ハ和劑局方ニ出ツルモノヲ用ヒタルコトモ諸書記スルトコロニヨリテ明ナリ。

思フニ、平安朝時代ニアリテハ漢學ト佛敎トガ奬勵セラレタル結果、醫學ノ如キモ隋唐ノ方書ヲ拮據シテ外觀粲然タルモノアリシガ、鎌倉時代ニ至リテ漢學ハ大ニ衰ヘ、此期室町時代ニ至リテハ漢學ノ衰頹更ニ甚シク、支那ノ醫書ヲ讀ムモノ少ナカリシト云フ。然レドモ我ガ醫學ハ鎌倉時代ノ醫學ガマサニ執ラントセル方針ニ從ヒ、實際ノ方面ニ向ヒテ開展シ、親試實驗ニヨリテ以テ治術ヲ究メントスルノ狀勢ヲ呈シ、眼科、婦人科及ビ金創醫ノ一派ヲ生ズルニ至レリ。

內科

此期ノ内科ハ主ニ三因方、千金方、和劑局方等ノ諸書ニ據リ、宋醫方ヲ傳承セシモノナルガ、室町幕府ノ後期ニ至リ、坂淨運、續添鴻寶祕要鈔ヲ著ハシテ漢ノ張仲景ガ著ハセル傷寒論ノ藥方ヲ採用セルアリテ治方稍〻一變セントスルニ際シテ、田代三喜ノ明ヨリ歸リテ李・朱醫學ヲ唱道セルアリ。ココニ於テ、前期以來世ニ行ハレタル宋醫方ハ廢タレテ李・朱醫學コレニ代ハルニ至レリ。

田代三喜像

田代三喜、名ハ導道、字ハ祖範、範翁、廻翁、支山人、意足軒、江春庵、日玄、善道等ノ號アリ、初メ壽永文治ノ頃、伊豆ノ人ニ田代信綱ナルモノアリ、八島ノ役ニ源氏ノ軍ニ從ヒテ功アリ、其後子孫相繼ギテ醫ヲ業トス、其八世ノ孫ヲ兼綱ト云フ。武藏ノ川越(又ハ越生ト云フ)ニ移リ居ル。三喜ハ其子ナリ。寛正六年生マル。年十五ニシテ方伎ニ志アリ、當時ノ醫タルモノ皆緇徒タリシヲ以テ妙心寺派ニ入リ浮屠トナル、長享元年明ニ赴ムキ、留マルコト十二年、李東垣、朱丹溪ノ術ヲ學ビ、又月湖ノ門ニ遊ブ、明應七年、三喜年三十四ニシテ醫家ノ方書ヲ携ヲ歸朝シ、初メ鎌倉ノ江春庵ニ居リ、後下野ノ足利ニ移ル。是時ニ方リ、足利成氏關東ノ管領ヲ以テ下總ノ古河ニアリ、古河公方ト稱ス、三喜ノ名ヲ聞キテ之ヲ招請ス、因リテ遂ニ古河ニ移ル、時ニ永正六年ナリ、コレヨリシテ三喜ノ名聲ハ益〻高ク、時ノ人、古河ノ三喜ト呼ブニ至ル。

天文六年二月病テ歿ス、年七十三、或ハ云フ七十九。遺像古河長谷村ノ一向寺ニアリシモ、明治年間ノ火災ニヨリテ燒失シタリ。

三喜、室町幕府ノ末造、局方ノ學ノミ行ハルル世ニ出デテ、李朱醫學ヲ首唱シ、ソノ學ト術トヲ以テ東國ヲ風靡ス、實ニ我邦ニ於ケル李朱醫學派ノ開祖タリ。

外科

大寶令ニ體療ト創腫トノ兩科ヲ別チテヨリ凡ソ六百年、室町時代ニ至リテハ既ニ本道・外科ノ稱呼アリ、此時外科ノ治術ヲ以テ專門トセルトコロノ醫家アリシコト明ナリ。然レドモ、此時ニ至ルマデ、外科ノ專書トシテ行ハレタルハナク、治療記ハ佚シテ存セズ、明德二年(1)富小路範實ガ選ブトコロノ鬼法アリト雖モ金創ノ治術ヲ主トスルノミ。一二針熨ノ手術ヲ除キテハソノ治術ハ內科ト選ブトコロナシ。然ルニ應仁以後、干戈相踵ギ、擾亂熄ムトキナク、戰フコトニ創傷ヲ蒙ムレルモノ甚ダ多カリシカバ、士林ノモノニシテ專ラ金創ノ治術ヲ攻ムルモノアリ。其人益多ク其術愈進ミテ、此期ノ末ニハ遂ニ金創醫ト稱スル一派ヲ生ズルニ至レリ。

(1) 西暦一三九四年

金創醫

金創醫ノ方術ハ祕傳ヲ主トシ、僅ニ一藥方ノ差、一手術ノ別ニヨリテ流派ヲ別ケ、吉益、中條、赤井、板倉、神保、板坂、曾我、永井、大野、伴、藏貫等ノ諸金創醫流アリ。而カモソノ治

術ハ諸流大抵同様ニシテ、金創ノ重キモノハ先ヅ血縛ヲ與フ、コレ當坐ノ氣付(興奮劑)ナリ、次デ出血ヲ止メルタメニ血止藥ヲ與ヘ、次デ疵洗藥ヲ用フ、又腸ナドノ出テタルハ之ヲ還納シ、疵ノ大ナルハ之ヲ縫合シ、筋及ビ骨ノ折レタルハ之ヲ續キ、矢ナドノ立チタルハ之ヲ拔クタメニ拔藥ヲ與ヘ、次デ癒藥ヲ用ヒ、又ハ内用藥ヲ處スルナリ。

金創醫ハ固ヨリ金創ノ治療ヲ主トセルモノナレドモ、婦人ノ產モ腹ノ疵ニ同ジキモノナリトシテ、兼テ助產ノ方術ヲモ施シタリ。

婦人科

婦人科ノ方術ハ平安朝ヨリ鎌倉時代ヲ經テ此期ニ至ルマデ、内科ノ中ニ合セラレ、獨リ婦人ニアリテ男子ニ無キトコロノ血ノ病ヲ治スルヲ以テ婦人科ノ範圍トシ、其他、催生、安胎、產難ノ方ニ至リテハ前期ニ於クルト異ナルトコロアラズ。タダ此期ニ至リテ婦人科ハ他ノ諸科ト共ニ實際ノ方面ニ向ヒテ開展シ、ココニ婦人科專門ノ醫家ヲ生ゼシコトハ特記スベキコトナリ。

安藝守定、其先ハ安藝、平氏ニ出ヅ。因テ氏トス。延文三年將軍足利義詮ノ室紀良子妊娠ニ方リテ之ヲ療シテ男ヲ擧グ、コレ將軍義滿トス、幕府其功ヲ賞シ、奏シテ尙藥トス、嘉慶中從四位上ニ敍シ、大膳亮ニ任ズ、子孫業ヲ繼ギ、宮中產ヲ治スルモノ皆安藝氏ニ屬ス。守定ノ子貞守、貞守ノ子守家、刑部少輔ニ任ゼラル、亦女

安藝守定像

科ヲ以テ名アリ。

阿佐井宗瑞、和泉ノ人、女科ニ精シキヲ以テ名アリ、世ニ阿佐井婦人醫ト稱ス、大永五年明版ノ醫書大全ヲ得、刊行シテ世ニ公ニス、我邦醫書ヲ板ニ刻スルハ之ヲ以テ嚆矢トスト云フ。

婦人科專門ノ醫家ニ併ビテ金創醫アリ、金創ノ治ニ兼テ婦人產育ノ治術ヲ施シタリ。コレ產モ亦血ニ屬シテ創傷ト同一ナリト倣シタルニ由ルナリ。

眼科

支那ニアリテハ元ノ世ニ及ビテ醫方ニ大方脈科、小方脈科、風科、產科兼婦人雜病科、眼科、口齒咽喉科、正骨兼金鏃科、瘡腫科ノ九科目アリ。眼科專門ノ稱呼ココニ現ハレタリ。我邦ニテモ眼科ガ鼻、口、齒科ヨリ別レテ獨立ノ一科トナリシハ南北朝ノ頃ニシテ、此時已ニ眼科專門ノ醫家アリ。鎌倉時代土佐光長ガ畫キタル奇疾草子ニ鍼ヲ以テ眼ヲ療スルノ圖アリ、ソノ詞書ニ目ノ病ヲツクラフクスシナリトアルヲ見レバ眼疾ヲ療スル醫師ハ此期以前ニ存セシモノナルベシ。シカレドモ眼科專門ヲ以テ世ニ聞エタルハ

(1)西暦

馬島流眼科

南北朝時代ニ於ケル馬島清眼僧都ヲ以テ第一トスベシ(1)。

清眼大僧都ハ尾張國海東郡馬島藏南坊ノ僧ナリ、初メ桓武天皇ノ延暦二十一年、聖圓上人、靈場ヲ同地ニ草創シ、之ヲ醫王山藥師寺ト稱ス、清眼大僧都ハソノ中興ノ開山ナリ。夢ニ一異人ニ遇フテ一奇書ヲ獲タリ、披キ見レバ眼科ノ方書ナリ、之ヲ試ムルニ應驗神ノ如シ、眼ヲ病ムモノ四方ヨリ來タリ集マリテ馬島眼科ノ名遂ニ海内ニ普ネシト云フ。藥師寺ニ二十八坊アリ、藏南坊ハ其首座ナリ、清眼大僧都ハコレニ住シ康暦元年三月十九日ヲ以テ歿ス、藏南坊後チニ明眼院ト改ム。

馬島清眼大僧都像

馬島眼科ノ内容ハ僅ニ口授ノ小冊子ニ記スルトコロニヨリテ之ヲ推測シ得ルニ過ギズ。馬島眼科ニアリテ最モ重ク見タルハ内障ニシテ、ソノ内ニハ今日謂フ所ノ白内障ノ外ニ、硝子體・網膜等ノ病ヲモ含ミシナルベシ。ソノ他、結膜及ビ角膜ノ充血、瞳孔内出血、「フリクテン」、翼狀贅片、倒睫、膿漏性眼炎、夜盲、前房、蓄膿、緑内障等ノ諸症ヲモ記載シタリ。

療法ハ藥物ノ内用、藥汁ヲ用ヒテノ洗滌、軟膏貼傳、粉末撒布等ヲ主トシ、烙法、刺針、亂刺、白内障撥下法等ノ小手術ヲ施シタリ。

兒科

黴毒ノ發現

(1)竹田秀慶著、著者秀慶享祿元年年七十九歿

(2)甲州都留郡太田村妙法寺ノ記錄

兒科

此期ノ前半期ニ著ハサレタル有隣ノ福田方ニハ小兒病名ヲ擧ゲ、囘氣(小兒初メテ生レテ忽チ氣絶シ啼クコト能ハズ)臍風(臍風撮口)、夜啼、重舌、變蒸、客忤(オヒヤム)、積熱、驚風、解顱(アタマアワズ)、魃病(オトツハリ)(一名繼病)、疳病、不行ノ十二症トシ、千金方、聖惠方、和劑局方等ノ諸書ヲ引キテソノ治方ヲ說キタレドモ、コレヲ頤醫抄、萬安方等ニ擧グルトコロニ比シテ別ニ斬新ノ方ヲ加ヘタルモノナシ。

黴毒ノ發現

月海錄(1)ニ載スルトコロニ據レバ『永正九年壬申、人民多有「瘡、似ニ浸淫瘡、是膿疱、飜花瘡之類、稀所」見也、治「之以ニ浸淫瘡之藥ニ云云、謂ニ之唐瘡、琉球瘡」トナリテ、浸淫瘡ニ似タル一種ノ瘡ガ盛ニ行ハレタルコトヲ說キ、時ノ人ガコレヲ唐瘡又ハ琉球瘡ト名ヅケタリト云フコトヲ擧ゲタリ。永正九年ハ西暦一千五百十二年ニ當リ、歐洲ニ黴毒ノ初メテ現ハレシ時ヨリ十五六年。支那ニ該病ノ初メ現ハレシハ弘治ノ末カ、正德ノ初ナレバ、ソレヨリ數年ノ後ナリ。妙法寺記(2)ニ曰ク『永正十年、此年天下ニタウモト云フ大ナル瘡出デ平癒スルコト良久、其形譬ヘバ癩人ノ如シ、食ハ達者ナル人ノ樣ニスムナリ』ト、タウモトニ云フトタウハ唐、モハモガサノ略ニシテ唐疱瘡ノ謂ナラン。スナハチ月海錄ニ云フトコロノ唐瘡ナラン。ソノ記載ノ症狀ヨリ推シテ黴毒性ノ發疹ナリシコトハ疑ヲ容レズ。月海錄モ妙法寺記モ共ニ當

時ノ人ノ手ニ成リタル記錄ナレバ、黴毒ガ此頃始メテ我邦ニ現ハレタルコトハ加々信ゼラルルコトナルベシ。思フニ、當時、支那人若クハ琉球人ノコノ新病ヲ我邦人ニ傳ヘタリト認メラレタルニヨリテ之ヲ唐瘡又ハ琉球瘡ト稱セシモノナラン。歐洲ニアリテモ始メテ此病ノ認メラレタルトキハ、互ニソノ本場ト認メラレタル國名ヲ冠シテ、フランス病、子アペル病、西班牙病ナドト稱セラレタリ。

支那ノ古醫書(隋唐以前ノ方書)ノ中ニ陰瘡、陰蝕瘡、妬精瘡等ノ名稱アリ。男女ノ陰部ニ破潰性潰瘍ヲ發スルコトハ已ニ古代ニモ注目セラレタルコトヲ知ル。然レドモコレ等ノ諸症ニハ自發ノモノアリ、今日ノ黴毒性ノモノニアラザルコト明ナリ。妬精瘡ハ後ニ至リテ不潔ノ交接ニヨリテ感染スルモノナリト說キ、此期、貞治年間ノ著述、福田方ニハ『妬精瘡(マラヤクビヤウ)ヲ治スル方、コノ病ハ男子ハ陰頭節(マラカリ)ノ下ニ出デ、婦人ハ玉門(ツヒ)ノ中ニアリ、併ビニ疳瘡(クサ)ニ似テ臼穴ヲ作シ、食入(ハミ)リテ大ニ痛ム』『妬精瘡ハ邏欲(モラフ)ノ人ノ病ナリ、邏欲トハ他人ノ交接シタル女人ヲ犯スニ依リテ婬精相合シテ起ル病ナリ』ト記載セリ。妬精瘡ニマラヤクビヤウノ訓ヲ附シ、且ツ不潔ノ交接ニヨリテ生ズルモノナルコトヲ記載セルニヨリテ見レバ傳染性ノモノナリシナランモ、硬性下疳ト認ムベキモノニアラズ。

俗間ニ唐瘡トシテ傳ヘラレタル新病ハ醫書ニ楊梅瘡(ヤウバイ)ノ支那名ヲ用ヒテ呼バレタリ。永正九年ヨリ二十年ノ後、享祿三年ニ著ハサレタル周監方ニハ已ニ楊梅瘡ノ稱呼ヲ擧ゲタリ。ソノ他、綿花瘡(メンクワ)、天疱瘡、ナドトモ唱ヘタリ。

安土桃山時代ノ醫學

(1) 四曆一五六八年

參考書籍

(1) 太平記　卷二十五

(2) 日本眼科小史　醫學博士小川劍三郎著
日本眼科略史　富士川游著
日本眼科ノ由來　醫學博士河本重次郎著

(3) 馬島明眼院略傳　醫學博士小川劍三郎著　醫談第五十六號所載
馬島明眼院ノ來歷　馬島順吉述　醫談第五十六號所載

(4) 梅毒起原考　平出隆軒著　東京醫事新誌第八百九十一號所載

(5) *Okayama*, Zur Geschichte der Syphilis in China und Japan. Monatshefte f. prak. Dermatologie. 1899.

(6) *Saauki*, Die Geschichte der Syphilis in China und Japan. 1903.

(7) *Dohi*, Beiträge zur Geschichte der Syphilis insbesondere über ihren Ursprung und ihre Pathologie in Ostasien. 1923.

(8) 東亞梅毒ノ起原ニ就テ　富士川游著

第七章　安土桃山時代ノ醫學

戰國ノ末ニ方リテ織田豐臣ノ兩氏相嗣デ興リ、遂ニ天下ヲ統一スルニ至リシ間ヲ安土桃山時代ト稱ス。織田信長ガ安土ノ城ヲ出デテ、京都ニ入リ、ココニ幕府ヲ開キシハ永祿十一年(1)ニシテ、其後、豐臣秀

(1)西暦一六一五年

金元醫學ノ輸入

(1)字ハ守眞

(2)字ハ子和

吉、織田氏ニ代リテ天下ノ權ヲ握リシモ、秀頼ノ代ニ至リテ豐臣氏遂ニ亡ビシハ元和元年(1)ナリ。永祿十一年ヨリ元和元年ニ至ル、其間僅ニ五十年ニ過ギザレドモ、此期ハ戰國時代ヨリ統一時代ニ移リタル時期ニシテ、京都ハ再ビ興隆シ、學問モ漸ク盛ナルヲ致シ、殊ニ此頃火器ノ始メテ我邦ニ入ルアリ、次デ耶蘇教ノ始メテ我邦ニ入レルニ及ビテ、我邦ハ始メテ西洋ノ文物ニ接シ、從テ我ガ醫學ノ上ニ著甚ノ影響ヲ及ボシタリ。

金元醫學ノ輸入

支那ニアリテハ、宋ノ神宗ノ時、元豐年間、天下ノ名醫ニ詔シ、各々得效祕方ヲ進上セシメ、之ヲ太醫局ニ下シテ驗試シ、方ニヨリテ藥ヲ製セシム、後二十餘年徽宗ノ時、大觀年間ニ至リテ陳師文等ニ勅シテ局方書ヲ校訂シテ和劑局方五卷ヲ作ラシム。コノ書一タビ出デテ天下ノ醫家之ヲ奉ジテ金科玉條トシ、其說ハ宋、元ノ間ニ盛ニ行ハレタリ。我邦ニアリテモ鎌倉時代ヨリ室町時代ニ至ルノ間、宋ノ醫學ヲ傳ヘタル時代ニハ專ラ和劑局方ノ說ヲ奉ジタルコトハ既ニ上章ニ之ヲ述ベタリ。次デ金ノ代ニ至リテ劉完素(1)アリ。疾病ハ五運六氣ノ化ニ歸スルコトヲ說キ、治病ノ要ハ陰陽虛實ヲ別ツニアリトシ、主治ハ一ニ仲景ヲ宗トシ、大旨瀉火ヲ主トシ、多ク凉劑ヲ用ヒタリ。

劉完素ノ後ニ張從正(2)アリ、ソノ法ハ劉完素ヲ宗トシ、風、寒、暑、濕、燥、火ノ六門ヲ以テ醫方

此期ノ醫學

(1)東垣ト號ス

(2)丹溪ト號ス

ノ關鍵トナシ、汗、吐、下ノ三法ヲ立テテ、病邪ヲ攻ムルノ法ヲ主張シタリ。

和劑局方ヲ奉ズルノ說ハ宋ノ代ヨリ元ノ代ニ及ビ、成法ニ拘泥シテ虛實ヲ察セザルノ弊アリシガ、劉完素、張子和ニ至リテ濕熱相火ノ說ヲ立テシガタメニ攻伐ヲ以テ生氣ヲ戕フモノ尠カラザリキ。然ルニ、金ノ末、元ノ始ニ至リテ李果(1)出デテ疾病ノ內外二傷ニ因ルコトヲ說キ、脾胃ヲ滋補シ、元氣ヲ昇上セシムルヲ以テ治病ノ要訣トシタリ。李果ノ學ヲ傳フルモノニ羅知悌アリ、羅知悌ノ門人ニ朱震亨(2)アリ、諸家ノ學ヲ傳ヘテ自カラ發明スルトコロアリ、和平ノ劑ヲ用ヒテ補益スルコトヲ主トシ、張仲景ガ說ノ外傷ニ詳ナルト、李東垣ガ說ノ內傷ニ詳ナルヲ併セテ治方ヲ立テ、局方發揮ヲ著ハシテ、痛ク局方ノ學ヲ排斥セルヨリ、醫學ハ全ク一變シタリ。

此ノ如クニシテ、金、元ノ醫學ハスナハチ李・朱ノ醫學ニシテ、室町時代ノ末期、田代三喜明ヨリ歸リテ之ヲ唱道シタレドモ、三喜關東ノ僻地ニ居リシガタメニ、遂ニソノ學ヲ天下ニ弘ムルニ至ラズ。戰國時代ヨリシテ統一時代ニ移ルノ時ニ際シテ曲直瀨道三出デテ、三喜ノ學ヲ傳ヘ、京都ニ歸リ、輦轂ノ下ニアリテ生徒ヲ集メ、著述ヲ公ニシ、且ツ大ニ治ヲ施シタルガタメニ、李・朱醫學ハ始メテ大ニ我邦ニ行ハルルニ至レリ。

外感
內傷

李・朱ノ醫學ヲ宗トセルトコロノ此期ノ病理學ハ先ツ外感ト內傷トヲ區別シタリ。ソノ外感ハ賊風虛邪(風・寒・暑・濕)ノタメニ起リ、內傷ハ飲食・起居等ノ不攝生ニ由ルモノニシテ、內脾胃ヲ傷ブルトキハ、スナハチソノ氣ヲ傷ブル、外風寒ニ感ズレバスナハチソノ形ヲ傷ブルトナセリ。

案ズルニ、外感ノ說ハ後漢ノ張仲景ガ傷寒論ニ主張セルトコロニシテ、風・寒・暑・濕ノ外感中、特ニ風寒ヲ主トシ、萬病風寒ヨリ起ルト信ゼシハ唐以前ニ行ハレタルコトナリ。內傷ノ說ハ元ノ李果ノ內外傷辨惑論ニ詳ニシテ、脾胃ノ傷ブラルルニ由リテ萬病ノ生ズルヲ說キタルハ此時ニ始マル。朱震亨ニ至リテ更ニ相火ノ說ト鬱證ノ論トヲ加ヘタリ。ソノ說ニ據ルニ、大極ハ水、火、木、金、土ヲ生シ、各其性ヲ一ニスレトモ、ヒトリ火ニハ二アリ、其形質相生ジテ五行ニ配スルモノヲ君火ト云ヒ、虛ニ生シテ守位ナリ、命ヲ稟ケ、動ニヨリテアラハルルモノヲ相火ト云フ、君相二火ノ外ニ、又五臟ノ火アリ、五志ノ內ニ根サス、六慾七情之ヲ激スレハ其火隨テ起ルト說ク。ソノ鬱證ヲ說明スルヤ曰ク、『氣ノ昇ルベクシテ昇ルコトヲ得ズ、降ルヘクシテ降ルコトヲ得ズ、變化スベクシテ變化スルコトヲ得ザルカタメニ傳化常ヲ失シテ鬱證ココニ生ズ』ト。

疾病ノ原因ヲ說クニ方リテ、始メハ單ニ外感ヲ以テ主要ノ原因トナセシガ、後ニ至リテハ單ニ外感ノミヲ以テ主要ノモノトセズ、醫學的ノ知識ニヨリテソノ原因ヲ身體內部ニ探ラントシ、ココニ內傷ノ說アリ。又外感ノ中ニアリテモ古人ノ風寒ヲ主トセルニ反シテ濕熱ヲ主要ノモノトスルニ至レリ。

氣血痰鬱

內科

此ノ如キ病理說ニ本ヅキテ、疾病ヲ區別シテ內病ト外病トノ二種トナシ、內病ハ五藏ノ鬱ヨリシテ發シ、外病ハ經絡ヨリシテ感ジテ入ルト說キ、又疾病ヲバ氣・血・痰・鬱ノ四症トナシ、ソノ氣・血・痰ノ三證ハ病ヲナスノ源ニシテ、氣・血・痰三病久シク鬱ヲ兼子、或ハ痰久シクシテ氣・血・痰病ヲ生ズルモノナリト說キタリ。

疾病ノ病理ヲ說クニ方リテ、佛典所載ノ說ヲ交ヘタルコトハ奈良朝以後、室町時代ニ至ルマデ、代々ノ醫家ノ間ニ行ハレシトコロナリシガ、此期ニ至リテハ佛典ノ說ヲ引クコトハ殆ドソノ跡ヲ絕チ、コレニ代リテ顯ハレシハ儒學ノ影響ナリキ。蓋シ宋儒性理ノ說ハ既ニ室町時代ニ我邦ニ傳ハリタルモノナレドモ、此期ニ至リテハ漸次ニソノ勢力ヲ擴張シ、殊ニ我ガ醫學ハ宋儒性理ノ說ニ本ヅキテ立論セルトコロノ李・朱醫學ノ輸入ニヨリテ儒學ノ影響ヲ蒙ムリタルコトハ頗ブル顯著ナルモノアリキ。

內科

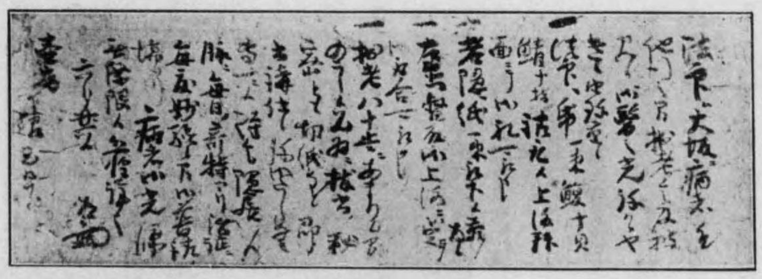
內科ヲ本道ト名ヅク、古ヘ體療ト言ハレタルモノナリ。此期ニアリテ醫家ニハ既ニ外科(金瘍醫)、女科(產科)、眼科(目醫)、口齒科(口中科)等ノ專門アリ。而シテ本道ハ是等諸科ノ外ニ立チ、醫學ノ主要部分ヲ占メ、當時單ニ醫師トイヘバ、スナハチ本道ヲ指スホドナリキ。室町幕府時代ノ末造、名醫ノ聞エアリシハ坂、竹田、半井、吉田、祐乘坊等ノ諸家ナリシモ、ソノ遵奉セルハ概チ宋ノ醫方ニシ

ラ、治法ハ和劑局方ニ據リ、別ニ發明ノ說ナカリシニ、此期ニ至リテ、曲直瀨道三出デテ、李・朱ノ醫學ヲ唱道シ、又啓迪院ヲ洛下ニ建テテ大ニ後進ヲ勸奬セシヨリ其門ニ俊彥ヲ出スコト甚ダ多ク、李・朱ノ醫學ハ遍ク天下ニ行ハレ、醫家ハ一時皆其說ニ服シ、遂ニ道三流ノ一派ヲ成スニ至レリ。

曲直瀨道三、名ハ正盛(或ハ正慶)、字ハ一溪、雖知苦齋又盡靜翁ト號ス、其先ハ宇多源姓佐々木氏ヨリ出デ堀部ヲ氏トスルコト數世、父ヲ堀部左門親眞トイヒ、母ハ目賀多氏ノ女ナリ、永正四年九月十八日ヲ以テ京都柳原ノ邸ニ生マル、翌日其父ヲ失ヒ、又母ヲ失フ、伯母及ビ姉ニ養ハル。幼ニシテ穎悟、十歲ノ時江州ノ天光寺ニ入ル、十三歲ノ頃相國寺ニ移リ、藏集軒ニ寓シテ喝食トナリ、名ヲ等皓ト稱ス、能ク三體詩、東坡山谷等ノ詩集ヲ讀ミテ之ヲ暗誦ス。二十二歲ニシテ遠遊學ヲ修ムルノ志アリ、肥後ノ人西友鷗ト共ニ東行シ、下野ノ足利ニ至リ、ソノ學校ニ入リ正文伯ニ師事シテ經史諸子ノ書ヲ涉獵ス、時ニ田代三喜、導道練師ト稱シ初メテ李・朱醫學ヲ關東ニ唱ヘ、武毛ノ間ヲ往來シテ時ニ名アリ、享祿四年十一月道三始メテコレニ柳津ニ會シ、其說ヲ聞キ、爾來親炙スルコト十餘年遂ニ辭シテ京都ニ歸ル、時ニ天文十四年ナリシガ、明年ニ至リテ浮屠ヲ辭シテ俗ニ還リ、醫治ヲ專ニセリ。此歲將軍足利義輝ニ謁シ大ニソノ寵遇ヲ受ク。細川勝元、三好修理、松永彈正等亦厚ク之ヲ遇ス、皆ソノ醫療效驗アリ全治ノ功多キヲ以テナリ。道三又學舍ヲ洛下ニ建テ、之ヲ啓廸院ト稱シ、徒ヲ集メテ經ヲ講ジ、後進ヲ誘掖スルコトヲ以テ己ガ任トナス。其名益〻顯ハレテ一時知ラザルモノナシ。道三洛下ニアリテ醫治ヲ以テ門戶ヲ張ルコト二十餘年、嘗テ我朝從來察證辨治ノ全書尠キヲ憂ヒ、親驗實試スルトコロニ基ヅキ、古來ノ醫書ヲ涉獵シテ、ソノ精粹ヲ拔キ、拾集シテ編ヲナシ、天正二年ニ至リテ始メテソノ稿ヲ脫シ、スベテ八卷ヲナシ、啓廸集ト題セ

曲直瀨道三像

リ。其年十一月十七日道三其書ヲ奉ジテ叡覽ニ供ス、天皇大ニ嘉稱シ給ヒ、翠竹院ノ稱號ヲ下賜シ、又僧策彥ニ勅シテ其書ニ序セシメ給フ、時人之ヲ榮トス。道三晚年號ヲ享德院ト改メ、豐臣、德川二氏ニ重ゼラル、然レドモ其徵ニ遇フテ深ク自カラ醫ニ隱レテ出デテ仕フルコトヲ肯ゼズ、文祿三年正月四日、年八十八ニシテ歿ス。墓ハ京都寺町十念寺ニアリ。碑面タダ贈法印曲直瀨一溪道三ノ十字ヲ刻スルノミ。後陽成天皇ノ時慶長十三年四月、正二位法印ヲ贈ラレタルヲ以テナリ。道三庭田氏ノ女ヲ娶リ一子ヲ生ム、名ハ守貞先ツ歿ス、妹ノ子大刀之助ヲ養ヒテ嗣トナシ、守貞ノ女ヲ以テコレニ妻ハス、東井女朔コレナリ、亦道三ヲ襲稱ス、其後累世皆道三ト稱ス。



曲直瀬道三遺墨

道三別ニ一孫女アリ、弟子正琳ニ妻ハシテ曲直瀬ヲ冒サシメ、享德院ノ號ハ之ヲ正純ニ讓リ、翠竹院ノ稱ハ之ヲ嫡孫守伯ニ授クタリ。

曲直瀬道三ノ著述尠カラズト雖モ、察證辨治ノ全書ニシテ依リテ以テ道三學ノ眞相ヲ知ルベキモノハ啓廸集八卷ナリ。コノ書ハ劉守眞・李東垣・朱丹溪三氏ノ說ヲ主トシ、ソノ他金元醫家ノ所說ヲ引キ、疾病ヲバ發生ノ部位ニヨリテ別チテ內病ト外病トナシ、內病ハ五臟ノ鬱ヨリシテ發シ、外病ハ經絡ヨリ感ジテ入ルトナセリ。又疾病ヲバ原因ニヨリテ別チテ氣・血・痰・鬱ノ四症トナシ、ソノ氣・血・痰ノ三證ハ病ヲナスノ源ニシテ、氣・血・痰三病久シクシテ鬱ヲ兼ネ、或ハ痰久シクシテ氣・血・鬱三病ヲ生ズト論ジタリ。是ヨリ先キ月湖ノ全九集アリ、濟陰方アリ、李朱ノ醫方ハ已ニ我邦ニ傳ハリ居タレドモ、啓廸集ノ刊行以前ニアリテハソノ方ハ僅ニ關東ノ一部ニノミ行ハレタルモノト察セラル。

曲直瀬道三ノ醫說ハ此ノ如ク李・朱醫學ヲ祖述シタルモノニシテ、ソノ醫術ハ診斷ヲ精シクシ、病因ヲ察シ、疾病ノ經過ヲ詳ニ

シ、ソノ急性ノモノト、慢性ノモノトヲ區別シ、方土、男女、老若、貴賤等ニヨリテ疾病ノ症狀ニ差異アリ、從テ之ヲ治スルノ法ヲ異ニスベキコトヲ說キタリ。又藥物ノ宜禁ヲ論ジ、鍼灸ノ法則ヲ詳ニスベキコトヲ論ジ、我ガ醫法ハココニソノ面目ヲ一新スルニ至レリ。

曲直瀬道三ト時ヲ同フシテ關東ニ永田德本アリ、初メ李・朱ノ醫方ヲ學ビタレドモ後大ニ獨詣スルトコロアリ。李・朱醫學大ニ行ハレテ天下ノ醫家皆道三流ノ方則ヲ奉セントスルノ時ニ方リテ張然一家ヲ樹テ、張仲景ヲ宗トシ、汗・吐・下・和ノ治方ヲ唱ヘ、專ラ峻劑ヲ用ヒテ疾病ヲ攻擊スルコトヲ主トシタリ。是ヨリ先キ、室町時代ノ末葉、坂淨運明ヨリ歸リテ張仲景ノ法ヲ我邦ニ傳ヘタレドモ、ソノ論說ハ廣ク世ニ傳ハルニ至ラザリキ。永田德本ニ至リテ獨詣スルトコロノ十九方ヲ以テ機ニ應ジテ他人ノ學ブコト能ハザルトコロヲナシ、張仲景ノ學說ヲ實踐シテ時論ニ拘ラズ、傷寒論ノ方則ハココニ始メテ我邦ニ行ハルルニ至リ、遂ニ德本流ノ一派ヲ成シタリ。

永田德本、知足齋ト號ス、古ニ所謂隱醫ニシテ其出ヅル所ヲ詳ニセズ、或ハ參河ノ人ナリト云ヒ、或ハ美濃ノ人ナリト云ヒ、或ハ信濃ノ人ナリト云ヒ、或ハ甲斐ノ人ナリト傳フ。蓋シ德本ハ逐鹿ノ時ニ方リテ世紛ヲ厭棄シ、諸州ヲ周遊シテ一處ニ留マラズ、而シテ中間甲斐ニ居ルノ日多キガ故ニ世ニ傳ヘテ甲斐ノ德本ト曰フ、出羽ノ人僧殘夢ヲ師トシ、又方ヲ月湖ノ徒玉鼎ニ受ケ、後一家ヲ成シ、醫ヲ以テ四方ニ周遊シ、文永享祿ノ間、甲斐ニアリテ武田氏ニ客タリシガ天文中去リテ信州ニ赴キ、諏訪東堀村ニ居ル、天正ノ末武田氏亡ブニ際シテ復タ甲斐ニ歸リ自ラ草廬

永田德本像

永田德本遺墨

ヲ構ヘテ茅庵ト云フ、出ヅレバ卽チ頸ニ藥囊ヲ掛ケ、横ニ牛背ニ跨ガリ、逍遙自適、富貴ヲ藐視シ、貧賤ヲ憫恤シ、或ハ自カラ藥籠ヲ負ヒ、甲斐ノ德本一服十八文ト呼ビ賣リアルキタリト云フ。蓋シ世醫ノ務メテ勢利ニ赴ムクモノヲ矯メント欲セルナラン。寛永ノ始、德川秀忠病アリ、醫ヲ累スルモ效ナシ、官醫某德本ヲ薦ム、德本召ニ應ジテ至ル、囊ヲ頸ニカケ牛ニ跨ガリ飄然トシテ來タリ一診シ、峻劑ヲ處ス、衆醫爭ヒ駁スレドモ德本抗辯屈セズ竟ニ其藥ヲ進ム、數日ニシテ頓ニ癒ユ、秀忠大ニ喜ビ厚ク賞賜スレドモ受クズ、幾モナク、復タ信州ノ故居ニ歸リ住ス、寛永七年春二月十四日ヲ以テ歿ス、享年百十有八、

男アリ孫兵衛トイフ、門人數十人、ソノ禁方書ヲ受ルモノハ馬場德寛、今井德山ノ二人ノミ。

德本ノ病理ヲ說クヤ、疾病ハ鬱滯ニ因ルモノトナスコト後ノ古方家ノ說クトコロニ同ジク、又疾病ノ原由

外科

自然良能ノ治方

永田德本墓

ヲ論シテ外感ト內傷トニ因ルトシ、ソノ外感ハ主ニ風寒ニ由ルトスルコト張仲景ノ傷寒論ニ本ヅクモノナルベク、後世後藤、山脇、吉益ノ諸家ガ唱道セルトコロハ已ニ德本ニヨリテ唱道セラレタルナリ。德本ハ又、當時世醫ガ宜禁ノ說ニ拘泥シテ治方ヲ誤マルノ弊ヲ矯メントシ、『今古ノ醫書多クハ反古ナリ』トマデ絕叫シ、其人ノ性情ヲ察シ、閉塞ヲ啓クヲ以テ治方ノ要訣トナシ、所謂自然良能ノ治方ヲ稱揚シタリ。

德本ノ著述ニシテ世ニ傳ハルモノ醫之辯、知足齋醫鈔、德本遺方、藥方書、德本翁遺方等アリ、ソノ他、德本ノ遺著ト稱スルモノハ概子後人ノ假托ニ出ヅルモノニシテ信疑相半バスルモノナリ。

外科

室町時代ノ末造ニ金創醫ノ一派ヲ生ジテヨリ外科ハ瘡家又瘍科ト金創醫トノ二派ニ分離セリ。瘡家又瘍科ハ專ラ癰疽、疔瘤、瘰癧等ノ諸瘡ヲ治シ、古ニ創腫科ト名ヅケシモノニシテ、此期ニハ鷹取流ノ外科ト、南蠻流ノ外科トアリテ對峙シタリ。而シテ是等ノ外科ニアリテ固ヨリ金創ヲ兼ネ治スト雖モ、戰國ノ世、武ヲ尙ビ戰フ毎ニ創ヲ蒙ムルモノ多キニヨリテ、士林ニアリテ專ラ金創ノ治術ヲ攻究スルモノ尠カラズ、其術漸ク弘マリテ、所謂金創醫ノ一派ヲ生ズルニ至リシコトハ既ニ前期醫學ヲ論ズルノ條下ニ述ベシカ、コノ金創醫ハ此期ニ至リテモ尙ホ行ハレタリ。

鷹取流外科

天正・慶長ノ頃、播磨ノ人鷹取秀次（通稱甚右衞門尉）古法ヲ傳ヘ、外療細塹、外療新明集ヲ著ハシ、外科ヲ以テ一派ヲ成ス。コレヲ鷹取流ノ外科ト曰フ。秀次ノ子理齋亦外科ヲ以テ名アリシト云フ。惜カナ鷹取ノ傳ハ佚シテ今ニ傳ハラズ。思フニ鷹取流ノ外科ハ隋・唐ノ醫方ニヨリテ治方ヲ立テタルモノニシテ、ソノ治方ハ瘡瘍ヲ主トシ、藥治、水治、灸治、針治、祭治（咒ヒシテ治ス）ヲ擧ゲタルノミニテ別ニ大手術ヲ施シタルニアラズ。金創ノ治方ハ所謂金創醫ガ施シタルモノニ同ジキモノナリキ。

南蠻流外科ノコトニツキテハ後段ニ敍述スベシ。

眼科

眼科

前期ニ馬島流眼科起リテヨリ穗積、良峯、山口、佐々木、橘本、酣韶、青木等諸流ノ眼科相

踵デ起リ、秘方ヲ以テ各々一派ヲ成シタリ。ソノ支那ノ眼科ニヨリテ五輪八廓ノ說ヲ基トシ、又內障ヲ以テ主要トスルコトハ馬島眼科ト選ブトコロアルナシ。

婦人科

婦人科

南條宗鑑ガ選述セル選聚婦人方三卷ハ前期ノ末ニ世ニ現ハレ、此期ニ涉リテ行ハレタルモノニシテ、是書ハ婦人良方ヲ主トシ、唐宋諸家ヨリ李・朱兩家ニ至ルマテノ治方ヲ擧ゲタリ。此書中腰氣ノ一症ヲ擧ゲ別ニ一門ヲ建テタルコトハ注目スベキコトナリ。同時竹田秀慶ガ著ハシタル月海錄ニモ『婦人腰氣（コシケ）、近時勢尾人始唱レ之、今則遍ニ諸州一、帶脈之病也』ト記シタルヲ見レバ、腰氣トイヘル帶下ノ一症ハ此頃ニ始メテ我邦ニ現ハレシモノカ。

南條宗鑑、一鷗軒ト稱ス、伯耆ノ人、壯年ニシテ京師ニ遊ビテ醫ヲ學ビ遍ク諸州ヲ遊歷シテ治術精妙ノ名ヲ得タリ、著ハストコロ攝處集、撰聚婦人方、短要方等アリ、皇國名醫傳等ノ諸書ニ宗鑑ガ如意庵一栢等ニ從ヒテ醫ヲ修メタリト云フハ其孫宗栢ノ事ヲ誤マリ傳ヘタルナリ。宗鑑ノ子宗虎亦一鷗ト稱ス、醫ヲ以テ名アリ。

此期ノ產科ノ書ニ半井家產前產後祕書ト題スルモノアリ、半井氏ハ本邦醫道ノ世家タル和氣氏ヨリ出テ、明英・瑞策・瑞桂等ノ醫ニ名アルモノ踵デ興リ、此期ニアリテハ曲直瀨氏ト相併ビテ醫道ノ權威タリシガ、ソノ產科ハ婦人良方、和劑局方以外ニ出ルコトナカリキ。

其他、中條、板坂、乘附、瀨之尾、糟尾等金創醫ノ產科ヲ主トセルモノモ亦當時ニ行ハレタリ。

兒科

此期ニアリテハ板坂、岡、近藤等兒科ヲ專門トスルノ醫家アリ、家珍方、家傳小兒方、遐齡小兒方等小兒科ニ關スル專書アリ。

板坂宗慶、家珍方ヲ著ハス。

板坂鉤閑、家傳小兒方ヲ著ハス。

岡家重、一ニ元春、彌傳次(一ニ彌平次)ト稱ス、浮田秀家ニ仕フ、慶長二年故アリテ浮田氏ヲ辭シ剃髮シテ道和ト號シ醫ヲ業トシ、小兒科ヲ以テ京師ニ行ハル、其子元勝、智庵ト號ス、醫方ヲ修メ別ニ家ヲ成ス、弟宗成ノ子壽元(甫庵ト號ス)ヲ養フテ嗣トナス、壽元父ノ業ヲ承ケ、小兒科ヲ以テ名アリ、後德川幕府ノ醫官トナル。

近藤桂安、丹波ノ人、小兒科ヲ以テ名アリ、出デテ京師ニ居リ、其業大ニ行ハル、世ニ之ヲ丹波兒醫ト稱ス、後光明天皇ノ時特ニ法印ニ敍シ、壽伯院ノ號ヲ賜フ。

啓廸集以下所謂本道ノ書中ニモ小兒方ノ部門ヲ設ケ、小兒ノ養護及ビソノ雜病ノ治方ヲ擧グルコト從前ノ成書ノ例ニ異ナラズ。而シテ此期ノ醫學ハ李・朱兩氏ノ說ニ據リテ病理ヲ說キ治方ヲ立テタルコト、已ニ上段ニ說キタルカ如クナレバ、從テ兒科ニアリテモソノ病理及ビ治方ヲ論スルコトハ大概李・朱醫

學ノ論說ニ依據セルナリ。

老人科

我邦古ヨリ小兒科アリ、之ヲ大方脈科ヨリ區別シタレドモ、老人門ヲ設ケテ大脈科及ビ小方脈科(兒科)ヨリ分劃シ、老人ノ看護及ビソノ疾病ノ療法ヲ說キタルハ此期、曲直瀨道三ノ啓廸集ニ始マル。啓廸集ニハ醫林集要・惠濟方等ヲ引テ、老人ノ生理ノ少壯ノモノニ異ナル所以ヲ示シ、人生六七十ニ至ルノ後ハ精血俱ニ耗シ、平居無事ニシテ已ニ熱症アリ、故ニ補陰ノ方ヲ貴ミ燥劑ヲ用フルコトヲ忌ム、又飽食烹炮ニモ宜シク節アルベシト論ジタリ。又老人ノ疾病ト少壯ニ於クルモノト其證ヲ異ニスルモノアルコトヲモ說キタリ。

鍼灸科

鍼灸科ハ平安朝時代ニアリテハ醫道ノ要部ヲ占メ、鍼博士ハ醫博士ト相併ビテ其術ニ秀デタル人コレニ任セラレシガ、鎌倉時代ヨリ室町時代ニ至リテ、醫官制度ノ廢頹ト共ニ鍼博士及ビ鍼師ハ名實トモニ廢セラレシモノカ、本道ノ書ニハ別ニ一部門ヲ設ケテ鍼灸ノ術ヲ記セズ、而カモ鍼灸ノ術カ當時治方ノ一部トシテ實際ニ行ハレシコトハ諸家ノ方書ニ此法ヲ載セタルモノアルニ徵シテ明ナリ。シカルニ、此期ニ至

入江流鍼術

吉田流鍼術

意齋流打鍼

リテ鍼科専門ノ名家ヲ出ダシ入江・吉田ノ諸氏アリ、共ニ明人ノ鍼術ヲ傳ヘテ各々一派ヲ成セリ。

入江頼明、京師ノ人、豐臣氏ノ醫官園田道保ニ就テ鍼術ヲ受ケ、朝鮮ノ役、明人吳林達ノ傳ヲ受ケ、鍼術ニ精シキヲ以テ名アリ、其子良明父ノ術ヲ傳ヘ、之ヲ山瀨琢一ニ傳フ、琢一江戸ニアリテ益〻其術ヲ恢弘ス、之ヲ入江流ノ鍼術ト曰フ。

御薗意齋像

吉田意休、出雲大社ノ祝ナリ、永祿ノ初年明國ニ赴キ、刺鍼ノ術ヲ杏琢周ニ學ヒ、留マルコト七年ニシテ歸朝ス、著ハストコロ刺鍼家鑑アリ、其子意安、父ノ術ヲ傳ヘテ亦名アリ、コレヲ吉田流ノ鍼術ト曰フ。

入江・吉田ノ兩氏ニ次ギテ御薗意齋アリ、鍼術ヲ以テ名アリ、金銀ノ性溫柔ニシテ人體ニ適スルコトヲ知リ、始メテ之ヲ以テ鍼ヲ製シ、又小鎚ノ形圓クシテ扁ナルモノヲ作リ、之ヲ以テ鍼頭ヲ打チ徐々ニ膚肉ノ腠理ヨリ打入スルノ法ヲ施シタリ、世ニ之ヲ意齋流ノ打鍼ト稱ス。

御薗意齋、名ハ常心、通稱源吾、六孫王經基ノ三男武藏守滿季ノ後裔ナリ、父無分ノ術ヲ傳ヘ、鍼術ヲ以テ名アリ、正親町・後陽成ノ兩朝ニ仕ヘテ官鍼博士ニ至ル、門人藤木元成・中塚東齋・朝山更齋・森吉成・奥田九郎衛門等最モ著ハル、慶長ノ頃德川家康駿府ニアリテ病ム、意齋ヲ召シタルトキ病ニ臥シテ徵ニ應スルコト能ハス、

夢分流鍼術

口中科

後德川秀忠病ミシトキ意齋召サレテ江戸ニ赴キ、祕術ヲ施シテ效アリ賞賜厚カリシト云フ。著ハストコロノ書ニ醫家珍寶、鍼灸全論、神藥祕傳、アリ、元和二年十二月歿ス。

同時ニ夢分齋トイフモノアリ、亦打鍼(又ハ擊鍼)ノ術ヲ以テ顯ハレ、夢分流鍼術ノ祖タリト傳フ。

夢分齋ハ江州ノ僧ナリ、或ハ云フ奥州二本松ノ人、初メ禪僧タリ、後多賀法印ニ從フテ鍼術ヲ學ヒ、遂ニ鍼術ヲ以テ名アリ、夢分流鍼術ノ祖トナルト云フ。御薗家歷傳略記ニ據レバ常心ノ父ニ無分アリ、夢分ト文字ヲ殊ニス、別人ナルカ同人ナルカ詳ナラズ。

口中科(咽喉科)

大寶令ニ口齒ハ耳目ト併セラレテ專門ノ一科ヲ成シ。平安朝ノ末期ニ丹波兼康出デテ口齒科ヲ以テ名アリ。室町時代ニ至リテハ已ニ口齒科ノ專書アリシガ、此期ニ至リテ兼康、親康ノ兩氏アリテ共ニ口齒科ヲ專門トシ、之ヲ口中科ト稱セリ。

兼康氏ハ丹波氏ニ出ヅ。先祖鍼博士丹波康賴十四世ノ孫冬康典藥頭ニ任セラレ、口齒科ニ長ズ、其孫兼康晩ニ剃髮シテ善恭ト曰フ、始メテ兼康ヲ氏トシ、口中科ヲ以テ名アリ、其子賴定、賴定ノ子賴豐共ニ典藥頭タリ、其子賴慶、賴慶ノ孫賴元共ニ典藥頭タリ、賴元加茂氏ノ子玄泰(安齋ト稱ス)ヲ養フテ兼康氏ヲ嗣カシム、玄泰醫ニ精シク殊ニ口中科ニ長ス、德川家康ノ諱名ヲ憚リテ氏ヲ金保ト改ム、慶長十八年德川氏ノ醫官ニ擧グラル。

親康氏モ亦丹波氏ニ出ヅ、丹波康賴十六世ノ孫親康醫術ヲ善クシ、最モ口齒科ニ長ス、永正十七年官ヲ辭シテ

野ニ下リ、口齒科ヲ以テ世ニ行ハル、其子宗康、光康共ニ家業ヲ受ケテ口科ヲ專門トシ、宗康ハ宮内少輔典藥頭トナリ、光康ニ至リテ始メテ親康氏ヲ稱スト。

口中科ハ口病・舌病・齒病・咽喉病ノ治術ヲ專トシ、治方トシテハ一二内藥ノ他ニ、吹藥、含藥(ウガイ藥)、塗藥(又擦藥)ヲ用ヒ、手術トシテ刺針ノ法ヲ用ヒ、又固ヨリ拔齒ノ術ヲモ施シタリ。

耳科

耳科

耳科ハ大寶令ニハ專門ノ一科トセラレタレドモ、平安朝時代ヨリ鎌倉・室町兩時代ヲ經テ此期ニ至ルマデ、耳科專門ノ醫家ナク、本道及ビ外科ノ書中ニ耳病ノ部門アリテソノ治方ヲ記載セルニ過ギズ。

鼻科

鼻科

鼻病ハ古ヨリ耳・目・口・齒ノ病ト併ビ擧ゲラレ、而カモ耳・目・口・齒ハ既ニ平安朝以前ニアリテ、專門ノ科目トセラレタルニ拘ラズ、鼻病ハ此期ニ至ルモ尙ホ僅ニ本道及ビ外科ノ書ノ一部ヲ占ムルニ過ギズ。

平安朝時代醫心方ノ中ニハ鼻ノ疾病トシテ、鼻塞涕出(齆鼻)、鼻中息肉、鼻中生瘡、鼻痛、鼻衄、鼻中物入ヲ擧ゲ、鎌倉時代萬安方ニモ同樣ノ疾病ヲ擧ゲ、頓醫抄ニハ齆鼻ヲ鼻痔(ハナタケ)トシ、銅ノ火針ニテ烙クコトヲ擧ゲタリ。室町時代福田方ニハ鼻ノ疾病トシテ衄血、鼻痛、膿臭、涕出、齆鼻、

酒齆(俗ニ酒齆鼻(アカハナ))ヲ擧ゲタリ。此期曲直瀨道三ノ啓廸集ニ擧グルトコロモ大體コレニ同ジ。

藥物科

藥物ノ性・色及ビ名實ヲ講ズルコトハ本草學トシテ平安朝時代以來盛ニ行ハレシガ、コノ科ハ醫術ノ進歩ト共ニ益〻重要視セラレ、此期道三學派ニアリテハ藥劑ノ氣味ヲ辨ジ、ソノ能毒及ビ宜禁ヲ詳ニシテ七情ヲ分チ、七方、十二劑ヲ明カニシ、又生熟炮製ノ法則ヲ知ルヲ以テ醫家ノ要務トナセリ。

藥劑ノ氣トハ寒、熱、溫、冷ノ四性ヲ云フ、味トハ酸、苦、甘、辛、鹹ノ五味ヲ云フ。

藥劑ノ七情トハ單行、相須、相使、相畏、相惡、相反、相殺ヲ云フ。單行ノモノハ諸藥ト劑ヲ共ニスベカラズ、相須ノモノハ二藥相關シ、相使ノモノハヨク使卒トナリ諸經ニ引達ス、相惡ノモノハ彼レ毒アリテ我コレヲ惡ムニテ、相畏ノモノハ我能アリテ彼コレヲ畏ルルナリ、此二者ハ併セ用フルモ深ク害ヲナサズ、相反ノモノハ兩者反抗ス、併セ用フベカラズ、相殺ノモノハ彼等毒ニ中タルトキ此ヲ用ヒテ能ク殺除スルナリ。

七方トハ大、小、綾、急、奇、偶、複ヲ云フ。品數多キヲ大方ト云ヒ、品數少ナキヲ小方ト云フ、緩方ハ毒ナクシテ病ヲ治スルモノ、急方ハ急病ノ方、奇方ハ古相ノ單方偶方ハ複法ナリ。

十二劑トハ宣、通、補、泄、輕、重、澁、滑、燥、溫、寒、熱ヲ云フ。ソノ作用ニツキテ斯ク別ツナリ。

本草學ノ研究ト共ニ藥品修製ノコトニモ注意ヲ拂ヒ、調劑ニハ丹藥、煎藥、丸藥、散藥、膏藥ノ

西洋醫學ノ輸入

(1)西暦一五四九年

(2)Francis Xavier
(3)Paul de Santa Fe

諸法ヲ擧ゲタリ、而シテ當時多ク用ヒラレシハ湯煎ニシテ膏藥ハ專ラ之ヲ瘡瘍ニ用ヒタリ。

西洋醫學ノ輸入

建國以來二千年、外邦ト交通セルハ朝鮮・支那等近隣ノ諸國ニ止マリシガ、此期ニ至リテ所謂南蠻人ノ始メテ我邦ニ來タレルアリ、鐵砲・火藥ノ輸入ニ次キテ木綿・煙草ヲ移植シ、又新ニ耶蘇教ヲ傳フルアリテ、我邦ハココニ始メテ西洋ノ文化ニ接シ殊ニ我ガ醫學ハコレカタメニ著明ノ影響ヲ蒙ムリタリ。

所謂南蠻人ハ葡萄牙人ニシテ、ソノ始メテ我邦ニ來タレルハ天文年間ナリ。ソノ始ハ漂著セルモノナリシガ、早ク通商交航ノ道ヲ開キ、ソノコト僅ニ緒ニ就クヤ既ニ宗教ノ弘布ニ力ヲ盡シ天文十八年(1)ニハ「エスウイート」ノ名僧フランソア、サヴィール(2)ポール、ドサンタフエ(3)ヲ伴ナヒテ鹿兒島ニ來タリ、先ヅ島津氏ノ許諾ヲ得テ布教ニ從事シ、遂ニ九州内地ニ入リ、豐後・平戸ヨリシテ山口ニ赴ムキ、大内義隆ノ信重スルトコロトナリテ滯留一年間ニ三千餘人ニ洗禮ヲ行ヒタリト傳フ。

サヴイールハ一千五百六年四月七日パムプロナ城ニ生マル、後巴里ニ遊ビ、イグナチアス、リオラノ「エスウート」宗派ヲ創ムルニ遇ヒ、コレニ親炙シテ宗教ノ革新ニ從事シ、ソノ革新セル宗教ヲ東洋ニ傳ヘンカタメニ一千五百四十一年、印度ニ來リシナリ。ソノ我邦ニ來リシハ一千五百四十九年ニシテ、一千五百五十五年廣東ニアリテ病歿セリ。

ポール、ド、サンタフエハ初ノ名ヲアングルト云フ、本名安治郎(一ニ半治郎、又ハ本四郎、其姓ヲ失ス)、鹿兒島ノ人、

(1) Louis Almeida

南蠻寺

(2) Gregoria
(3) Louis

人ト爭鬪シテ之ヲ殺セシニヨリ、葡萄牙船ニ身ヲ投シ、ゴアニ赴キ、サヴールニ遇テ「エスウート」教ニ歸依シ、洗禮ヲ受ケテ、ポール、ド、サンタフエノ名ヲ得、サヴールノ信任スルトコロトナル、依テサヴールニ勸メテ天文十八年相伴フテ鹿兒島ニ歸リ、後サヴールト共ニ山口ニ移リ、布教ニ力ヲ致セリ、弘治三年豐後ニアリテ病歿セシガ、此人ハ別ニ醫術ヲ修メシモノト見エ、山口ニアリシトキ病人ヲ治セシコト日本西教史ニ見エタリ。或ハ曰ク、アングル、本名ヲ了西ト云フ、大和ノ人、出奔シテゴアニ至ルト。

「エスウィート」ノ宣教師ハ宗教ノ敷說ニ力ヲ致スニ方リ、恩德ヲ被ムラセテ以テソノ宗教ノ内ニ入レントシ、殊ニ施療救恤ノコトニ心ヲ專セリ。スナハチ葡萄牙ノ人ルイ、アルメイダ(1)ハ救濟院二箇所ヲ設ク、一ニハ癩病者ヲ收容シ、一ニハ全國ノ幼兒ヲ收容セリト傳フ。又豐後ノ國主大友宗麟ハ耶蘇教師ノ勸告ニ從ヒテ、一ハ幼兒ノタメ、一ハ癩病者ノタメ、一ハ窮民病者ノタメ、三箇所ノ救濟院ヲ建テタリト云フ。思フニ西洋人ガ我邦ニアリテ醫術ヲ施シタルハ此時ニ始マルモノナルベシ。

織田信長ノ足利氏ニ代リテ天下ノ政權ヲ握ルヤ、天台・一向ノ宗徒ガ舊來ノ勢威ヲ恃ミテ從順ナラザルヲ惡ミ、大ニ攻擊シタレドモ、コレニ反シテ耶蘇教徒ハ布教ノ念切ニシテ諂諛コレ事トシタレバ、ソノ懇請スル儘ニ布教ヲ許シ、永祿十一年京都四條坊門ニ方四町ノ地ヲ與ヘ、一寺ヲ創立セシメ、コレヲ南蠻寺ト稱シ、別ニ五百石ノ領地ヲ寄附セリ。此時來朝ノ僧徒二人、グレゴリア(2)、ルイ(3)、共ニ醫術ニ精シキヲ以テ南蠻寺中ニ病者ヲ留メ、醫藥ヲ給シ、恩惠ヲ施シテ以テ布教ノ方便トナセリ、又

藥種ヲ植エ、濟生ノ備ヲナサンコトヲ乞ヒ、江州伊吹山ニ方五十町ノ地ヲ得テ、コレヲ藥園トナシ、本國ヨリ凡ソ三千種ノ藥草ヲ移植シタリト云フ。

然ルニ天正十三年、豐臣秀吉、織田氏ニ代リテ政權ヲ執ルニ及ビ、南蠻寺僧徒ノ奸詐、人民ヲ啞惑スルモノナリトシテ、急ニ兵ヲ遣シテ其寺ヲ圍ミ、教僧ヲ捕ヘテ長崎ニ送リ、本國ニ返シテ再ビ來タルコト勿ラシメタリ。而カモソノ醫術ハ一二徒弟ノタメニ傳ヘラレテ、近畿地方ニ遺存セリ。所謂南蠻流ノ醫術ハ此ノ如クニシテコノ時代ニ興リタリ。

僧惠春（一ニ慧俊ニ作ル）加賀ノ人、禪宗ノ僧侶ナリシガ、癩ヲ病ミ、身體破レ、膿血溢腫、人ト交ルコト能ハズ、貧賤ニシテ醫療ヲ加フルコトヲ得ズ、乃チ乞丐トナリテ京師ニ來タリ、眞葛ケ原ニ起臥シテ憐ミヲ行人ニ乞ヒ居タルヲ南蠻寺ニ引キ取リ、グレゴリア、ルイノ兩人、コレニ施療シテ恢復シタリ。惠春深ク之ヲ德トシ、ソノ宗旨ニ歸依シ、名ヲバヒアン（梅庵）ト稱シ、剃髮僧形ノ儘ニテ布教ニ從事シ、又醫術ヲ學ビ、コレヲ實地ニ施シタリ。天正十三年豐臣秀吉ノ南蠻寺ヲ毀タシムルニ方リテ西國ニ逃レ、之ク所ヲ知ラズト云フ。

吳服屋安右衛門、泉州堺ノ人、初メ富豪ノ商賈ナリシガ、家道零落シ、剩ヘ瘡毒ヲ患ヒシガ、出奔シテ京師ニ至リ東寺廻廊ノ下ニ潛ミ、出デテ食ヲ乞ヘリ、遂ニ南蠻寺ノ收容スル所トナリテソノ療養ヲ受ケ、累月ニシテ治癒ニ就キタリ。是ニ於テソノ宗門ニ歸シ、名ヲコスモ（告須蒙）ト稱シ、說教ニ從事シタリ。（或ハ云フ、安右衛門ハ堺ノ豪農ノ子、私カニ京都ニ來タリ、カブラルニ就テ洗禮ヲ受ク、其父聞テ大ニ怒リ之ヲ放逐ス、ヨリテ窮シテ遂ニ南

蠻寺ニ入レリト）。天正十三年ノ變、逃レテ江州ニ入リ、後堺ニ來タリ、蝦子街中ノ濱ニ居リ、名ヲ市橋庄助ト改メ專ラ外科ノ治療ニ從事セリ。天正十六年捕ハレテ粟田口ニ刑セラル。

百姓善五郎、泉州墨村ノ人、生レテ缺脣ナリ、長ジテ產ヲ破リ、食ヲ近隣ニ乞フ、安右衛門ト共ニ京都東寺ノ廻廊ニ潛ミ居リケルヲ南蠻寺ニ收容セラレ、ソノ宗門ニ歸シ名ヲジュモン（壽門）ト稱シテ布教ニ從事セリ、天正十三年ノ變ニ逃レテ越前ニ走リ、後堺ニ至リテ東湊ニ醫業ヲ開キ、名ヲ島田清庵ト改メ、內科ノ醫師トナレリ、天正十六年九月市橋庄助ト共ニ捕ハレテ京師ニ刑セラル。

南蠻流外科祕傳書（忠菴所說ト傳フ）ニ記スルトコロニ據レバ、『夫レ人間ノ五體ニニウモル(1)ト云フ血ノ名四ツアリ、一ニハサンギ(2)二ニハコレラ(3)三ニハヘレマ(4)四ニハマレンコレヤ(5)コレナリ、サンギトイフハ能血（ヨキチ）ノコトナリ、性ハ熱ニシテ濕ナリ、コレラト云フハ血ノ上澄、薄血ナリ、性ハ熱ニシテ燥ナリ、ヘレマト云フハ血ノ內ニアル水ナリ、性ハ寒ニシテ濕ナリ、濕痰ノ腫物ハコレヨリ起ル、マレンコレヤト云フハ血ノオリナリ、性ハ寒ニシテ燥ナリ、シカルニ右ノ血何レモ五體ニ過不及ナク、相應スルトキハ無病ナリ、右四色ノ血ヲ損サスモノハ風・寒・暑・濕・飲食又ハ房事ヲ過スカ、或ハ金創・打身或ハ遠ク行クカナドシテ血氣滯ル故ニ瘡腫物モ出來、諸病ニ發ルナリ』トアリ、コレ血液・黃膽汁・粘液・黑膽汁ノ四液ノ調不調ヲ以テ疾病ノ發生ヲ說クトコロノ液體病理說ニシテ、ソノ說ハ遠クヒポクラーテスニ出デ、ガレーヌスニ至リテ大成セルモノナリ。我ガ織田・豐臣兩氏ノ時代ハ西洋ノ十六世紀ノ後期ニ相當

四原液說

(1) Humor
(2) Sanguis
(3) Cholera
(4) Phlegma
(5) Melanchoria

南蠻流外科

(1) 西暦一六一二年

(2) Christophan Ferreira

スルガ、彼邦十六世紀ハ所謂文運復活時代ニシテ、醫家ノヒポクラーテスヲ研究スルモノ多ク、ソノ所說ハ此時再ビ大ニ世ニ行ハレタリ。ソノ四原液ノ說ハ葡萄牙ノ人ノ傳譯ニヨリテ此ノ如ク我邦ニモ入レルナリ。

南蠻流外科

葡萄牙人ノ始メテ我邦ニ來タリシヨリ五十年、ソノ初ハ彼邦ノ商估及ビ僧徒ノ來朝スルモノ頻ニシテ、交商、宣教ヲ謀リ、未ダ十餘年ナラズシテ、彼我ノ交通ハ大ニ隆盛トナリシガ、ソノ後ニ至リテ耶蘇教ハ禁セラレ南蠻寺ハ破毀セラレ、ソノ徒ハ殺戮セラレ、西洋トノ交通ハ制限セラレタリ。殊ニ慶長十七年(1)耶蘇教嚴禁ノ令行ハレテヨリ所謂南蠻人ノ我邦ニ來往スルコトハ其跡ヲ絕ツニ至レリ。然レドモ、南蠻人ガ布教ノ方便トシテ施シタル醫術ハ耶蘇教嚴禁ノ後ト雖モ、大坂・堺・長崎・其他一二地方ニ行ハレ、所謂南蠻流外科ノ一派ヲ成スルニ至レリ。

慶友、本名ハフテーー、葡萄牙ノ人、天正年間來タリテ肥前高來ニ居ル、醫ヲ善クシ、最モ外治ニ長ズ、後大坂ニ至リテ名ヲ慶友ト改メテ醫ヲ業トス。

澤野忠庵、葡萄牙ノ人、本名クリストフアン、フエレーラ(2)、我邦ニ歸化シ、宗門ヲ改ム、稱シテ南蠻忠庵ト云フ。我ガ國語ニ通ジ、又醫方ニ通ズ、ソノ所說ヲ傳フルモノニ南蠻外科秘傳書三卷アリ。

栗崎流外科

半田順庵、長崎ノ人、幼ヨリシテ外科ニ志シ、業ヲ澤野忠庵ニ受ク、慶長元和ノ間、遠ク阿媽港（今ノ澳門）ニ赴キ、更ニ其伎ヲ修メ、業成リ歸朝シテ名聲大ニ振フ。

西吉兵衛、元和二年南蠻大通詞ニ擧グラル、其子女庸、又、吉兵衛ト稱ス、父ノ業ヲ受ケテ葡萄牙通詞トナリ、又澤野忠庵ニ就テ外科ヲ修メ、遂ニ西流外科ノ一派ヲ成ス。

杉本忠惠、長崎ノ人、蕃人ニ就テ妙方ヲ傳ヘ、治療效多ク、ソノ名大ニ著ハル。

吉田安齋、字ハ鉅豐、身休ト號ス、半田順庵ニ從フテ外科術ヲ修ム。

栗崎道喜、幼名歌之助、南肥栗崎ノ人、其乳母某ト共ニ仇ヲ避ケテ長崎ニ來タル、天正二年、齡僅ニ九歲ニシテ、蕃船ニ乘ジ、呂宋ニ入ル、十四歲ノ時、始メテ外科ニ志シ、名師ニ就テ學ブコト八年、最モ金創ノ治術ニ精シ、年三十餘歲ニシテ歸朝ス、長崎奉行、宅地ヲ長崎萬屋町ニ與ヘテ此ニ居ラシメ、奉行所員及ビ外國人ノ治療ヲ司ラシム、慶安四年十二月歿ス、年八十四。所謂栗崎流外科ノ祖ナリ。

南蠻流外科ハ鷹取流外科ト併ビテ、當時行ハレタルモノナレドモ、ソノ治方ハ瘡瘍ト金創トヲ主トシ、瘡瘍ニアリテハ癰及ビ疔ヲ以テ主要ノモノトナセリ。ソノ原因ハ四原液ノ不調ニアリトシテ、之ヲ治スルニハ腫物ヲ散ラスカ、又ハ膿ニスルカノ二法ヲ用ヒ、既ニ化膿スルニ及ビテハ膏藥ヲ用ヒ、又ハ針ニヨリテコレヲ截開シタリ。

金創ノ治方ハ燒酎ヲ煖メ、木綿ニ浸シ、コレニテ創面ヲ洗ヒ、凝血ヲ去リテ後、椰子油ヲ疵ニ塗リ、

針ニテ創ヲ縫ヒ、再ビ創面ヲ燒酎ニテ洗ヒ、玉子ノ白味ニ椰子油ヲ加ヘタルモノニ浸セル木綿ヲ取リテ創面ヲ覆ヒ、其上ヲ木綿ニテ卷クナリ。

止血ノ法トシテハ、内藥又ハ散布藥ヲ用ヒ、縫合ヲ施シ、又ハ壓迫繃帶ヲ施ス等ノコトヲナセリ。

南蠻流外科ニアリテ、用ヒラレタル藥品ニハ斬新舶載ノモノヲ採リ(テレメンテイナ、サボン等)、又ソノ手術ニ於テ之ヲ鷹取流外科ニ比シテ面目ヲ新ニスルモノアリト雖モ、萬外集要(1)ニ外科醫ガ持ツベキ道具トシテ擧ゲタルモノヲ見ルニ『針五本、燒金二本、鋏一本、鐵ノヘラ二本、毛引鋏一本、角ノヘラ一本、長刀針一本、鎌(口中切)一本、小刀一本、サジ二本』ニ止マル。コレニヨリテ手術ノ程度モ概子推シテ知ラルベシ。

(1)元和五年刊行山本玄仙撰

施藥院

天平二年始メテ皇后職ニ施藥院ヲ置キ、窮民ノ疾ニ苦シムモノヲ救ヒ、施藥院使ノ官アリテ丹波・和氣ノ兩氏交々其職ニ居リシガ、室町時代ニ及ビテハ施藥院使ノ官アルノミニシテ施藥院ノ實ハ久シク廢シタリ。豐臣秀吉天下ヲ統一スルニ及ビ、施藥院ノ舊制ヲ復興シ、天正年間、施藥院ヲ禁闕ノ南門ニ建テ、丹波全宗ヲ擧ゲテ、施藥院使ニ任ジ、四方民衆ノ疾病ヲ苦シムモノヲ招集シ、藥ヲ給スルコト頻回、全治ヲ得ルモノ多カリキ。全宗ノ子宗伯、父ノ官ヲ襲テ施藥院使トナリ、子孫遂ニ施

藥院ヲ以テソノ姓トスルニ至レリ。

施藥院全宗、德運軒ト號シ、又藥樹院法印ト稱ス、其先ハ丹波氏、雅忠十七世ノ孫ナリ、祖宗清父宗忠僧トナリ權大僧都タリ、宗忠死セントキ全宗尙ホ幼ナリ、已ニ長ジテ叡山ニ入リ、藥樹院ニ住持タリ、後還俗シテ曲直瀨道三ノ門ニ入リ、醫ヲ以テ名アリ、豐臣秀吉ノタメ信賴セラレ、法師ニ敍セラレ、施藥院使ニ任ゼラル、慶長四年歿ス、全宗一男一女アリ、共ニ父ニ先チテ歿ス、依リテ近江ノ人、三雲宗伯ヲ養フテ嗣トナス。子孫世々施藥院使タリ、子孫遂ニ施藥院ヲ姓トスルニ至ル、官ヲ以テ氏ニ稱セルナリ。而シテ宗伯、三雲氏ノ子ナルヲ以テ又三雲ト稱ス。

施藥院全宗像

施藥院宗伯像

施藥院宗伯、近江ノ人、本姓三雲氏、資隆ノ子、全宗ノ家ヲ繼ギ、慶長四年法師ニ敍シ、施藥院使ニ任ゼル、後德川氏ニ辟セラレテ侍醫トナル、寛文三年歿ス、年八十八。長子長雅家ヲ繼ギ、法師ニ敍セラレ、醫ヲ以テ一家ヲ成セリ。

江戸時代ノ醫學

(1)西暦一六一五年

江戸時代前期

(2)西暦凡十七世紀ノ始ヨリ十八世紀ノ始

參考書籍

(1)醫術名流列傳
(2)啓廸集　曲直瀬道三著
(3)本朝醫考　奈須柳村著
(4)日本西教史
(5)南蠻寺興廢記
(6)日本洋學年表　大槻如電著
(7)Oskar Nachod, Die Beziehungen der niederländischen ostasiatischen Kompagnie zu Japan im 17. Jahrhundert. 1887

第八章　江戸時代ノ醫學

元和元年(1)、豐臣氏亡ビ、德川氏コレニ代リテ天下ノ政柄ヲ握リタルトキヨリ二百五十年、慶應年間、德川幕府瓦解ノ頃ニ至ルマデノ間ヲ江戸時代ト曰フ。更ニコレヲ別チテ、前・中・後ノ三期トス。

江戸時代前期

元和偃武以後、凡ソ八十年ヲ經テ延寶・天和・元祿・寶永ノ頃ニ至ルマデヲ江戸時代前期トス(2)。天下已ニ泰平ヲ謳歌シ、學問技藝ハ長足ノ進歩ヲナシ、元祿・寶永ノ頃ニ至リテハ文化ハソノ豐熟ノ時

古學唱道

本道(內科)

李・朱醫方

道三流學派ノ勃興

期ニ達シタリ。而シテ當時我ガ學問ノ中心ヲナセルモノハ儒學ニシテ、此期ノ初ニハ藤原惺窩・林羅山等ノ碩儒アリ、宋儒性理ノ學ヲ奉ジテ專ラ朱子學ヲ唱ヘタリ、次デ中江藤樹出デテ王陽明ノ學ヲ唱ヘタレドモ、伊藤仁齋出デテ古學ヲ唱道セルノ時マデハ尙ホ朱子學ハ天下ヲ風靡シ、鎌倉・室町時代以來盛ニ行ハレタル禪學ハ衰ヘテ、緇徒ノ學問ハ遂ニ士林ノ手ニ歸スルニ至レリ。

前期以來盛ニ行ハレタル李・朱醫學ハ固ヨリ宋儒性理ノ學ヲ宗トセルガ故ニ、此ノ如キ學界ノ趨勢ニ乘ジテ更ニ大ニ發達シ、別ニ劉張學派ト名ヅクル一派ヲ成スニ至レリ。シカルニ此期ノ末ニ及ビテ伊藤仁齋ガ起チテ古學ヲ唱道セル頃ニ至リテ李・朱醫學ハソノ勢力ヲ減ジ、所謂古方醫學ト稱スルモノ之ニ代リ、李・朱醫學ハソレニ對シテ後世家ノ名目ヲ得ルニ至リタリ。

本道(內科)

李・朱醫方

江戸時代ノ初期ニ專ラ行ハレタルハ李・朱醫學ニシテ、ソノ開祖トスベキハ田代三喜ナレドモ、其術ヲ傳ヘテ大ニ之ヲ恢弘シ、遂ニ天下ニ遍ク行ハルルニ至ラシメタルハ曲直瀬道三ノ力ニ賴ル、所謂道三流ノ學派ハ曲直瀬道三ヲ祖宗トシテ前期ニ興リ、此期ニ至リテソノ後繼者ノタメニ更ニ大ニ敷衍セラレタリ。曲直瀬道三ノ後繼者トシテ第一ニ擧グベキハ其子曲直瀬玄朔ニシテ、父ノ名ヲ襲フテ道三ヲ稱シ、學

舍ヲ開キ四方ノ士ヲ集メテ之ヲ教導シ、又ソノ方術ト著述トヲ以テ一世ヲ風靡シ、遂ニ曲直瀬ヲシテ醫門ノ覇宗タラシメタリ。

曲直瀬玄朔、名ハ正紹、幼名大刀之助、東井ト號ス、天文十八年城州上京ニ生マル、曲直瀬正盛（翠竹院道三）ノ妹ノ子ナリ、幼ニシテ父母ニ離ルルヲ以テ正盛養フテ子トナス、適々正盛ノ嗣守眞死シテ繼グモノナシ、ヨリテ其女ヲ養ヒテ玄朔ニ配シ、以テ家ヲ嗣ガシム、天正九年昇殿ヲ許サレ、御脈ヲ診ス、翌十年法眼ニ敍セラル、十

曲直瀬玄朔像

道三學派ノ名家

一年勅旨ニヨリ父ノ稱道三ヲ讓ラレ、次デ法印ニ敍セラレ、延命院ノ號ヲ賜フ、慶長二年旨ヲ奉ジテ延壽院ト改ム後、醫ヲ以テ關白秀次ニ仕フ、秀次自刃スルニ方リテ玄朔モ常陸ニ配流セラレ佐竹義宣ノ許ニアリ、常山方十二卷ヲ著ス、慶長三年後陽成院ノ不豫ニ方リテ免サレテ京ニ歸リ、藥ヲ獻ジテ效アリ、四年十二月屠蘇白散ヲ幕府ニ獻ジ、以後毎年以テ佳例トナス、寛永八年歿ス、年八十三。江戸麻布ノ祥雲寺ニ葬ムル、祥雲寺ハ玄朔ガ晩年ニ自カラ建立セルモノナリト云フ。

道三流學派ハ固ヨリ李・朱醫學ヲ師宗トシタレドモ、然カモ一家ニ偏執スルコトナク、殊ニ玄朔ハソノ一家ニ偏執スルノ弊ヲ說キ、『廣ク內經ヲ閱シ、普ク本草ヲ窺フ、診切ハ王氏脈經ヲ主トシ、處方ハ張仲景ヲ宗トス、用藥ハ東垣ヲ專トシ、尙ホ潔古（張元素）ニ從フ、諸症ヲ治辨スルニハ丹溪ヲ師トスルモ尙ホ天民（虞摶）ニ從フ、外感ハ仲景ニ則リ、內傷ハ東垣ニ法トリ、熱病ハ河間（劉完素）ニ則リ、雜病ハ丹法ニ法トル』ト云ヒテ、諸家所說ノ長ヲ採ルベキコトヲ主張シタリ。

曲直瀬玄朔ノ著述ニシテ、今ニ傳ハレルモノ、常山方（十二卷）、濟民記（三卷）、醫方明鑑（四卷）、醫學指南編（三卷）、醫學天正記（二卷）、師語錄（二卷）、註能毒（一卷）、延壽撮要（一卷）、養生物語（一卷）、養生月覽抄（一卷）、延壽院切紙（一卷）、日用食性（一卷）等アリ。

曲直瀬道三ノ門ヨリ出デテ、道三學派ヲ唱道シタリ。

曲直瀬正琳像

秦宗巴、字ハ德岩、立安ト號ス、丹波牛樹ノ人、父ヲ善秀ト曰フ、其先ハ秦人、徐福ノ遠裔タリ、天正三年、年二十六ニシテ吉田宗桂ノ門ニ入リ醫ヲ學ブ、宗桂其才ヲ奇トシ、勸メテ曲直瀬正盛ニ從學セシム、宗巴始メ豐臣秀次ニ仕フ、秀次爲ニ奉シテ法印ニ敍シ、壽命院ノ號ヲ賜フ、慶長五年德川家康宗巴ヲ召シテ侍醫トス、宗巴始メテ馬註素問ヲ講ズ、聽クモノ數百人、ソノ才學ヲ稱ス、慶長十二年歿ス、著ハス所、素問註抄十卷、醫學的要方十五卷、本草序例抄八卷、參伍的方一卷、炮炙詳鑑一卷等ナリ。

施藥院全宗、傳ハ前ニ出ヅ。

曲直瀬正純像

曲直瀬正琳、字ハ養庵、玉翁ト號ス、本姓二柳氏、若冠ニシテ曲直瀬正盛ノ門ニ入リ醫ヲ學ブ、正盛ソノ異資ヲ愛シ、妻スニ女孫ヲ以テス、由リテ一柳ヲ改メテ曲直瀬ノ姓ヲ冒ス、天正二十年出デテ豐臣秀次ニ仕フ、文祿六年正親町天皇不豫、正琳召サレテ藥ヲ獻ズ、功ヲ以テ法印ニ敍セラル、浮田秀家ノ室奇疾ヲ得衆醫皆治ニ苦シム、正琳之ヲ治シテ效アリ、秀家大ニ喜ビ朝鮮ノ役ニ得ル所ノ書籍數百卷ヲ擧ゲテ之ヲ贈ル、慶長五年養安院ノ號ヲ賞賜サル、十六年歿ス。年四十七。

曲直瀬正純、本姓岡野井、父ヲ德安ト云フ、醫ヲ曲直瀬正盛ニ學ビ、後ソノ女婿トナル、依リテ曲直瀬氏ヲ冒ス、慶長十三年法印ニ敍セラレ、享德院ノ號ヲ賜フ。

曲直瀬玄朔ノ門下ニモ岡本玄治、野間玄琢、井上玄徹、井關玄說、長澤道壽等ノ名家アリ。

共ニ一代ノ師表トシテ學ヲ傳ヘ術ヲ施シ、遂ニ道三學派ノ勢力ヲ天下ニ普ネカラシメタリ。

岡本玄治像

岡本玄治、初名宗什、后諸品ト改ム、玄治ハソノ通稱ナリ、洛陽ノ人、幼ニシテ穎敏、年十六ニシテ延壽院玄朔ノ門ニ入リ方術ヲ學ブ、在學十年、門下第一ノ稱アリ、玄朔亦ソノ卓越ヲ愛シ、學寮ノ裁トナシ、生徒ヲ導カシメ、且妻スニ其女ヲ以テス、慶長中德川家康ニ謁シ、元和四年法眼ニ敍セラル、九年德川秀忠辟シテ醫官トナシ、隔年江戸ニ來タラシム、寛永五年法印ニ進ミ、啓廸院ト稱ス、十年德川家光病アリ、玄治藥ヲ獻シテ忽チ癒ユ、恩賚太厚シ、十三年朝鮮國使ニ接シ、大ニ美譽アリ、十四年家光復タ病アリ、玄治ノ藥ニヨリテ治ス、ヨリテ采地千石ヲ賜ハル。ソノ京都ニアルヤ至尊ノ脈ヲ拜診シ、藥ヲ上ル、ソノ當時ニ重ンセラレタルコト知ルベシ。正保二年四月二十日病デ歿ス、年五十九、江戸澁谷祥雲寺ニ葬ムル。子玄琳業ヲ嗣ギ、法眼ニ敍セラル、玄治著ス所、燈下集、玄治配劑口解、玄治方考、家傳預藥集、傷寒衆方規矩、增補濟民記、通俗醫海腰舟等アリ。

野間玄琢、名ハ成岸、白雲ト號ス、山城ノ人、ソノ父宗印、曲直瀬玄朔ト友トシ善シ、仍テ玄琢ヲシテ玄朔ニ從學セ

野間三竹像

タリ住ス、玄心年壯ニシテ曲直瀨玄朔ノ門ニ入リ醫ヲ修ム、元和六年中和門院ノ不豫ニ際シ、召サレテ侍醫トナリ、寛永十四年法眼ニ敍セラル、尋テ法印ニ進ミ、養壽院ノ號ヲ賜ハル、玄心五朝ニ歷仕シ、最モ後水尾天皇、東福門院ノ眷寵ヲ得、嘗テ後尾水天皇ノ勅ヲ奉シテ勅撰養壽錄ヲ著ハス、別ニ醫方捷徑、原病式集解等ノ著アリ、延寶六年十月歿ス。

井關玄說、名ハ常甫、養眞庵ト號ス、醫ヲ曲直瀨玄朔ニ學ビ、博覽多識ヲ以テ顯ハル、延寶七年德川氏ノ侍醫トナリ、法眼ニ敍セラル、元祿十二年、年八十二ニシテ江戸ニ歿ス。

井上玄徹、靈叟ト號ス、本ト周防山口ノ人多々良氏、年十三出テテ廣島ノ人井上豐後ノ家ヲ嗣グ、年壯ニシテ京都ニ出テ曲直瀨玄朔ヲ師トシテ醫ヲ學ブ、正保四年德川家光ニ謁シ、尋テ侍醫ニ擧ゲラレ、寛文五年法眼ニ敍セラル、延寶五年東福門院不豫、玄徹命ヲ奉シテ京ニ入リ、藥ヲ上リテ效アリ、六年法印ニ敍シ、交泰院ノ號ヲ賜シム、慶長五年法印ニ敍シ、元和三年法印ニ敍セラレ、壽昌院ト稱ス、專ラ累進シテ法印ニ至ル、寛永三年德川秀忠召シテ醫官トナス、乃チ江戸ニ至ル、後東福門院ノ病ニ際シテ京都ニ招カレ、正保二年四月遂ニ京都ニ歿ス、年五十六著ス所群方類稿アリ。其子成大、三竹ト稱ス、寛文八年法印ニ進ム、醫名アリ、著ス所、群方類稿刪補、修養編、醫學通論、醫學類篇、望海錄、沈靜錄等若干部アリ。

山脇玄心、道作ト稱ス、本ト近江ノ人。父正雲ノ時京都ニ來

フ、玄徹京ニアルコト數月、其名都下ニ喧傳セラレ、後水尾天皇後西院上皇屢〻徵シテ診セシメ玉フ、玄徹又喜テ子弟ヲ敎導シ、門弟子千ヲ以テ數フ、貞享三年四月病テ歿ス、年八十五。

井上玄徹像

道三學派ノ醫治及ビ學問ニ名アル人、此ノ如ク多キガ中ニ、別ニ一家ヲ成セルモノヲ長澤道壽及ビ古林見宜トス。長澤道壽ハ曲直瀨玄朔ニ從フテ醫ヲ修メ、又敎ヲ吉田宗恒ニ受ク、素問・靈樞ノ說ヲ祖述シ、李東垣・朱丹溪ノ方ヲ折衷シ、古林見宜ト其名ヲ齊フセリ。

長澤道壽、柳庵又丹陽坊、賣藥山人ト號ス、土佐ノ人、業ヲ曲直瀨玄朔及ビ吉田宗恂ニ受ケ、李朱醫學ノ秘蘊ヲ傳フ、少フシテ土佐太守ニ仕ヘ、醫名アリ、人之ヲ土佐ノ道壽ト呼ブ、其盛ナルコト想フベシ。門人中山三柳、名ハ通義、花陽軒ト號ス、方術至精、兼テ文藝ニ通ジ、醫名甚ダ高カリキ、道壽著ス所、醫方口訣集、藪醫問答、治例問答等アリ。三柳著ス所。增補醫方口訣集、病家要覽、遂生雜記、切要方義、保兒三方、飛鳥川、醍醐隨筆等若干部アリ。

道壽嘗テ朱子小學大學ノ意ニ倣ヒ、醫學進修ノ次序ヲ定メ、七科ヲ設ケテ以テ小學トシ、八科ヲ設ケテ大學トシタリ。七科ハ一ニ藥物ノ氣味功能ヲ辨ズルコト、二ニ古方ノ本旨及ビソノ製法ヲ辨ヘルコト、三ニ治療ノ大法ヲ識ルコト、四ニ古醫案ヲ參考シ意ヲ以テ方ヲ處スルコト、五ニ脈ヲ辨ズルコト、六ハ針灸ノ術ヲ講ズルコト、七ニ醫書ノ經方ニ羽翼タルモノヲ講習スルコト、コレナリ。八科ハ一ニ經絡兪穴ノ終始スル所ヲ審ニシ、病ノ所在ヲ識ルコト、二ニ榮衞循行度數ヲ審ニシ、病ノ所在ヲ識ルコト、三ニ筋骨皮部血絡分肉水竅分尺ヲ審ニシテ病ノ所在ヲ識ルコト、四ニ藏府形象統屬ヲ審ニスルコト、五ニ氣運常變ヲ審ニシ病機ヲ察スルコト、六ニ四診法ヲ審ニスルコト、七ニ死生ヲ決スルコト、八ニ八風虛邪ノ乘ズル所、勞倦飲食色慾諸傷ヲ審ニシ以テ針灸藥治ノ方ヲ定ムルコト、コレナリ。

醫學進修ノ次序ヲ定ム

古林見宜ハ曲直瀨正純ノ門ニ出デ、朱丹溪ノ學ヲ修メ、又和氣丹波ノ兩流ニ遡リテ我邦古代ノ方術ヲ參酌シ、最モ李梴ノ醫學入門ニ意ヲ注ギ、常ニ之ヲ講ジテ諸生ヲ導ク。常ニ曰フ、醫ヲ習フニハ規格ナカルベカラズト、乃チ李梴著ス所ノ習醫規格ヲ取テ之ヲ梓行シ、又同門ノ堀正意ト相謀リテ學舍ヲ嵯峨ニ建テ、孜々トシテ諸生ヲ誘掖ス、門下三千人、ソノ醫方ハ大ニ世ニ行ハレタリ。

嵯峨學舍

古林見宜、名ハ正溫、桂庵、壽仙坊ハ別號ナリ、播磨ノ人、赤松氏則ノ裔、祖祐村醫方ヲ好ミ往テ明ニ入リ醫ヲ學ブ、居ルコト數年ニシテ歸朝シ、其醫術大ニ行ハル、祐村ノ子某亦醫名アリ、見宜ハ其子ナリ、夙ニ家方ヲ受ケ、又曲直瀨正純ニ從テ學ブ、丹溪ノ術ヲ主トシ、張仲景、劉守眞、李明之三家ノ說ヲ參酌シ、道三學派中ニアリテ別ニ一家ヲ成シ、其名大ニ世ニ顯ハル、板倉勝重朝ニ奏シテ法印ニ敍セントス、見宜辭シテ應セズ、著ス所、日記中棟方、速效方、正溫方、綱目撮要方、外科單方、其他數部アリ。門人古林見桃、松下見林亦醫名アリ。

堀正意、字ハ敬夫、杏庵又杏隱ト號ス、父德印幼ニシテ僧トナリ、後醫ヲ學ブ、正意生レテ七歲ニシテ父ニ從テ京ニ入リ、藤原惺窩ニ師事シ、林羅山、松永盡、那波活所ト共ニ四天王ノ稱アリ、正意又、曲直瀨正純ノ門ニ入リテ醫ヲ學ビ、盛名アリ、寬永壬午ノ春歿ス、年五十八。

劉張醫方（後世家別派）

李・朱醫學ハ此ノ如クシテ遍チク天下ニ行ハレ、一時ノ醫人皆其說ニ屈從シテ、局方發揮、醫學正傳、醫學入門ノ他ニ醫書アルコトヲ知ラザルホドナリシガ、明曆寬文ノ間(1)、饗庭東庵、林市之進アリ、二人共ニ京都ニアリテ素問・靈樞・難經等ヲ講究シ、殊ニ金ノ劉完素及ビ張子和ノ說ヲ奉ジテ五運六氣ノ說、藏府經絡配當ノ論ヲ唱道シタリ。固ヨリ此種ノ論說ハ獨リ此ニ始マルニアラズ、鎌倉時代ノ著書萬安方ニモ既ニ三因方ヲ引テ五運六氣ノ說ヲ擧ゲ、室町時代ノ末、田代三喜、曲直瀨道三ガ李・朱醫學ヲ唱道スルニ及ビテ運氣ノ論ハ更ニ重視セラレシガ、饗庭東庵等ガ劉完素ノ醫風ヲ開ク

劉張醫方

(1) 西曆十七世紀ノ後半

運氣論

ニ方リテ其論大ニ行ハレ、病ヲ論ズルニ陰陽五行・五運六氣・藏府經絡配當ノ理ヲ以テスルコト盛ナルニ至レリ。饗庭東庵ノ門人ニ味岡三伯アリ、師說ヲ敷衍シテ其學愈盛ニ行ハル。三伯ノ門人ニ井原道閑、淺井周伯、小川朔庵、岡本一抱等アリ。朔庵ノ門人ニ堀元厚アリ。其中ニテ最モ名アリシハ岡本一抱ニシテ、諸書ノ諺解ヲ作リテ普ク世ノ蒙ヲ啓カントシ、其書大ニ世ニ行ハレテ遂ニ所謂後世家ハ大成スルニ至レリ。

後世家

饗庭東庵、京都ノ人、醫ヲ曲直瀨玄朔ニ學ビタリト傳フ、元和元年ニ歿ス。

林市之進、名ハ敬經、尾張ノ人、京都ニ來タリテ醫ヲ業トシ、饗庭東庵ト其名ヲ等フス。

岡本一抱、通稱爲竹、一得齋ト號ス、本姓杉森氏。祖杏園醫ヲ以テ豐臣秀吉ニ仕ヘ、法印ニ敍セラル、父受慶福井侯ニ仕フ、一抱ニ至リテ京都ニ居ル、味岡三伯ニ從ヒテ醫方ヲ修メ、高足ノ弟子タリ。一抱廣ク諸書ノ諺解ヲ作リ、專ラ世ノ學ヲ啓クコトヲ以テ己ガ任トナシ其書大ニ行ハル、其兄近松門左衛門之ヲ戒メテ曰ク『子孜々トシテ諺解ニ從事ス、吾レ後世末學ノ淺キニ因リ近キニ就キ、復タ本書ヲ研究セズ鹵莽術ヲ施シテ人命ヲ誤ルニ至ラ

岡本一抱遺墨

易醫

ンコトヲ恐ル』ト、一抱聽テ大ニ悟ル所アリ、コレヨリ遂ニ諺解ヲ作ラズト云フ。

堀元厚、名ハ貞忠、北渚ト號ス、醫ヲ小川朔庵ニ學ビ時ニ名アリ、寶曆四年歿ス、年六十九、著ス所、醫學須知醫案啓蒙、醫門丘垤集アリ。

運氣ノ論說ノ盛ニ行ハルルコト既ニ久シクテ一派ノ醫家ニシテ孫眞人、劉完素等ノ說ヲ引テ天人合一ノ理ヲ唱ヘコレヲ以テ其說ヲ立ツルモノアルニ至リ、遂ニ易醫ノ說ヲ成シ、易ト醫ト相通ジテ其理ヲ同ジクストナシ、易ノ說ニ依リテ病ヲ論ゼント企テタリ。又『醫タラントスルモノハ上、天文ヲ知リ、下、地理ヲ知リ、中、人事ヲ知ルベシ、コノ三ノモノ俱ニ明ニシテ然シテ後、以テ人ノ疾病ヲ語ルベシ』ト說キテ、醫ノ理ヲ究メ醫ノ術ヲ精フセント欲スルモノハ博ク學ビテ三才ノ事理ニ通ゼザルベカラザルコトヲ主張スルモノアリ、草刈三悅ガ醫敎正意、寺島良安ガ和漢三才圖會等ノ著述ハ當時ノ醫界ニ於ケル這般ノ趨勢ヲ示スモノナリ。

古醫方

古醫方

支那ニアリテハ明ノ中世ヨリ程・朱學ノ偏狹ナルヲ排擊シ、淸ノ初(我ガ寬文、延寶、天和ノ交)ニハ既ニ考證學興リシガ、此時我邦ニハ猶ホ程・朱ノ學盛ニ行ハレ、藤原惺窩、林羅山ガ德川家康ニ用ヒラレテ程・朱性理ノ說ヲ唱道セシヨリ、寬永ノ頃、中江藤樹、王陽明ノ說ヲ奉ジ所謂陽明學ヲ立テタレドモ亦程・朱ノ範圍ヲ脫セズ。寬文ノ始ニ至リテ伊藤仁齋出デテ始メテ宋儒性理ノ說ヲ斥ケテ一家ヲ立テテ古學ト稱シ、經典ノ古義ヲ明ニスルコトヲツトメ、痛ク後世末流ノ論說ヲ駁擊シタリ。此時ニ方リテ我

名古屋玄醫遺墨

ガ醫學界ニ名古屋玄醫アリ、明ノ喻嘉言ノ傷寒尙論・醫門法律等ニ據リテ、直チニ張仲景、巢元方ヲ以テ師トナシ、世ノ醫家ガ皆、劉・張・李・朱等後世ノ醫家ノ說ニ據リテ、ソノ張仲景ニ本ヅクコトヲ知ラザルヲ慨嘆シ、時運ノ變遷ヲ知ラズシテ李・朱醫方ヲ墨守スルヲ罵倒シ、溫補濫用ノ民命ヲ戕害スル所以ヲ說キ、衆醫喧然相詆レドモ泰然トシテ動カズ。是ニ於テ、我邦ノ醫家ニ古方家・後世家ノ目アリ、玄醫ハ實ニ古方家ノ祖タルモノナリ。

名古屋玄醫、字ハ閔甫、一字富潤、丹水子又宜春庵ト號ス。經書ヲ羽州宗純ニ受ケ、周易占法ニ精シ、壯ナルニ及ビテ喻氏ノ傷寒尙論ヲ得テ之ヲ讀ミ、發憤古ニ溯リ、直チニ張仲景ヲ以テ師トナシ、ツトメテ李・朱ノ說ヲ排斥シ、專ラ時弊ヲ救フヲ以テ己ノ任トナス。玄醫少キトキヨリ多病、四十餘歲ニシテ腰脚痿痺、兩手不隨、居常褥

ニアリテ而カモ氣力少シモ衰ヘズ、廣ク病客ニ接シ傍ラ著述ヲ事トナス、數々徵命アレドモ辭シテ就カズ、元祿九年年六十九ニシテ歿ス。著ハストコロ醫方問餘、纂言方考、用方規矩、丹水子、醫方規矩、醫學愚得、脈要訓蒙、脈學原委、怪痾一得、醫方摘要、食物本草等アリ。

名古屋玄醫ノ學說ハ喻嘉言ニ本ヅクモノニシテ、『百病ハ皆、風・寒・濕ヨリ生ズ、コレヲ細カニ別ツトキハ風・寒・濕ノ三氣ナレドモ、總言スレバ則チタダ一箇ノ寒氣ノミ、故ニ百病ハ皆寒ニ傷ブラルルニヨリテ生ズルモノナリ』ト論ジ、ソノ寒氣ノ人ヲ傷ブルハ衞氣ノ衰フルニ由ルガ故ニ藥ハ必ズ衞氣ヲ助クルヲ以テ主トナスベシ。然ルニ人、タダ脾腎虛シ元氣弱キトキハ則チ病ムコトヲ知リテ、衞氣ノ百病ノ母タルコトヲ知ラズト戒メ、病ヲ療スルニ溫熱ノ劑ヲ本トシテ以テ衞氣ヲ助クルヲ主トシタリ。

外科

此期ニアリテモ、外科ハ瘡瘍ノ治ヲ主トシ、別ニ金創醫アリテ產科ノ治ヲ兼ネシコト、前期ニ於クルト異ナルコトナシ。而シテ外科ノ治ハ刀剪、針烙ヲ主トスルガ故ニ、其事ヲ賤惡汚穢ナリトシテ醫家スラ之ヲ賤シムノ風アリキ。

此期ニアラハレタル外科專書ニハ外科捷徑俗書、外科衆方規矩、外科祕要等アリ。而カモソノ方論ハ李・朱醫學ノ範圍ヲ脫セズ、外科的ノ方法トシテハ灸法、上餅灸法、硫黃灸法、隔蒜灸法、瘡腫

和蘭流外科

湯漬法、針烙法、貼敷法等ヲ擧ゲタルニ過ギズ。

和蘭流外科

葡萄牙人及ビ西班牙人ニ次ギテ我邦ニ來タレルハ和蘭人ニシテ、慶長七年、ソノ東印度商社ノ設立セラレタル後、我邦ニ來タルコト頻繁トナリ、慶長十三年ニ至リテ、葡萄牙人等ハ交通ヲ禁ゼラレタレドモ獨リ和蘭人ノミハ毎歳平戸ニ來タリテ交商スルコトヲ許サレタリ。寛永十八年ニ至リテ平戸ヨリ移リテ長崎ニ居留スルコトヲ許サレ、出島ニ商館ヲ定メテ通商ハ漸ク隆盛トナルニ至レリ。而シテ和蘭東印度商社ノ職員中ニハ醫師一人必ズ交替シテ在留シタリ。當時鎖國ノ禁令嚴重ニシテ横文ノ書ヲ輸入スルコトスラ不能ナリシニ拘ラズ、醫術ヲ傳フルコトハ制止セラレザリシガタメニ、通詞ハ常ニ蘭醫ニ親炙シテ、ソノ醫術ヲ傳受シ、所謂和蘭流外科ハ此時ニ興リタリ(1)。

和蘭流外科ト南蠻流外科トハ、其術ヲ傳ヘタル西洋人ノ異ナレニヨリテ其名ヲ異ニセルノミニシテ、西洋ノ醫方ヲ傳ヘタルコトハ兩者相同ジク、其術モ別ニ差異アルニアラズ。而シテ、當時世人ハ其術ノ新奇ナルヲ喜ビテ、千里笈ヲ負テ長崎ニ至リ和蘭通詞ニ就テ、和蘭外科ヲ傳習スルモノ多ク、遂ニ楢林・吉田・栗崎等ノ通詞ハ各々門戸ヲ張リ、和蘭流外科ヲ以テ各々ソノ流派ヲ成スニ至レリ。

楢林流外科

(1) 西暦十七世紀ノ中頃

楢林流外科

(1)Ambroise Paré

吉田流外科

楢林鎮山、名ハ時敏、通稱新吾兵衛、鎮山ハ其號ナリ、慶安元年十二月十四日長崎江戸町ニ生マル、幼ニシテ頴敏、和蘭人ニ就テ、ソノ文字ヲ學ビ善ク蕃語ニ通ズ、寛文五年年甫メテ十八、擧ゲラレテ小通詞トナル。貞享二年六月大通詞ニ擧ゲラル。鎮山人トナリ溫順多能、常ニ醫ニ志アリ、嘗テ一書ヲ蘭人ニ得、題シテ外科伎術書トイフ、佛國ノ外科アムブロアズ、パレー(1)ガ著述セルモノヲドルデレフトノ醫カロレムバッテムガ和蘭語ニ譯ツタルモノニシテ彼邦一千六百四十九年ノ刊行ニ係ル。鎮山大ニ之ヲ珍重シ、購讀數年既ニ得ル所アリ、コレヲ拔萃シテ外科宗傳ヲ著ハス。元祿元年蘭醫ホッフマン(リートベロフトモ傳フ)ノ來朝スルニ遇ヒ、就テ疑義ヲ質シ、ソノ術大ニ熟ス、同五年八月年五十一ニシテ通詞ノ業ヲ嫡子榮理ニ讓リ、剃髪シテ名ヲ榮休ト改メ、外科ヲ以テ業トナス、諸國ノ士來タリ學ブモノ甚ダ多シ、コレヲ楢林流外科ノ祖先トス。寶永五年四月、將軍綱吉鎮山ヲ擢デテ醫官トナサントシタレドモ辭シテ就カズ、筑前侯重聘ヲ以テ招クモ亦應ゼズ。寶永八年三月二十九日病デ其家ニ歿ス、享年六十九。嫡子榮理家ヲ嗣ギ、二男榮久別ニ家ヲナス。榮久名ハ豐重、端山ト號ス、居ヲ大村町ニトシテ外科ヲ以テ業トナシ、楢林流外科ノ名大ニアラハル。

楢林鎮山像

吉田流外科

吉田自庵、名ハ昌全、自庵ハ其號ナリ、筑前太宰府ノ人、本姓坂田、幼ニシテ醫ニ志シ、長崎ニ赴ムキ、吉田

西流外科

栗崎流外科

西流外科

吉田自庵像

西立甫、初ノ名ハ吉兵衛、南蠻語ヲ善クス、承應二年父吉兵衛ノ後ヲ承ケテ大通詞ニ擧グラル。寛文九年其職ヲ辭シ、延寶元年江戸ニ來タリ、擧グラレテ幕府醫官トナリ、法眼ニ敍セラル。貞享元年九月歿ス。立甫嘗テ南蠻忠菴カ羅馬字ニ書キタル邦語ノ天文書ヲ譯讀シ、向井靈蘭ヲシテ筆記セシメテ乾坤辨說ヲ著ハス。立甫著ハストコロ別ニ諸國土產書アリ。

自休ニ就テ南蠻流外科ヲ學ブコト多年、自休乞フテ己レガ子トナシ、其業ヲ繼ガシム、依テ吉田氏ヲ冒ス、元祿四年夏六月召ニ應ジテ江戸ニ出デ、栗崎正羽、村山自伯ト共ニ幕府醫官ニ擧グラル。時ニ年四十八、同六年十二月法眼ニ敍シ、奥外科トナル、寶永七年七月仕ヲ致シ、正德三年四月病デ歿ス、著ストコロ三國流外科傳書、外科眞傳アリ。

栗崎流外科

栗崎正羽、通稱道有、初メ道仙ト稱ス、祖父道喜南蠻流外科ヲ以テ名アリ、父道有其術ヲ傳ヘテ長崎役醫タリシカ、正羽ニ至リテ幕府醫官ニ擧グラレ、元祿四年御番外科トナリ、同十四年吉良上野介ガ殿中ニテ傷ツキタルヲ治シ、翌年寄合醫師トナリ、享保十一年四月老ヲ以テ其官ヲ辭シ、其年十月病デ歿ス、年六十七。其子正

村山流外科

桂川流外科

カスパル流外科

堅、亦外科ヲ以テ名アリ、御番外科トナル、元文二年、年僅ニ三十ニシテ歿ス。

村山流外科

村山自伯、名ハ天德、唐津ノ人、父ヲ信庸ト曰フ、自伯幼ヨリ醫ニ志シ、長崎ニ赴キテ外科ヲ修メ、業成リテ時ニ名アリ、元祿四年栗崎正羽、吉田自庵ト共ニ幕府醫官ニ擧グラレ、寶永三年三月年六十ニシテ歿ス。其術ヲ傳フルノ書ニ村山流外科全書アリ。

桂川流外科

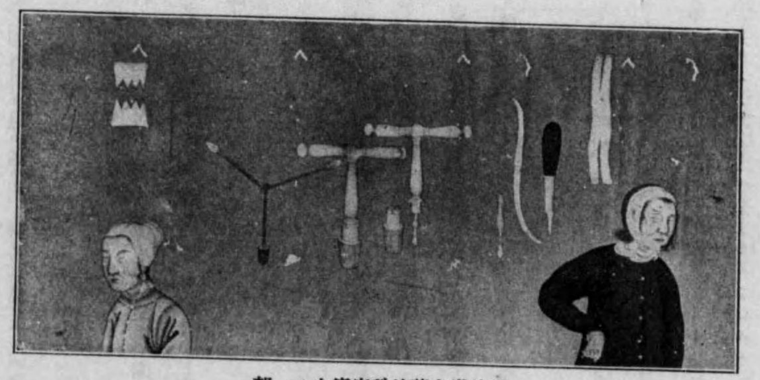
桂川甫筑、名ハ邦教、本姓森島氏、大和蟹幡ノ人、甫筑松浦侯ノ醫官嵐山甫安ニ從テ醫ヲ學ビ出藍ノ擧アリ、甫安其才ヲ愛シ、勸メテ氏ヲ桂川ト改メシム、蓋シ桂川ハ源ヲ嵐山ニ發シテ波流漸ク大ナルヲ以テナリ。甫筑既ニ嵐山氏ニ從テ和蘭流外科ヲ修メ、後蘭醫ダンチル、アルマンスニ親炙シテ外科ノ術ヲ學ビ、大ニ得ル所アリ、元祿九年召サレテ幕府醫官トナリ享保十九年法眼ニ敍セラレ、延享四年、年八十七ニシテ歿ス。

カスパル流外科

カスパル某寛永二十年南部山田浦ニ漂著セリト傳ヘ、或ハ慶安元年カスパル江戸ニ來タルト傳フ。カスパルノ事跡詳ナラズ。ナホツド(1)ノ著「第十七世紀ニ於ケル和蘭東印度商社ト日本トノ關係」ニワレンチンノ出島日誌ヲ引テ、「法律博士ペーテル、フロクホーウコースノ一行、一千六百四十九年(我ガ慶安二年)日本ニ航

(1)Nachod, Die Bezichungen der niederländischen Ostasiatischen Compagüe zu Japan im 17. Jahrhundert. 1887.

(1)Caspar
(2)Schambergen



檜林鎭山著外科宗傳中ノ一部
(ノモルセ寫ヲ圖插科外ーレバ、ズアロブンア)

セントシ、七月二十八日バタヴィアヲ發シ、九月十九日長崎ニ著シ、十一月二十五日長崎ヲ發シテ江戸ニ向フ、コノ一行中ニ一人ノ醫官アリ、毎年ノ聘使ニ醫官ノ加ハルハ此ヲ以テ嚆矢トス、醫官名ヲカスバル(1)姓ヲシヤムベルゲン(2)ト稱シ、參府旅行前兩三週間、四人ノ日本少年ニ日々外科治術ヲ教授シ、江戸ニ至リシ後モ、一千六百五十年(慶安三年)ノ秋マデ滯留シ外科治術ヲ教授シタリ」ト記シタリ。案ズルニカスバルトイフハコノカスバル、シヤムベルゲンナルベク、世ニカスバル流外科ト稱スルモノハ斯人ノ術ヲ傳ヘタルモノナルベシ。

和蘭流外科ハ南蠻流外科ノ後ヲ承クテ、西洋ノ醫方ヲ傳フルモノニシテ、病因ヲ論ズルニハ同ジク、四原液ノ混合不調ノ說ヲ以テシ、ソノ四原液ノ不調ヲ致スルハ風、寒、暑、濕、飲食又ハ房事過度等ニシテ或ハ金創、打撲、或ハ遠ク行ク等ニ依リテ原液滯

(1)Ambroise Paré

ホリ、タメニ諸病ヲ發シ瘡瘍ヲ生ズルモノナリト說キタリ。

瘡瘍ノ治方トシテハ概シテ先ヅ初發ハ散藥(チリクスリ)ヲツク、瘡瘍ノ散ルカ膿ムカヲ見テ、若シ膿マントスルノ狀況アラバ早ク膿藥(ウミクスリ)ヲツケ、既ニ膿ミタルトキハ針ヲ刺シテ膿汁ヲ出ダシ、針目ニメイチヤ(綿撒絲)ヲ入レ、後ニ愈膏藥(イエコウヤク)ヲツクベシトナス。而シテコレニ應用スル藥劑ハ「インクエント」(軟膏)、「エンプラスト」(硬膏)、「ヲヲリヨ」(油藥)ノ三種ナリキ。

創傷ノ治方ハ大體、南蠻流外科ニ於ケルト異ナルトコロナシ。ソノ血ヲ止ムルノ法ハ局所ノ縫合、古キ木綿ヲホツリテ玉子白味ニ交ゼテツケル、心經(動脈)ノ壓迫及ビ結紮、烙法、粉藥撒布、「スイフクベ」(乾角)或ハ是ヲ强ク結紮シ若シクハ强ク摩擦スルカ若クハ强ク冷却スル等ナリキ。

案ズルニ、此頃西洋ニアリテ外科ノ宗師トセラレタルハ前世紀ノ大外科醫佛國ノアンブロアズ、バレー(1)ニシテ、和蘭人ガ我邦ニ傳ヘタルモノモ亦バレーノ外科ナリシガ如シ、現ニ檜林鎭山ガ元祿年間ニ和蘭人ヨリ得タルモノハ西曆一千六百四十九年(我ガ慶安二年)和蘭譯ノバレー外科書ニシテ、鎭山ハソノ中ヨリ二三ノ要項ヲ鈔出シ、コレヲ外科宗傳トシテ門人ニ授ケタリ。又西玄哲ノ著ナリト傳フルトコロノ『金瘡跌撲療治之書』ノ插圖ヲ見ルニバレー外科書ノ和蘭譯ニ載セタルモノニ異ナラズ。其他、和蘭流外科ヲ傳フルノ書、大都ソノ規ヲ同フスルヲ見レバ、當時我邦ニ行ハレタル和蘭流外科ハ主ニアンブロアズ、バレーノ所說ヲ範トセルモノナリシナラム。

眼科

(1)藤井見隆著

眼科

從來眼科ノ諸流派ハ祕方ヲ主トシ、家習ヲ奉ジテ一流ヲ立テ、ソノ治術ハ所謂祕傳書ニ於テ僅カニ之ヲ知ルコトヲ得ルノ狀況ナリシガ、コノ期、元祿年間ニ及ビテ眼目明鑑ノ刊行セラルルアリ、大要支那眼科ノ說ニ本ヅキタルモノナレドモ、又一症毎ニ古傳ヲ擧ゲ、本朝諸家ノ經驗說ヲモ附錄シタリ。コレト同時ニ眼目精要・眼科醫療手引草(1)等ノ著述アリ。名古屋玄醫ノ著、醫方問餘ノ中ニモ眼科ノ部門アレドモ、別ニ發明ノ說ハアラザリキ。

兒科

兒科

寬永以後、兒科ヲ以テ專門トスル醫家甚ダ多ク、吉田宗活、人見玄德、安倍順貞、岡壽元、山田正信、太田宗勝、武田道安、吉田策庵、塙安友、塙宗安、山科長安、村上等詮、山添宗積等ハ兒科ヲ以テ其名ヲ當時ニ顯ハセリ。

兒科ニ關スル專書ニモ武田法印祕傳小兒方(寬文五年)保嬰三方(元祿七年)小兒必用養育草(元祿十六年)古今幼科摘要(寶永六年)等アリ。是等ノ書中ニ引用セルハ千金方、醫林集要、醫學入門、全幼心鑑、小兒直訣、保幼大全、保赤全書、活幼心法、保嬰論等ニシテ、主ニ李・朱ノ醫說ニ依リ、前期ニ於ケル兒科ト、略ボソノ內容ヲ同ジクシ、治方モ亦溫補ノ範圍ヲ脫スル

婦人科

(1)西曆一六九二年

口中科

コト能ハザリキ。

婦人科

婦人科ハ前期ニ於ケルト大體同一ノ程度ニアリ。元祿年間ニ至リテ稻生正治蠡斯草ヲ著ハセリト雖モ、此書ハ主ニ養胎ノ法ヲ說キタルニ過ギズ。香月牛山ノ婦人壽草(元祿五年(1))ハ素問、病源候論、千金方、婦人良方、醫學正傳、古今醫統、便產須知、產寶論、明醫雜著等ノ支那醫書ヲ引キテ求嗣、胎敎、妊婦食忌及ビ藥忌、產前諸病、妊娠產圖、產前治法、難產、臨產、產後諸病等ノ諸項ニツキテ論述セルコト甚ダ詳ナリキ。ソノ他、本道ノ書(タトヘバ醫方聚要、醫方問餘)ノ中ニモ婦人科ノ部門ヲ設ケテ、婦人疾病及ビ產ニ關スル治方ヲ擧ゲタリ。

口中科

兼康、親康兩家ノ他ニ、本康宗壽、本賀順昌、安藤安貞等ノ齒科醫師アリ、幕府ノ齒醫師ニ擧ゲラレタリ。口中科ヲ專門トセルモノハ其數ヲ增加セリト雖モ、ソノ治方ニアリテハ別ニ新シキヲ加ヘタルヲ認メズ。

鍼灸科

(1) 西暦一六一六年

杉山流鍼科

鍼灸科

元和二年(1)徳川綱吉、將軍職ニ就クヤ、直チニ令シテ、鍼術ノ再興ヲ圖ラシム。杉山和一スナハチ命ヲ奉ジテ起テ其事ニ任ジ、鍼治講習ノ所ヲ設ケ、以テ諸生ヲ教授シ、門人三島安一ニ至リテ更ニ其業ヲ擴張シ、講堂ヲ千住、板橋、新宿、品川、其他諸州四十五箇所ニ增設シ、鍼術ヲ業トスルモノ皆殆ド其門ニ出ヅ。所謂杉山流鍼科コレナリ。

杉山和一像

杉山和一、伊勢ノ人。父名ハ重政、通稱權右衞門、藤堂氏ニ仕フ、和一ハ其嫡子ナリ、慶長十五年某月生マル、目盲スルノ故ヲ以テ家ヲ義弟重之ニ讓リ江戸ニ出デテ鍼術ヲ檢校山瀨琢一ニ學ブ、和一性鈍ニシテ伎進ムコト能ハズ、遂ニ其師ノタメニ逐ハル、由テ憤然トシテ曰ク、既ニ已ニ廢人タリ、天下ニ用ナシ、然レドモ苟モ生テ此世ニアリ、一事ノ成スコトナキハ豈遺憾ナラズヤト、乃チ相州江ノ島天女ノ祠ニ詣デ、斷食禱ルコト三七日、日將ニ周カラントス、其夜夢ニ神アリ、一物ヲ授ク、熟視スレバ管ト鍼トナリ、和一大ニ喜ビ、創メテ管鍼ヲ造リ以テ其術ヲ試ミ神效アリ、其性亦一變シテ前日ノ魯鈍ニ似ズ、後京師ニ赴テ術ヲ入江豐明ニ受ク。入江氏ハ京都ノ人、祖父賴明、豐臣氏ノ醫官園田道保及ビ明人吳林達ニ就テ鍼術ヲ受ケ之ヲ子良明ニ傳フ、豐明ハ良明ノ子ニシテ入江氏世々鍼家ノ宗匠タリ、山

本草科

(1) 西暦一六〇六年

鍼術ノ手法

瀨琢一モ亦良明ノ門人ナリ、和一既ニ琢一ニ從ヒ、後豐明ヲ師トシ、斯術ヲ究メ其名大ニ顯ハル、偶々將軍常憲公病アリ和一ヲ召シテ鍼ヲ進メシム效アリ、時ニ貞享二年正月八日ナリ、次デ俸二十口ヲ賜ヒ、遂ニ進デ八百苞ヲ賜フ、元祿五年擧ゲラレテ關東總錄檢校トナリ、同七年五月十八日病ヲ以テ其家ニ歿ス、享年八十五、本所彌勒寺ニ葬ムル。著ス所、療治大概集、選鍼三要集、節要集アリ、コレヲ杉山流三部書トイヒ、其徒ノ最モ祕スルトコロナリキ。

鍼術ノ手法。 古代ハ九鍼ノ法アリシガ、此期ニ專バラ行ハレタルハ撚鍼(ヒネリハリ)打鍼(ウチハリ)管鍼(クダハリ)ノ三法ナリ。撚鍼ハ毫針ヲ用ヒ、指ニテ輕ク鍼ヲ撚ミテ皮中ニ刺シ入ルル法ナリ。打鍼ハ鍼ヲ打チテ皮中ニ入ルルモノニシテ、御薗意齋ガ創ムルトコロナリ。管鍼ハ杉山和一ガ創ムルトコロニシテ、左ノ手ニテ管ヲ穴所ノ上ニアテ、鍼ヲ管ニ入レテ右ノ食指ヲ中指ノ後ニ重ネテ食指掌ニテ鍼ノ軸ノ管ヨリ出タル分ヲ彈キ下スナリ。コノ三法中、撚法ハ支那傳來ノ術ニシテ打鍼ト管鍼トハ共ニ我邦ニテ創メラレタル法ナリ。

本草科

本草ノ學ハ元ト藥物ノ名稱ヲ正シ、眞假ヲ辨シ、ソノ效能ヲ研究シ、良毒ヲ分別シテ以テ資用ノ方ヲ察スルヲ主トシ、醫學ノ一部タリ。故ニ我邦古昔、地ニ藥園ノ設アリ、職ニ採藥ノ使アリ、此學頗フル盛ナリシガ、中世戰亂ノ餘、百度廢シテ從テ斯科亦衰ヘタリ。徳川氏初世ノ頃、慶長十一年(1)、林道

春ガ長崎ヨリ李時珍ノ本草綱目ヲ携ヘ歸リテ之ヲ幕府ニ獻ズルアリ、寛永十五年、幕府ノ新ニ江戸ノ南北兩所(品川、牛込)ニ藥園ヲ設クルアリ。本草ノ學ハコレニヨリテ益〻盛ナルヲ致シ、而シテソノ範圍ハ漸ク擴張セラレ、藥物ノ外、汎ク動植庶物ノ名稱、效用、來歷等ヲ講究シ、專ラ物產ヲ辨知スルヲ以テソノ目的トスルニ至レリ。是ニ於テカ、本草學ハ博物學ノ一種ニ屬シ、コレヲ直チニ藥物ノ學トスルコト能ハズ、而カモソノ博物學トシテ藥名ヲ論ズルタメニ醫家ノ之ヲ修ムルコトヲ要セシナリ。

寛永八年[1]ニ林道春ガ多識篇ヲ著ハシテヨリ、中村惕齋ノ訓蒙圖彙(寛文六年[2])、新井白石ノ詩經名物圖、寺島良安ノ和漢三才圖會等ノ諸書次デ現ハレテ動植諸物ノ名義ヲ考證セルアリ、次デ向井元升ノ庖厨備要大和本草ヲ著ハシ、平野必大ノ本朝食鑑ヲ選ミ、館林了庵等ノ食物摘要ヲ著ハスアリテ飲膳食治等ノコトモ亦研究セラレシガ、ソノ說ハ概ネ支那ノ書、殊ニ李時珍ノ本草綱目ニ依リタリ。而シテ、彼我ヲ對照シ、親シク物產ヲ研究シテ我邦本草學ノ基ヲ開キタルハ貝原益軒ノ大和本草(寶永六年[3])ニ始マル。

貝原益軒、字ハ子誠、通稱久兵衛、益軒ト號ス、又損軒ト號ス、寛永庚午十一月十四日ヲ以テ筑前福岡ノ城內ニ生マル、其先ハ備中ノ人、祖父某、豐州ニ來タリ黑田侯ニ仕フ、筑前ニ來タリシヨリ世々家臣トナル、父利貞、寛齋ト號ス、醫術ニ通ズ、緒方氏ノ女ヲ娶テ益軒兄弟ヲ生ム、益軒幼ヨリ慧敏殊質アリ、九歲兄存齋ニ就テ書ヲ讀ミ多ク暗誦ス、中年ニ及ビテ京師ニ入リ講學ス、遂ニ博見篤學ヲ以テ其名海內ニ顯ハル、益軒年十九、

(1) 西暦一六三一年
(2) 西暦一六六六年
(3) 西暦一七〇九年

武州河崎宿ニテ祝髮シ、柔齋ト號シ、醫トナラントス、後寛文八年、三十九歲ニシテ束髮シ、久兵衛ト稱ス、初メ陸・王二氏ノ說ヲ喜ビシガ、後朱子學ニ歸ス、心術後世ニ裨補アランコトヲ欲シ、毫モ名利ニ馳セズ、故ニソノ著ハストコロ百有餘種、多クハ書スルニ國字ヲ以テシ、用語極メテ平易、說明懇切ヲ窮メ、田夫隸卒皆コレヲ便トス、ソノ見識人ノ及バザルトコロナリ。元祿十三年益軒年七十一、老ヲ告テ仕ヲ致ス、猶ホ月俸ヲ賜フテ其老ヲ優セル。正德四年八月二十七日病テ家ニ歿ス、享年八十又五。荒津金龍寺ニ葬ムル。益軒著ハストコロ大和本草ノ他、菜譜、日本釋名、花譜、本草綱目、和名目錄等ノ本草書アリ。

貝原益軒像

我邦本草ノ學ハ此ノ如クニシテ漸次盛ナルヲ致シ、稻生宜義、次デ出デテ庶物類纂一千卷ヲ著ハシ、庶物ヲ擧ゲテ詳カニソノ氣性ヲ論ズルニ至リテ、此學ハ遂ニ大成シタリ[1]。

稻生宜義、字ハ彰信、若水ト號ス、父ヲ恒軒トイフ、大阪ノ人、本姓波々伯部氏出デテ外祖母ノ家ヲ嗣ギ稻生氏ヲ冒ス、醫ヲ古林見宜ニ學ビ、時ニ名アリ、宜義父ノ後ヲ承ケテ醫ヲ業トシ、福山德潤ニツキテ本草ノ學ヲ修ム。德潤ハ長崎ノ人、其學ヲ同邑ノ人盧草碩ニ受ク。盧草碩、名ハ玄琢、世醫ノ本草ニ通ゼザルヲ患ヒ、深ク意

(1) 西暦十八世紀ノ始

稲生若水遺墨

ヲ此ニ注ギ、藥性集要ヲ著ハス。福山德潤從フテ之ヲ學ビ、博學强記ニシテ最モ鑑別ニ長シ、遂ニソノ得ルトコロニヨリテ庶物類纂一千卷ヲ著ハス、引證宏博、精細曲盡、前古比ナシト稱セラル。宜義始メ江戸ニアリ、後加州侯ノ聘ニ應ジ、祿三百石ヲ賜ハル。正德五年七月歿ス。著ハストコロ、庶物類纂ノ他ニ、結髦居別集、炮炙全書、採藥獨斷、食物傳信纂、食物本草、新校正本草綱目、本草圖彙等アリ。

藥物科

此期ノ著書ニシテ藥性及ビ修治ノコトヲ敍述セルモノハ曲直瀨玄朔ノ藥性能毒、異名藥劑記ヲ始トシ、岡本玄冶ノ家傳預藥集、岡本一抱ノ藥性記辯解、田中

三朴ノ增補藥性能毒、久米田仙庵ノ煮藥指南等アリ。今、コレ等ノ著書ニヨリテ、當時ノ藥物學ノ梗槩ヲ擧グルトキハ左ノ如シ。

氣味陰陽 藥品ニ溫・凉・寒・熱ノ氣アリ。甘・辛・苦・酸・鹹ノ味アリ。浮沈・昇降ノ差アリ、陰陽・厚薄ノ別アリ。而シテ天ニ四季・八節・五運・六氣ノ異アリ。病ニ外感・內傷・七情アリ。ヨク天地ノ氣運ト、病症ノ虛實トヲ察シテ、藥物ノ能否ヲ定メテ之ヲ治病ノ用ニ供スルコトヲ要ス。

六陳八新 藥品ニ陳キモノヲ用ヒテ效アルモノ六種アリ。コレヲ六陳トイフ。吳茱萸、橘皮、狼毒、半夏、枳實、麻黃コレニ屬ス。新シキモノヲ用ヒザレバ效ナキモノ八種アリ。コレヲ八新トイフ。紫蘇、薄荷、菊花、赤小豆、澤蘭、槐花、欵冬花コレニ屬ス。

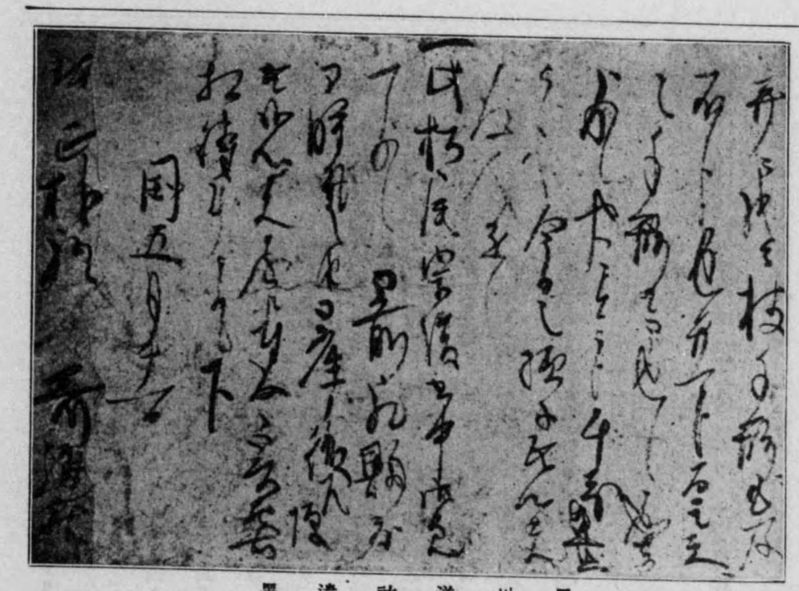
引經報使 ハコレ某藥ハ某經ヘ引キ行ク使ノ藥ナリトイフ義ニシテ、其藥ハ獨リ某經ニ入ルトセラル、タトヘバ黃連ハ獨リ手ノ少陰心經ニ入ルノ藥ニシテ、柴胡ハ手ノ少陽三焦經ニ入ルノ藥ナリト云フガ如ク、補瀉・溫凉共ニ十二經ニ對シテ特有ノ作用アルコトヲ唱道セルナリ。

相惡相反 藥品ノ性ニ互ニ相惡ムモノト、相反スルモノアリ、相惡ムモノハ或ハ用ヒテ配合スルモ可ナリ、相反スルモノヲ配合スルコトハ害アリトス。

湯散丸 內用スベキ藥ニ湯・散・丸ノ別アリ。湯ハ久病ヲ去ルニ用フ。散ハ急病ヲ去ルニ用フ。丸ハ緩病ニ用フルヲ法トス。

醫史學

(1) 西暦一六六三年



黒川道祐遺墨

修治 藥物ヲ製スルニハ火製ニ四アリ煆・炮・炙・炒コレナリ。水製ニ三アリ、漬・炮・洗コレナリ。水火共ニ用フルハ蒸・煮コレナリ。

醫史學

寛文三年(1)黒川道祐、本朝醫考三卷ヲ著ハシテ、本邦醫家ノ出處・術業及ビ敍位・產藥等ノ事ヲ記述セリ。固ヨリ之ヲ現今ノ意義ニテイフトコロノ醫史トスベキニハアラズト雖モ、國史舊記ヲ詮索シ、演史小說ヲ涉獵シテ略ボ醫家ノ出處術業ヲ抄出シ、以テ我邦醫學ノ沿革ヲ示セルノ功ハ頗ル多大ナリトスベシ。

黒川道祐、名ハ女逸、靜庵、梅庵又遠碧

江戸時代中期

(1) 西暦十八世紀ノ頃

古醫方

軒ト號ス、父名ハ光信、林羅山ト相知ル、道祐、林羅山ニ從フテ經學ヲ修メ、又堀正意(杏庵)ニ從フテ醫術ヲ學ビ、醫ヲ以テ藝州侯ニ仕ヘ、後辭シテ京都ニ歸リ、著述ニ隱レ、其名大ニ世ニ顯ハル。著ハストコロ、本朝醫考ノ他ニ雍州府志、日並記事、遠碧軒隨筆、本草辨疑等アリ、元祿四年十一月病テ歿ス。ソノ墓ハ京都本隆寺中宿坊本法院ニアリ。

江戸時代中期

政治上ニハ八代將軍德川吉宗ノ如キ英邁ノ人物出デテ大ニ紀綱ヲ張ルアリ。漢學ニハ前期ニ興リタル伊藤仁齋ノ復古學ニ嗣ギテ荻生徂徠ノ古文辭學マスマス盛大ナルヲ致シ、伊藤東涯・服部南郭・山縣周南等ノ碩儒輩出シテ斯學ハ極盛ノ域ニ達シタリ。所謂國學ニハ加茂眞淵アリ、蘭學ニハ青木昆陽・野呂元丈等アリ。諸般ノ學術ハ蔚然トシテ勃興シ、我ガ醫學モソノ影響ヲ受ケテ、面目ヲ一新セルモノアリキ(1)。

古醫方

名古屋玄醫始メテ醫方復古ノ說ヲ唱ヘ、門人芳村恂益・飯田棟隆諸家嗣テ興リテ其說ヲ主張シ共ニ世ニ名アリシモ、尙ホ未ダ全ク金・元醫學ノ陋習ヲ脫スルコト能ハザリキ。此期ニ至リテ後藤艮山、崛起

シテ、宋・明醫流ノ空論ヲ排シ、專ラ內經及ビ傷寒論ヲ師宗トシ、實詣ニヨリテ自カラ一家ノ言ヲ立テ、ソノ識見理療大ニ先輩ニ超絕スルモノアリショリ四方ノ豪傑皆其風ヲ聞テ興起シ、遂ニ古醫方ノ說ハ天下ヲ風靡スルニ至レリ。

後藤艮山、名ハ達、字ハ有成、俗稱左一郎、一ニ養庵ト號ス、曾祖名ハ光有、關白豐臣公ニ仕フ、病アリテ丹州小野中村ニ退居シ、貧困支フルコト能ハズシテ遂ニ京都ニ遷リ姓ヲ易ヘテ藤中ト稱ス、祖名ハ正次、老テ宗貞ト稱ス、人トナリ簡素仕ヘズシテ身ヲ終フ、父名ハ光長、老テ定理又默翁ト號ス、光長少時遷テ江戸ニ居ル。妣梅原氏、萬治二年七月二十三日、艮山ヲ常磐橋邊ノ僑居ニ生ム、艮山幼ニシテ聰明、已ニ長ジテ學ヲ好ミ、林祭酒ノ門ニ遊ビ、專ラ經義ヲ治ム、又牧村ト壽ニ從テ方書ヲ讀ミ治方ヲ學ブ、年二十七父母ヲ奉ジテ京都ニ移ル。艮山慨然トシテ歎

後藤艮山像

シテ曰ク、我レ儒タランカ伊藤仁齋ニ上タリ難シ、我レ僧タランカ、隱元ニ兄タリ難シ、已ムコトナクンバ則チ醫カ、豪傑ノ士ノ先鞭ヲ著クルモノアルナシト、乃チ親舊ニ謀リ、錢一貫文ヲ贄トシテ謁ヲ名古屋ヶ醫ニ執ル、ヶ醫其贄ノ薄クシテ家規ニ合ハザルヲ以テ見エズ、艮山罵テ曰クヶ醫鼠輩人ヲ知ラズト、乃チ自カラ奮テ勤勉シ、醫ヲ以テ業トナシ、名ヲ更メテ養達ト稱ス、二十年ノ間其術盛ニ行ハレ、名聲籍甚、海內仰キ慕フ、弟子二百人各々材ヲナシ業ヲ傳フ、稱シテ古醫道ノ泰斗トス。是ヨリ先キ、醫人概ネ皆髮ヲ剃リ僧衣ヲ著ク僧官ヲ拜ス、艮山深ク之ヲ惡ミ、幡然髮ヲ束キ、縫掖ヲ著シ、舊姓ニ復シテ後藤左一郎ト稱ス。而後門人ノ外、世ノ志アルモノ多クハ風儀ヲ慕フテ漸ク正俗ニ向フ、世人醫家ノ束髮スルモノヲ見テ、稱シテ後藤流トナスニ至ル。艮山書ヲ著ハスコトヲ好マズ、唯熊膽蕃椒灸說ノ數篇アルノミ。其術ヲ傳フルモノ京師ニ香川修德、山脇尙德アリ、浪華ニ市瀨穆アリ、伊勢ニ山村重高アリ、家著戶述其人ニ同シカラズ、艮山ノ業益ミ盛ナリ。執政其深ク艮山ノ術ヲ信ジ、幕府ニ薦メ聘スルニ千石ノ祿ヲ以テセントス、艮山固辭シテ就カズ。享保十八年(1)九月病デ歿ス。

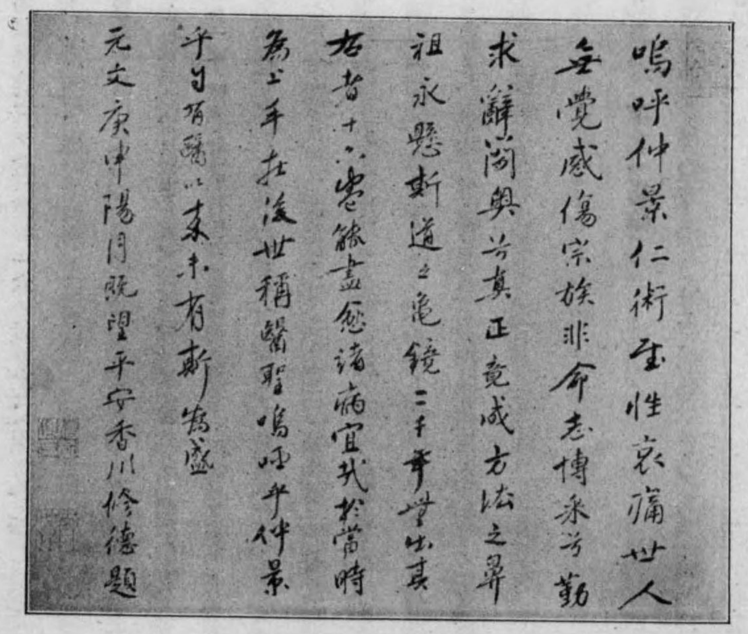
名古屋玄醫醫方復古ノ說ヲ唱ヘタレドモ、當時ノ醫家尙ホ宋・明諸家ニ雷同シ、運氣分配ノ說ヲ信奉シテ、溫補ノ說專ラ行ハレタリ。コノ時ニ方リテ後藤艮山、群疑衆怫ノ中ニ孤立シテ慨然トシテ說ヲナシ、二十年來實詣スルトコロニヨリテ百病ハ一氣ノ留滯ヨリ生ズト唱道シタリ。ソノ一氣ト云フモノハスナハチ元氣ニシテ、宇宙ノ間ニ一種精妙ノ勢力卽チ氣アリ、ソノ人體內ニ充塞スルモノヲ指シテ元氣ト稱スルナリ。元氣ノ說ハ李・朱醫學ニモ之ヲ唱フルモノナレドモ、ソノ所謂元氣ハ兩腎ノ中間ニ存スルモノニシテ艮山ガ言フトコロノ元氣ハ同ジカラズ。艮山ガ言フトコロノ元氣ハ身中身外盡クコレ氣ニシテ天地ヲ貫

キテ存スルモノナリ。凡ソ病ノ生ズルヤ、風寒ニヨレバ其氣滯リ、飲食ニヨルモ其氣滯リ、七情ニヨルモ滯リ、皆一氣ノ留滯ヨリナルナリ。

此ノ如ク、後藤艮山ハ一氣留滯ノ說ヲ立テテ、疾病發生ノ理ヲ解釋シ、以テ運氣分配ノ說ヲ一掃セントセシガ、此說ハ其子後藤椿庵ニ至リテ推廣セラレ、論理益〻明瞭トナレリ。其說ニ據ルニ、人ノ身體ニハ形ト氣トアリ。外感・內傷ハ固ヨリソノ形ニ乘ズト雖モ、ソノ氣ノ充ザルトコロアルニヨリテ始メテ病ヲ喚起スルモノナリ。百病ハ一氣ノ留滯ヨリ生ズト云フコトヲ分ケテ說クトキハ則チ虛ト鬱トナリテ、虛鬱ノ二證ヲ以テ疾病ヲ區別シ、更ニ進ンデ、一氣ノ留滯ニ表(耳、目、鼻、口、皮肉、筋骨、咽喉、膀胱、腸中)ヨリスルモノト、裏(五藏精神ノ居ル所)ヨリスルモノアルコトヲ論ジタリ。既ニ一氣留滯ノ說ヲ以テ病理ヲ說ク、從テソノ治法ノ綱要トスルトコロハ順氣ニアリ。內傷ノ病ニハ飼食ヲ厚フシテ溫養ヲ助ケ、外邪ニハ則チ藥ヲ用フルヲ主トシ、藥ヲ用フルニハソノ因ヲ明ニシテ之ヲ治スルヲ法則トシタリ。

儒醫一本論

伊藤仁齋復古ノ學ヲ唱ヘ、堀川學派漸ク興ルニ方リテ、其門ニ並河天民アリ、才學德望ヲ以テ世ニ推サレシガ、斯人傍ラ醫方ヲ修メ、好ンデ醫事ヲ言フ、仁齋、儒醫ノ說ヲ作テ其非ヲ論ズレドモ敢テ意トナサズ。儒ニシテ醫ヲ兼ヌルモ焉ンゾ道ニ害アランヤト益〻醫事ヲ修ム。松原慶輔・清水慶長等其門ニ



香川修庵遺墨(張仲景像贊)

出デ師說ヲ奉ジテ、共ニ儒ニシテ醫ヲ兼タリ。後藤艮山モ亦、經義ニ於テハ仁齋ノ古學ニ服シ、ソノ醫學ノ門人香川修德ヲシテ仁齋ノ門ニ入ラシメタルホドニテ一方ニアリテ、伊藤仁齋、太宰春臺等碩儒ノタメニ排斥セラレタルニ拘ラズ、儒ニシテ醫ヲ兼ヌルモノハ益〻

多ク、香川修德ニ至リテ遂ニ儒醫一本ノ說ヲナスニ至レリ。

香川修德、字ハ太冲、修庵ト號ス、播磨姫路ノ人、幼ニシテ穎悟、年十八、笈ヲ負テ京都ニ出テ、後藤艮山ニ就テ醫ヲ學ブ、艮山之ヲ器トシ、伊藤仁齋ニ從テ經義ヲ修メシム、居ルコト五年、業大ニ進ム、而シテ儒ハ父ノ遺志ニアラザルヲ以テ志ヲ決シテ醫トナリ講究多年遂ニ一家ノ言ヲ立テ、聖道醫術ハ其本ヲ一ニシテ二致ナシト言ヒ、其堂ヲ名ヅケテ一本ト號シ、藥選、行餘醫言等ノ書ヲ著ハシ、師說ヲ推廣シ、古醫方益々開ケ、儒醫ノ說愈〻盛ナリ。受業生徒籍ヲ著クルモノスベテ四百餘人ニ上ルトイフ。寶曆五年(1)病ヒテ歿ス、年七十三。

香川修庵ノ醫方ヲ說クヤ、一ニ實詣ヲ主トシ、素問・靈樞等ノ古書ヲモ疑ヒ、五運・六氣ノ如キハ邪說妄論トシテ口ヲ窮メテ之ヲ排斥シ、五行・六經ノ空誕ノ據ナキコトヲ指摘シ、ソノ藥物ヲ論ズルヤ引經報使、補瀉氣味用藥、昇降浮沈等ノ空論ニシテ治事ニ益ナキコトヲ言ヒ、實驗ニ依リテ、拘泥ノ說ヲ破ブルコトヲ要トシ、藥物ノ氣味ヲ問ハズ、相反・相畏・相惡等ノ說ニ關セズ、每ニ試ミテ其效ヲ確認シ、某ノ藥、某ノ疾ヲ治スルコトヲ知ルヲ主要トナシタリ。

(1) 西暦一七五五年

萬病一毒論

名古屋玄醫先ヅ興リテ古醫方ヲ唱ヘショリ、後藤艮山次デ興リ、後藤椿庵、香川修庵、山脇東洋、永富獨嘯庵、北山友松等相踵デ出デ、後世醫家ノ陰陽運氣ノ說ニ惑ハズシテ直チニ周漢醫

萬病一毒論

術ノ舊ヲ採リ、最モ自家ノ實驗ヲ重ンズルニ至リシガ、コノ見解ノ最モ盛ニナリタルハ古醫方起リテヨリ六七十年、寛保・延享ノ頃ニ至リテ吉益東洞ガ豪傑ノ資ヲ以テ崛起シテ一家ノ言ヲナシ、其說ヲ以テ遂ニ一世ヲ壓倒シタルトキニアリ。吉益東洞ハ後藤・香川・山脇諸家ノ論說ニ和シテ唐・宋以降ノ醫書ヲ斥ケ、大倉公以下皆滔々トシテ陰陽醫ナリト罵リ、五行經絡ノ邪說ヲ排シ、ツトメテ自家ノ實驗ニ取リ、言フトコロ爲ストコロ盡ク自家ノ親試ニ出デザルハナク、苟モ自家ガ經驗シテ效ヲ得タルモノハ擧世皆之ヲ非トスルモ更ニ顧ミズ、漢・唐諸家ノ所說ト雖モ、空理ヲ去リテソノ精粹ヲ擧ゲ『萬病一毒、衆藥皆毒物、毒ヲ以テ毒ヲ攻ム。毒去リテ體始メテ佳ナリ。初メ元氣ニ損益ナシ、何ゾ補ヲ云ハンヤ』ト主張シテ、曲直瀨道三以來、世醫皆溫補ノ說ヲ奉ジテ、療病ノ道ヲ誤マレルヲ救濟セントシ、其說斬新、其言矯激ニシテ天下ノ醫人ヲ驚愕セシメタリ。

吉益東洞、名ハ爲則、字ハ公言、通稱周助、安藝廣島ノ人。其先ハ畠山政長ヨリ出ヅ、曾祖政慶紀伊ニアリ豐臣氏ノタメニ攻メラレ、城ヲ棄テテ河內ニ走リ、金瘡醫吉益半笑齋ノ家ニ匿レ遂ニ其姓ヲ冒ス、子政光始メテ安藝ニ移リ、廣島ノ山口町ニ居リ、醫ヲ業トシ、姓ヲ畠山ニ復シ、自カラ道庵ト稱ス、其子俊長、重宗、東洞ハ卽チ重宗ノ長子ナリ、元祿十五年五月其家ニ生マル。東洞少キトキ其名族ニ出ヅルコトヲ聞キテ、大ニ抱負スルトコロアリ、阿川氏ニ從テ兵法ヲ學ビ、父祖ノ業ヲ修ムルノ心ナシ。年十九ニシテ飜然悟ルトコロアリ、素難以下百氏ノ書ヲ讀ミテ遂ニ陰陽五行ノ繫說ナルヲ知ル。元文三年、父母女弟ヲ從ヘテ京都ニ移リ居ラ萬里小路春日町南

吉益東洞像

ニトシテ所謂古醫道ヲ唱フ、東洞時ニ年三十七、生キテ時ニ遇ハス家ヲ興スコト能ハズシテ醫ニ隱ルヲ汚トシテ姓ヲ吉益ニ改ム。東洞大言自ラ快トシ、抱負甚ダ大ナレドモ時流未ダ信セズ、業マタ行ハレズ、貧困日ニ甚シ、紙泥木ヲ以テ偶人ヲ造リ市ニ鬻キテ僅ニ衣食ヲ給ス。後病人ノ家

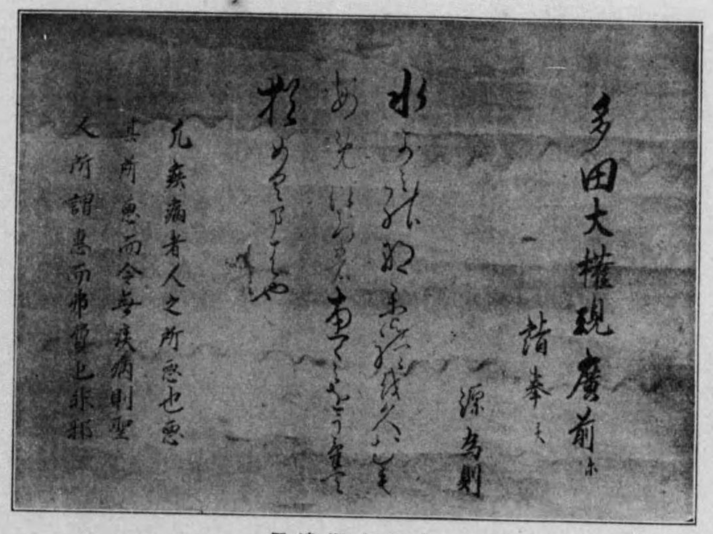
吉益流醫方

(1) 西暦一七五一年

ニ於テ時ノ名醫山脇東洋ニ會シ、共ニ處方ヲ論ジテ大ニソノ推服スルトコロトナリ、東洞ノ名コレヨリシテ世ニ出ヅ。年四十五東洞院街ニ移ル、東洞ノ號ハ之レニ取リシナリ。寶暦ノ初年門人鶴元逸東洞ノ醫說ヲ集メテ醫斷ヲ著ハシ之ヲ世ニ公ニシ、一時コレヲ是非スルモノ海内ニ普チシ。寛延四年(1)東洞年五十、傷寒、全實ノ諸方ヲ選ビテ二百二十方ヲ採リ類聚シテ一書ヲ成シ、名ヅケテ類聚方ト云フ、コレニヨリテ世醫始メテ方意ヲ知ル。已ニシテ此中ヨリ又百七十三方ヲ選ビテ、論證治效ヲ附シテ方極一卷ヲ作リテ其門ノ方鑑トシ、次デ又藥徵三卷ヲ著ハシテ藥能ヲ審ニス。コレニヨリテ其業愈大、來リテ業ヲ受クルモノ海内ニ普チク、四方ノ諸侯大夫從テ診治ヲ請フモノ亦多シ。明和中居ヲ皇城ノ西門外ニ移シ、居ルコト四年、安永二年秋九月病デ歿ス、年七十又二、男子四人、長男天ッ、二男猷家ヲ繼グ、三男清、四男辰、別ニ家ヲ成ス、女子一人、門人二宮桃亭ニ嫁ス。

吉益流醫方

吉益東洞ガ主張セルトコロハ萬病唯一毒ナリ、ソノ毒ノ所在ヲ見テ治療ヲ加ヘ、敢テ病ノ因ヲ論セズ、飲食口ニ入リテ若シ留滯スルトキハ則チ毒トナル、百病コレニカカリ、諸證コレヨリ出ヅ、外邪襲ヒ來タルト雖モ、ソノ毒ナキモノハ入ラズト云フニアリ。萬病タダ一毒ナルガ故ニコレヲ治スルコト毒ヲ去ルヲ要トス、藥モ亦毒ナリ、毒ヲ以テ毒ヲ改ム、毒去レバ病治スベシ。死生ハ命ナリ、天ヨリ之ヲ作ス、醫モ之ヲ救フコト能ハズト斷ジテ、支那ニアリテハ宋以後、我邦ニアリテハ室町時代、殊ニ曲直瀨道三以後、專ラ世



吉益東洞遺墨

ニ行ハレタル五運六氣ノ鑿說ヲ罵倒シ、朱丹溪ガ陽有餘、張介賓ガ陰有餘ノ說ノ如キハ穿鑿甚シク徒ニ以テ人ヲ惑ハスノミト排斥シ、先賢ノ說ト雖モ證據ナキモノハ採ラズ。ソノ病ヲ論ズルニハ現證ヲ以テ治本トナシ、敢テソノ因ヲ擧ゲズ、又脈候ヲ先ニセズ、病ヲ稱スルニ名ト因トヲ以テセズシテ、某湯ノ證、某藥ノ證トイヒ、病毒ノ所在ヲ認メテコレニ藥方ヲ處シ、瞑眩スルヲ以テ效應アルノ度トナシタリ。コレ實ニ破天荒ノ說ニシテ、ソノ說ノ雄渾ナルコト、遠ク後藤氏ノ一氣留滯論ノ上ニ出デ、一世ノ醫人ヲシテ遂ニ緘默感服シテマタ仰ギ見ルコト能ハザルホドニ至ラシメタリ。コレ固ヨリ吉益東

洞ノ膽略ニ富ミ、剛氣ニシテ一時ヲ叱咤シタルニ由ルモノナレドモ、而カモソノ門下ニ、俊傑ノ士甚ダ多ク。東西相呼應シテ師說ヲ紹述シタルニヨルコト尠カラズ、而シテソノ最モ著ハルルモノハ肥後ノ村井琴山、京都ノ中西深齋、江戸ノ岸少翁ナリ。

村井琴山、名ハ椿、字ハ大年、椿壽ト稱ス、其人トナリ卓犖不羈、其父見朴醫ヲ以テ名アリ明ヲ失フテ熊本醫學館ニ教授ス、琴山每ニ扶ケテ講席ニ至リ、執讀ヲ受ク、父歿シテ後助講ノ命ヲ受ケタレドモ固辭シテ就カズ、是時ニ方リテ吉益東洞古醫方ヲ京師ニ唱ヘ、名聲嘖々タリ、琴山之ヲ聞キテ東遊シ、ソノ門ニ留マルコト數月、方ヲ受ケテ歸リ、居ルコト數年再ビ從テ業ヲ受ク、東洞益〻其才ヲ偉トシ厚ク之ヲ遇ス、業成リテ鄉ニ歸リ古醫方ヲ唱フ。中年ニ至リテ醫名日ニ著ハレ、遠近治ヲ乞フモノ益〻多シ。年五十餘ニ及ビ熊本藩侯始メテ十口糧ヲ賜ヒ、數年ニシテ祿百名ヲ賜ヒ醫員ニ擧ゲラル。文化十二年病ミテ歿ス、年八十三。琴山厚ク吉益東洞ノ說ヲ信ジ、大ニソノ道ヲ繼述シ、著ハストコロ醫道二千年眼目篇、類聚方議、續藥徵、方極剛定、藥量考、和方一萬方等アリ。

中西深齋、名ハ惟忠、字ハ子文、通稱主馬、モト伊賀十八族ノ一ナリ、曾祖某ニ及ビテ京都ニ移ル、父宗律、母ハ高谷氏、深齋幼ニシテ凡ナラズ、精力人ニ過グ、弱冠ニシテ儒學ニ入リ、後吉益東洞ノ古醫道ヲ唱フルヲ聞キテ志ヲ飜ジテ醫トナリ、東洞ニ師事ス、嘗テ謂フ、傷寒論ノ書、今ヲ去ルコト久遠ニシテ文字古簡、讀ミ易カラズ、歷代註家アリト雖モ其旨統ヲ得ルモノ少ナシ、コノ書ヲ註解シテ以テ師道ヲ開發セント、是ニ於テ門ヲ杜ヂ、客ヲ謝シ、一意攻讀スルコト殆ド三十年、遂ニ傷寒論辨正、傷寒論名數解ノ二書ヲ著ハシ、務メテ要旨ヲ明ニシテ以テ治療ノ通規ヲ立ツ、此書一タビ出デテ海內傳論セザルモノナク、諸藩ソノ名ヲ聞テ厚禮コレヲ聘スレドモ辭シテ就カズ、

享和三年春病ミテ歿ス、年八十。

岑少翁、名ハ逸、字ハ斑如、一字歸昌、初メ右膳ト稱ス、後少翁ト改ム、貉丘ト號ス、長門ノ人。吉益東洞ニ就テ古醫道ヲ修メ、江戸ニアリテ吉益氏ノ學ヲ唱フ。人トナリ豪邁ニシテ膽氣アリ、固ク師說ヲ奉ジ、ソノ方法ニアラザレバ用ヒズ、晩年門戸ノ盛一時比ナシ、弟子ノ顯ハルルモノ數十人。其徒、岑少翁ト村井琴山トヲ併ベ稱シテ、東海翁、西州老ノ目アリ、文政元年病ミテ歿ス。

一毒論ノ反對者

吉益東洞ノ萬病一毒論ハ一世ヲ壓倒シ、當時ノ醫人ミナコレニ靡キタルヤノ觀アリシモ、其間ニアリテコレヲ駁擊シタルモノナキニアラズ。

後藤慕庵ハ艮山ノ孫ニシテ祖父ノ說ヲ奉ジ、艮山ノ百病ハ一氣ノ留滯ニ生ズトイフノ說ト、東洞ノ萬病ハ唯一毒トイフノ說トヲ比較シテ、艮山ノ言ハ據アレドモ東洞ノ說ハ單ニ理論ニ過ギズト嘲グリ、因ハ治ノ本ヅクトコロニシテコレヲ明ニセザルベカラズ、シカルニ萬病一毒トスルガタメニソノ因ヲ言ハズ、ソノ名ヲ辨ゼズ、唯某湯ノ證、茶藥ト證トイフハコレ仲景ノ言ノ誣フルモノナリト駁シタリ。

江戸ノ醫家望月鹿門ハ折衷派ヲ以テ一家ノ言ヲ立テタル人ニシテ一毒家ガ治術ノ攻擊ニ偏スルヲ咎メ、吉益氏ノ說ノ如キハ傷寒論ノ皮膚ヲ知リテソノ骨髓ヲ知ラザルモノナリト罵倒シタリ。

吉村逼宜及ビ龜井南溟ハ共ニ初メ吉益東洞ノ門ニ入リテ所謂古醫方ヲ受ケシガ、其說ノ偏僻ニシテ術ト齟齬スルモノアルヲ疑ヒ、東洞ノ說ヲ以テ英雄人ヲ欺クモノトシテ、ソレヲ排斥シタリ。

畑黃山ハ御醫ヲ以テ其名洛下ニ顯ハレ、延享ノ初メ法眼ニ敍セラレ、後ニハ法印ニ進ミ、醫學院ト號セシガ、寶曆十二年斥醫斷ヲ著ハシテ醫斷ニ載スルトコロノ東洞ノ所說ヲ駁擊シタリ。黃山ノ說ニ據レバ一毒論者ガ醫經ヲ廢シ、陰陽ヲ棄テ、古今不移ノ道ヲ變ジテ其端ヲ異ニスルハ非ナリ。方ヲ張仲景ニ採ルト稱シテ而シテ取捨意ニ任ジ、加フルニ妄說ヲ以テスルモ亦非ナリ。更ニ術ヲ論ズルコト率易、證ヲ分ツコト忽略、標本ヲ求メズ、病因ヲ究メズ、攻アリテ補ナキコトハ大ニ非ナリト云フニアリキ。

然レドモ、吉益東洞ノ一毒論ハ、此ノ如キ一部ノ反對者アリシニモ拘ラズ、漸次ニ天下ニ瀰蔓シ、所謂古醫方ハ當時ノ醫界ヲ風靡スルニ至レリ。

氣血水論

吉益東洞ノ一毒說タル、ソノ綱ヲ示スノミニシテ茫乎トシテ據ルトコロ少ナキガ故ニ、其說ヲ恢弘センニハ更ニ細目ヲ擧ゲテ示サザルベカラズ。氣血水ノ論ハコレガタメニ起リタルモノニシテソノ說ヲ立テタルハ東洞ノ嗣子南涯ナリキ。

吉益南涯、名ハ猷、字ハ修夫、南涯ハ其號ナリ。幼名大助、後周助ノ稱ヲ襲フ、東洞ノ長子ナリ。年二十四ノ

時父東洞歿ス、乃チ箕裘ノ業ヲ嗣ギ、二弟ヲ育シ、且ツ疾醫ノ道ヲ生徒ニ授ク、從遊ノ士甚ダ多ク、大ニ門風ヲ發揮シテ家聲ヲ墜サズ、年二十八ニシテ方機ヲ著ハシ、仲景藥方ノ活用ヲ示ス。天明八年居ヲ大坂ニ移シ、其業大ニ行ハル、其居ルトコロノ地、大坂ハ京師ノ南ニ位シ、水涯ナルガ故ニ南涯ト號ス。年四十三ノ時、大坂ヲ去リテ京師ニ還リ、三條東洞院西ニト居ス。文化十年六月十三日病ヲ以テ其家ニ歿ス。享年六十四。門人青沼道立ヲ養フテ二女ニ妻シ家ヲ嗣ガシム。道立名ハ順、字ハ信夫、北洲ト號ス。父ノ遺說ヲ奉ジテ生徒ヲ教授シ、家聲ヲ墜サズ。南涯著ハストコロ、傷寒論精義、輯光傷寒論、醫範、氣血水辨、氣血水藥徵、方機、方庸、觀症辨疑等アリ。門人ノ籍ニアルモノ凡ソ三千餘人、名ヲ成セルモノ少カラズ、賀屋恭安、中川修亭、和田元庵、難波抱節、岩田廣彦等ハ其選ナリ。

吉益南涯像

吉益南涯遺墨

後世家

(1) 西暦十八世紀ノ中頃

氣血水ノ說ハ、氣・血・水ノ三物アリテ、毒コレニ乘ジテ始メテ證ヲ成ストイフニアリ。毒ハ形ナリ、必ズ有形ニ乘ジテソノ症ヲ現ハス、有形トハ氣ト血ト水トノ三物ヲイフ、コノ三物ノ精、循環スレバ則チ養ヲナシ、停滯スレバ則チ病ヲナス、スナハチ病マシムルトコロノモノハ毒ニシテ、病ムトコロノモノハ物ナリト說キ、病症ヲ論ズルニモ、治方ヲ說クニモ、皆コノ氣・血・水三物ヲ依據トシタリ。南涯ハソノ所見ニ本ヅキ、東洞ガ見證ノミヲ根據トシテ、治方ヲ論ズルニ反シテ、證異ナリテ病同ジク、病異ナリテ證同ジキモノアルガ故ニ、見證ノミニ依ルベカラズト主張シ、以テ東洞ノ萬病一毒論ニ修飾ヲ加ヘタリ。

香月牛山像

後世家

古醫方ノ盛ニ行ハルルニ至リシハ寶曆以後ニシテ、此期ノ始、享保ヨリ元文・寛保・延享ノ頃ニ至ルマデハ所謂後世醫方モ尙ホ盛ニ行ハレ、見識アル醫家ニシテコノ派ノ中ニ屬セシモノモ少カラザリキ。香月牛山ノ如キハソノ第一位ニ居ルベキ大家ナリ(1)。

香月牛山、名ハ則眞、字ハ啓益、筑前ノ人、少フシテ貝原益軒ニ學ビ、又鶴原玄益ニ從フテ方伎ノ書ヲ受ク。壯ナルニ及ビテ

中津侯ニ仕ヘ、居ルコト十四年、病ニ托シテ仕ヲ致シ京師ニ遊ビ、居ヲ二條ニトシ、刀圭ヲ業トス、又書ヲ著ハシ優遊自適ス、小倉侯其名ヲ聽キ聘スレドモ應ゼズ、侯其嗣則貫ヲ辟ス、依リテ則貫ト共ニ來タリテ客ヲ以テ養老ノ俸ヲ受ク。牛山妻妾ナク、子ナシ、則貫ハソノ甥ナリ、先ヅ歿ス、ヨリテ門人貞庵ヲシテ其祿ヲ受クシム、貞庵乃チ香月氏ヲ冒ス、元文五年牛山年八十五ニシテ歿ス。牛山著ストコロ螢雪餘話、醫學鉤玄、國字醫叢、牛山活套、牛山方考、婦人壽草、老人養草、小兒養草、習醫先入等アリ。

香月牛山遺墨

牛山ノ醫說ハ固ヨリ金・元諸家ノ論說ニ依據セルモノナレドモ、中華ノ醫書トテ誤謬少カラズ、古人ノ說トテ精確ナルモノノミニアラズト、他ノ後世派ノ人々ガ、前人ノ論說ヲ株守シテ自カラ辨セザルガ如キナラズ、ソノ所說ニハ頗フル識見アリキ。

折衷學派（考證學派）

寶曆ノ初、江戸ノ儒家井上金峨出デテ徂徠ノ古學說ヲ駁シ、訓詁ヲ漢・唐ニ採リ、義理ヲ宋・明ニ撰

ビ衆說ヲ折衷シテソノ穩當ナルモノヲ取ルベシト唱ヘショリ、折衷學派（又考證學派）ハ大ニ興リ、山本北山・吉田篁墩・太田錦城・龜田鵬齋等ノ諸家相踵デ出デテソノ說ヲ主張セシガ、ソノ所說ハ我ガ醫方ニモ影響シテ所謂折衷學派（考證學派）アリテ古醫方及ビ後世醫方ニ併ビ存シタリ。望月鹿門・山田圖南・福井楓亭・多紀桂山ノ如キハソノ卓越セルモノナリキ。（折衷學派ノコトニツキテハ更ニ次期ニ敍述スルトコロアルベシ。）

望月鹿門、名ハ君英、三英ト稱ス、鹿門ハ其號ナリ。享保十一年御番醫師ニ擧ゲラレ、元文二年奥醫師トナリ法眼ニ敍セラル。其家書籍ニ富ム、鹿門乃チ百家方書ヲ串穿シ、ソノ考究ノ博、術業ノ精、朝野ニ稱セラル。又少壯ヨリ文學ヲ好ミ服部南郭ノ門ニ遊ビ貴重セラル。著ストコロ明醫小史、醫官女稿、又女餘草等アリ。明和六年歿ス。享年七十三。

山田圖南、名ハ正珍、字ハ宗俊、世々幕府醫官タリ。祖父正朝神童ノ稱アリ、德川吉宗特ニ命ジテ儒官トス、父正熙ニ至リテ醫官ニ復ス。圖南幼ニシテ儒學ヲ山本北山ニ受ク、明和三年年十六ニシテ朝鮮使者ニ隨從スルトコロノ醫員ニ接見シ夙成ヲ賞セラル。圖南好ンデ傷寒論ヲ讀ミ諸家ノ註釋ヲ聚メ、ソノ正要ヲ摘ミ、章疏シテ之ヲ節解シ、一字ノ義訓モ參互考訂シテソノ確當ヲ究ム。著ストコロ傷寒論集成、傷寒考、傷寒檢證、金匱檢證、敗鼓錄、桑韓筆語、骨度辨誤等アリ。天明七年二月歿ス。

福井楓亭、名ハ幌、字ハ大車、京師ノ人。菅隆伯ニ從テ醫ヲ學ブ、思ヲ典籍ニ潛メ、醫書ノ未ダ印行セザルモノヨリ舶來奇籍ニ至ルマデ百方乞假、涉獵セザルハナシ、コレニヨリテ學該博ヲ究メ、術精巧ヲ致シ、聲譽籍甚タリ。

著ストコロ集驗良方アリ、天明ノ初、召サレテ江戸ニ來タリ、醫官トナル、寛政四年、年六十八ニシテ歿ス。

多紀桂山、傳ハ後ニ出ヅ。

和方家

和方家

正德・享保ノ頃、儒學ニ物徂徠・室鳩巣等ノ大家アリテ古文辭ヲ唱道セシトキニ方リテ、荷田春滿アリ、國學ノ復古ヲ以テ自カラ任ジ、ソノ門人、加茂眞淵、服部南郭・太宰春臺等ト時ヲ同ブシテ世ニ出デ、國學ヲシテ當時全盛ノ漢學ト其隆ヲ比スルニ至ラシメタリ。所謂國學ハ一ニ和學ト稱シ、本邦固有ノ歷史・辭章・法制・有職等ヲ研究スルコトヲ主トセルガ故ニ、ソノ影響ハ我ガ醫學ニ及ビ、遂ニ和方家ト名ヅクル一派ヲ生ズルニ至レリ。

産科

産科

産科ノ方術ハ已ニ久シク行ハレタレドモ、方藥・符咒ヲ旨トシ、手術ヲ施サズ、强テ手術トイフベキモノヲ求ムレバ鍼刺・擦鹽等ニ過ギザリシガ、延享・寶曆ノ頃ニ方リ、山脇・吉益ノ諸家崛起シテ醫方復古ノ說ヲ唱道シ、先物實驗ヲ主張セルトキ、産科ニモ賀川玄悅出デテ助産ノ手術ヲ講ジ、明和三年産論二卷ヲ著シテ一家言ヲ立テタリ。其術師承スルトコロナク、又古人ニ本ヅカズ、皆親試シテ獨得スルトコロニシテ、當時曠古一人トマデ稱贊セラレ、産科ノ術ハコレニヨリテ一時ニ勃興シタリ。

産論

賀川玄悅、一名光森、字ハ子玄、本姓ハ三浦氏、世々彦根侯ニ仕フ、父名ハ長富、槍術ヲ以テ名アリ、玄悅ハソノ庶子ナリ、七歲ニシテ出デテ母家賀川氏ニ養ハル、依テソノ姓ヲ冒ス。年壯ナルニ及ビテ京師ニ赴ムキ、一貫街ニ住ス、家貧シキガ故ニ針治按摩ノ伎ヲ賣リテ自給シ且ツ古醫方ヲ學ブ。居ルコト數年、適〻横産ノ婦ヲ治シ、助産ノコト、藥石ノ及バザルトコロハ手術ニテラザレバ辨ズル能ハザルヲ悟リ、淵思覃精、益〻ソノ術ヲ闡明シ、遂ニ救護ノ術數法ヲ發明シ其名四方ニ喧傳セラル。明和三年年六十七ニシテ産論ヲ著ハシ一家言ヲ立ツ。明和五年阿波侯ノ聘ニ應ジテソノ士籍ニ入リ、秩百石ヲ食ム、居ルコト數年、安永六年九月病ヲ以テ其家ニ歿ス、年七十八。門人諡シテ景定先生トイフ。二子アリ、別ニ家ヲ成ス、門人岡本玄廸ヲ養フテ嗣トナス。

賀川玄悅

賀川玄悅ノ孕育ヲ論ズルヤ、婦人ノ腰形(骨盤)ノ必ズ拗曲ニシテ男子ノ腰形ト同ジカラザルコトヲ說キ古來ノ說ニ、『妊娠十月、子頭上ニ向ヒ、將ニ生レントスルニ及ビテ身ヲ轉シテ下ル』ト言ヘルヲ駁シテ、

『大抵五月ノ後、腹中ノ胎、大サ瓜ノ如ク、必ズ背面倒首、ソノ頂ハ横骨上際ニ當タリテ居ル』ト言ヒ、又頭顱柔軟、壓區シテ出ヅルノ說ヲナス、共ニ從來ノ醫家ガ夢想ダモセザリシトコロナリ。ソノ產位ヲ論ズルヤ、コレヲ正產・逆產・橫產・足產・坐產ニ別チ、後ノ三者ヲ以テ理娩ノモノトナシ、救護ノ術トシテ坐草（坐產治法、會陰保護ヲ主トス）、杼倒（兒ノ左右足ヲ挾捉シ急ニ引提ス）、整橫（橫產按回法）、擧攣（雙胎娩出法）、回生術（兒頭ヲ碎キ、又ハ鉤ニテ摧裂スル）ノ五術ヲ擧ゲタリ。產後ノ治術トシテハ鉤胞（胞衣ヲ鉤出ス）。禁暈（眩暈ヲ治ス）、遏崩（下血ヲ遏止ス）、納腸（脫腸ヲ還納ス）、斂宮（子宮脫ヲ復ス）、復肛（脫肛ヲ還納ス）等ヲ擧ゲタリ。

獨リコレノミナラズ、賀川玄悅ハ從來、我邦ノ俗、妊娠五月ニ帶ヲ胸下ニ束子以テ胎氣ヲ鎭メテ上昇セザラシムルノ說ヲ排斥シ、務メテ鎭帶ヲ至ラシメタリ。又、婦人大產ノ後、產椅ヲ用フルノ風習ハ害アリテ益ナキコトヲ痛論シ、整胎ノ法トシテ腹部按摩ノ法ヲ用ヒタリ。

賀川玄廸像

此ノ如キ產科ノ方術ハ玄悅ノ創唱ニ出ヅルモノニシテ、コレニヨリテ我ガ治療界ニ一新方面ヲ開キシガ、ソノ方術ハ玄悅ノ嗣、玄廸ノタメニ更ニ大ニ恢弘セラレタリ。

賀川玄廸、字ハ子啓、後父ノ名ヲ襲ヒテ玄悅ト稱ス、本姓岡本氏、出羽ノ秋田ノ人。年二十ニシテ京師ニ赴ムキ、賀川玄悅ノ門ニ入リ產科ヲ學ブ。玄悅ソノ才ヲ愛シ、遂ニ子養シ、女

ヲ以テ之ニ配シ、ソノ家ヲ嗣ガシム。後阿波侯ノ聘ニ應ジ、藩醫トナル。玄悅老テ退隱スルニ及ビ、玄廸其業ヲ嗣ギテ益々コレヲ恢弘シ、門人愈々進ミ、治ヲ乞フモノ常ニ其門ニ盈ツ。安永四年產論翼二卷ヲ著ハシ、論及ビ圖ヲ造リテ產論ノ說ヲ詳カニシ、又ソノ言ハザルトコロヲ言ヒ、賀川氏ノ產術復タ餘蘊ナシ、安永八年十月病ヲ以テ其家ニ歿ス、年四十一。門人原南陽、奧劣齋、佐々木茂庵等最モ顯ハル。

賀川玄廸ハ其父玄悅ノ術ヲ補修スルコトニ力ヲ致シ、賀川氏助產術ハコレニヨリテ益々精緻ナルヲ致セシガ、其術ハ玄悅ノ實子タル玄吾ノ力ニヨリテモ亦、大ニ恢弘セラレタリ。

賀川玄吾、玄悅ノ長子、名ハ滿卿、字ハ德夫、有齋ト號ス、倜儻ニシテ任俠、奇節ヲ好ムコト酷タ其父ニ肖タリ、繼母ト和セザルノ故ヲ以テ出デテ別ニ家ヲ成シ、產術ヲ以テ其名大ニ顯ハル。著ハストコロ、產術祕訣、產術記等アリ。

婦人科

賀川氏出デテ產科ハ始メテ興リタレドモ、婦人科ノ發達ハ之ニ反シテ甚ダ著シカラズ。後藤艮山ノ病因考ニハソノ婦人門ニ妊娠・產前・產後・經閉・崩漏・帶下・乳岩ヲ擧グルノミ。香川修庵ノ一本堂行餘醫言ニモ、ソノ婦人門ニハ妊娠惡阻・胎懸・胎煩・半產・產後・鬱冒・帶下・崩漏・乳岩・乳癌ヲ擧ゲテソノ症狀ヲ說クノミ。吉益東洞以下ノ諸家ハ傷寒ノ講究ヲ專一トシ、雜病ノ治方ニツキテハ精シク記述セズ。婦人科ノ論說及ビ治方ニツキテハ見ルベキモノナシ。

小兒科　口中科　咽喉科

兒科

寶暦六年攝津ノ人、下津壽泉ガ選ブトコロノ古今幼科摘要ヲ見ルニ、支那ノ醫書七十四部ヲ引用シ、病門ヲ百十四ニ別チテ、證候及ビ治方ヲ論ジタレドモ、當時ノ小兒科ノ醫家ガ專ラ師宗トセルモノハ劉方明ノ幼幼新書、寇衡美ノ全幼心鑑、薛良武ノ保嬰全書、王肯堂ノ幼科準繩、萬羅田ノ幼科發揮、錢大田ノ活幼全書等數書ニシテ、ソノ内容ハ前期ニ於ケルモノニ異ナラズ。明和元年豐島清齋、幼科祕錄ヲ著ハシ、小兒ノ大患ハ疳眼・疳瀉ニアリトイヒ、主ニ疳疾ヲ論ジテ、驚風・撮口等ノ症ニハ論及セズ。柴田元養ノ小兒方（明和七年）ニ至リテ、法則ヲ千金方ニ取リ、古今ノ治方ヲ集メ、一家言ヲ立テタリ。

口中科

當時江戸ニ津田氏アリ、紀州ニ今井氏アリ、口中科專門ヲ以テ家ヲ成スモノ漸ク加ハレリ。シカモソノ師宗トセルハ概子薛氏ノ口齒類要ノ類ナリシカト思ハル。

咽喉科

張宗良ガ選ブトコロノ喉科指掌（清ノ乾隆四十二年、卽チ我邦ノ安永六年ノ刊行ニ係ル）此期ノ末

耳科　鼻科　眼科

ニ我邦ニ入リテヨリ、咽喉ノ一科、始メテ專門ノ書アリ。コノ書ニハ咽腫・喉痹ノ二大病類ヲ擧ゲ、更ニ數種ニ細別シ、圖ヲ揭ゲテ一々ソノ病變ヲ註釋シ、且ツソノ治方ヲ詳述シタリ。此書ハ直チニ翻刻セラレテ我邦醫家ノ讀ムトコロトナリタレバ咽喉ノ病論及ビ治方ハコレニ依リテ多少ノ影響ヲ受ケシナルベシ。

耳科

文藝類纂學志ノ條ニ『耳は幕府の醫員添田玄泉自から耳醫と稱せしあるのみ』ト載セタリ。今ソノ年代ヲ詳ニセズト雖モ、耳科ヲ以テ專門トスルモノガ此期ニ起リタルコトハ明ナリ。

鼻科

耳・目・口・齒ハ古ヨリ專門ノ一科ヲ成シ、此間ニアリテ新ニ咽喉科ノ興レルモノアリト雖モ、鼻科ハ未ダ獨立スルニ至ラズ。本道ノ諸書中、鼻病ノ一門ヲ設ケタレドモ、擧グルトコロハ鼻淵・鼻痔・酒齄鼻・鼻不知香臭・鼻涕・鼻閉塞等ノ數症ニ止マリテ、ソノ證候ヲ論ジ、治方ヲ說クトコロモ亦詳ナラズ。

眼科

コノ期、馬島流眼科ニハ明眼院第二十一世圓海僧正アリ、眼科ノ術ニ秀デタルヲ以テ名アリ。明眼院ノ外ニ、大智坊ト稱シテ同ジク馬島流眼科ヲ標榜スルモノアリ。ソノ術ヲ傳フルノ書ニ、馬島流目藥祕書・眞島大智坊・祕書・馬島眼藥・眼目圖等數書アリ。

馬島ノ外、家里、笠原、井花、竹内、田原、楠原、石川(昌延)、東城(維鱗)、其他眼科專門ヲ以テ一家ヲ成スモノアリ。本道ノ醫家ニシテ眼病ノ治方ヲ論ズルモノモ亦尠カラズ。此時我ガ醫學ニハ復古ノ說盛ナリシガ故ニ、ソノ眼病ヲ論ズルニモ、古方ヲ取リ、享保十八年選述ノ玉泉流書傳集(選者未詳)ニハ素問・靈樞及ビ傷寒論ヲ引用シテ、古經方ノ說ヲ採リ、秋山宜修ノ銀海試要(安永五年撰)ニハ龍木眼論以來、眼病ニ七十二證ヲ別ツハ多岐望洋ノ憂アリト排斥シ、又苦寒生氣ヲ害シテ人ヲ誤マルモノ多ク、祕傳專門ノ論ハ陋劣ナリト嘲笑シ、眼病ハ內障・外障十八種ニ區別スルニテ足レリトナシ、實際ニ依リテソノ說ヲ立テ、原因ニヨリテ發症ヲ分チ、ソノ治方トシテハ內障等ニ對シテ針法ヲ施シタリ。

法醫學科

法醫學科

大寶ノ律令ニ定メラレタル條項ニシテ、ソノ實施ニ際シテ、今日吾人ガ所謂法醫學的知識ヲ必要トセルモノ尠カラズ、而カモソノ司獄ニ關スル醫官ノ制ナカリシヨリ考フレバ、醫學ハ此際ニハ應用セラレズ、從ツテ法醫學ノ研究ハ未ダソノ緒ニ就カザリシコトハ推知セラルベシ。鎌倉・室町兩時代ヲ經テ、江戸幕府

無寃錄

洗寃錄

平寃錄

時代ニ至ルマデ、各々刑法ノ制定アリテ、法醫學ノ必要ハ認メラレシモ、我邦ニ始メテ斯科ヲリシハ無寃錄ガ支那ヨリ輸入セラレタルヨリ以來ノコトナルベシ。

無寃錄ハ支那ノ元ノ武宗ノ至大元年(西曆一千三百八年ニ當ル)ニ王與ガ、コレヨリ先キ已ニ世ニ行ハレ居タル洗寃錄及ビ平寃錄ノ二書ヲ折衷シ、獄事檢驗ノ方則ヲ詳述シタルモノニシテ、粗鹵ナガラモ、法醫學書ノ體裁ヲ備ヘタルモノナリ。此書ノ我邦ニ入リタルハ何レノ時代ナルヤヲ詳ニセズト雖モ、明和五年ニ刊行セラレタル無寃錄述ノ跋ニ『斯邦鬻キニ無寃錄ト云ヘル書ヲ印行セリ、コレ元ノ王氏編輯スル所ニシテ、朝鮮國ノ諸學士音註ヲ加フル所ナリ、斯邦ニ飜刻セルハ何レノ年、何某刻セルト云フコト審ナラズ、且ツ版モ丙王ノ災ニ値ヒケルニヤ今ハ見ルコト鮮シ』トアリ。ソノ頃既ニ見ルコト鮮ナシト云ヘル刊行本ノ無寃錄ニハ正統三年(我ガ永享十年)ノ序文アリ、依リテ推考スルニ、斯書ノ我邦ニ入リシハ室町時代ノ末ナリシナラン、シカモ斯書ガ訓點ヲ施シテ飜刻セラレ廣ク世ニ行ハルルニ至リシハソレヨリモ遙カニ後ノコトナルベシ。

洗寃錄ハ宋惠父ノ編述スル所、平寃錄ハ趙逸齋ノ校訂セル所ニシテ、著作ノ年代ハ古ク宋時代ニアリト雖モ、ソノ我邦ニ入リシハ却テ兩書ヲ折衷シテ編述セルトコロノ無寃錄ニ後レタルモノノ如シ、殊ニ無寃錄ハ元文元年、泉州ノ河合尙久ガ、コレヲ鈔譯シテ、無寃錄述二卷トシテ梓行セシヨリシテ廣ク世ニ行ハレタリ。

無寃錄等ノ諸書ニ記述スルトコロハ獄ヲ斷スルニ方リテ、最モ必要トスルトコロノ檢屍ニ關スルトコロニシテ檢屍ハ一定ノ順序ヲ立テ、而シテ勒死(人ニ絞メ殺サレタルモノ)ト自縊トヲ鑑別シ、水ニ落チテ死シタルモノト、打殺シテ水中ニ投ジタルモノトヲ區別シ、又創傷ノ生前ニ生ゼルモノト、死後ニ生ゼルモノトヲ鑑

別スルコト等ヲ始トシテ、災死・頓死・中毒死等ニツキテ論述シタリ。

薬物科

一本堂薬選

薬物科

古方醫學興リテ痛快ノ議論ヲ立テテ從來ノ陋習ヲ破レルニ從ヒテ、藥物科モ亦、ソノ面目ヲ一新セシガ、ソノ先驅ヲナセルモノハ香川修庵ノ一本堂藥選ナリ。此書ハ神農本草、名醫別錄及ビ唐宋以來ノ本草書ニ銀スルモノアリ的實ニシテ施シ用ヒテ驗アルモノト、自家ノ常ニ試ミテ效アルモノト相符合スルモノヲ選ビテ、ソノ試效(主治)・撰修(製法及ビ鑑定)ヲ詳述シ、從來諸家ガ唱道セル氣味ノ說ヲ取ラズ、陳新ノ說ヲ用ヒズ、相反・相畏・相惡等ハ一時偶有ノ事ニシテ決定ノ說ニアラザルガ故ニ拘泥スベカラズト云ヒ、引經報使ノ說、升降浮沈陰陽ノ論ハ俱ニ近世醫家ノ空論ナリトシ、コレヲ實際ニ試ミテ效ヲ見ルモノニアラザレバ取ラズ、一本堂藥選正篇三卷中ニ載スルトコロノ藥品一百四十五種ニ過ギズ。元文年間、戸田旭山、非藥選ヲ著ハシテ香川氏ノ說ノ非ナルモノヲ擧ゲテ辯駁シタレドモ、陳新引經報使等ノ妄說ヲ排斥スルニ至リテハ大都其見ヲ同フセリ。吉益東洞ノ藥徵ハコレヲ藥選ニ比スレバ論說痛切ニシテ藥品ハ最モ實用ニ適スルモノ五十三種ヲ擧ゲ、ソノ主治ヲ論ジ、東洞ノ門人村井琴山、更ニ藥品一百一種ヲ擧ゲテ藥徵續篇ヲ著ハスニ至リテ其說大ニ備ハレリ。

鍼科

診科

古醫方ノ勃興ニ際シテ、ソノ影響ハ鍼科ニモ及ビテ、鍼法ノ復古ヲ說クモノアリ。攝津ノ人菅沼周桂ノ如キハ此派ノ代表者ニシテ、鍼灸則・鍼灸摘要、鍼灸治驗等ノ書ヲ著ハシタリ。其說ニ據レバ、鍼灸ニ切要ナル經穴ハ僅ニ七十穴ノミナリトシテ、經絡ヲ言ハズ、太陰・太陽ノ經ヲ別タズ、禁穴ヲ取ラズ、人神・行年・血忌ノ類ニハ一切拘泥セズ、ソノ用フルモノハ毫針ニシテ鍼ヲ用ヒテ之ヲ製シタリ。而シテ鍼ヲ用フルニ淺深ヲ豫定セズ、病症ノ輕重虛實ニヨリテ之ヲ取捨シ、ソノ說クトコロ、從來ノ諸家ニ異ナリ。コレヲ要スルニ、ソノ說虛妄ヲ捨テテ、確カニ明驗アルモノヲ採リテ以テ之ヲ施スヲ法則トセルナリ。

診科

支那醫方ノ診法ニ神・聖・工・巧ノ四知ノ術アリ。ソノ神トハ色ヲ望ミテ病ヲ知ルノ法ニシテ卽チ望診ナリ。聖トハ聲ヲ聞キテ病ヲ知ルノ法ニシテ卽チ聞診ナリ。工トハ證ヲ問フテ病ヲ知ルノ法ニシテ卽チ問診ナリ。巧トハ脈ヲ切シテ病ヲ知ルノ法ニシテ、卽チ觸診ナリ。コノ四診ノ法ハ素問・靈樞以下ノ諸書ニ敍述セラレタリト雖モ其說混淆シテ諸篇ニアリ、或ハ論述詳ナラザリシガ、後世、察病指南、診家樞要、診家正眼等ノ專書アリテ、診法ハ醫方ノ一科トナルニ至レリ。シカモ望・問・聽ノ三診法ハ漸ク廢頹シ、切脈ノ一法ノミ獨リ重要視セラレタリ。曲直瀨道三出デテ醫方ヲ復興セシトキ、醫家ハ四知ノ術ヲ詳

ニスルヲ要スト唱ヘ、古林見宜嗣デ起リテ四診ノ術ヲ講ゼザルベカラザルコトヲ說キタレドモ、其後診法ハ次第ニ紊亂シ、タダ脈ヲ切シ、舌ヲ望ムノミヲ用フルニ過ギザリキ。古醫方ノ興ルヤ、後藤艮山ハ四診ノ外ニ、按腹・候背ノ法ヲ加ヘ、其子椿庵ニ至リテ更ニ嗅法ヲ加ヘタリ。此頃、診科ノ專書ニ石原玄德ノ望聞則アリ、竹田公道ノ古訓診式アリ、四診ノ法ヲ明ニシタリ。然レドモ診科ノ學ガ精シク知ラルルニ至リシハ、香川修庵ガソノ著、一本堂行餘醫言ニ望形・問證・聞聲・按腹・視背ノ六法ヲ詳說シタルニ始マレリ。

殊ニ、古醫方ノ勃興ト共ニ盛ニ行ハレタルハ腹診ノ一法ナリキ。蓋シ腹ヲ按ジテ病ヲ診スルノ法ハ昔時支那ニ行ハレタレドモ、後其法ノ闕ゲタルコト久シ。我邦ニテモ天正・慶長ノ頃、竹田定加始メテ按腹ノ法ヲ唱ヘ、次デ北山道長アリテ診腹法ヲ著ハシ、竹田定快出デテ診腹精要ヲ公ニシ、更ニ後藤艮山アリテ最モ腹候ヲ重ンジタリ。後藤艮山ノ後ニ、堀井元仙アリ、淺井圖南アリ、高村良務アリ、香川修庵アリ、各々腹診ニツキテノ著述ヲ公ニシタリ。吉益東洞ニ至リテハ腹候ヲ重ンズルコト更ニ甚シク、疾病ヲ診スルニハ主ニ腹候ト外證トニヨルベシトマデ論ジタリ。從テソノ門人モ亦腹診ヲ重ンジ、瀨丘長珪ノ如キハ遂ニ腹診ヲ以テ一家ヲ成スニ至レリ。

瀨丘長珪像

瀨丘長珪、名ハ瓊、字ハ長珪、江戸ノ人、醫ヲ吉益東洞ニ學ビ、東方ノ一人ト稱セラル、惜哉其術未ダ大ニ行ハルルニ至ラズシテ、天明元年病ヲ以テ歿ス、年僅ニ四十九。

腹診ノ法ハ前ニモ言ヘル如ク、竹田定加以來、醫家ノ間ニ行ハレタレドモ、其法ハ極メテ簡略ナリシガ、瀨丘長珪出デテ專ラ力ヲ腹診ニ用ヒ、益々ソノ微旨ヲ闡發シテ、診極圖說ヲ著ハシ、コレニヨリテ腹診ノ法ハ大ニ備ハルニ至レリ。後稻葉文禮アリテ腹證奇覽ヲ著ハシ、又和久田意仲出デテ腹證奇覽翼ヲハスニ及ビテ、腹診ノ法殆ド餘蘊ナキニ至ル、皆長珪ヲ祖トナストイフ。

西洋醫學ノ輸入

西洋醫學ガ始メテ我邦ニ傳ハリシハ室町幕府ノ末ニシテ、織田豐臣二氏時代ニハ南蠻流外科アリ。德川氏初世ノ頃ニハ和蘭流外科アリ、西洋ノ醫方ハ是等流派ノ諸家ニヨリテ行ハレタレドモ、當時ハ譯司ト雖モ、自由ニ彼邦ノ書ヲ讀ムコトヲ得ザリシニヨリテ、唯彼醫人ノ爲ストコロヲ傍觀シ、ソノ話ストコロヲ聽キテ、主トシテ外療ノ術ヲ覺レルノミ。故ニソノ治方ハ傳膏、塗藥、以テ僅ニ金創、瘡瘍等ヲ療スルヲ常トシ、手術トシテハタダ小截開等ヲ施セルニ過ギザリキ。然ルニ寶曆ノ頃、前野良澤トイフモノアリ、吉益東洞ノ學ヲ奉ジテ、古醫方ヲ唱ヘ、醫ヲ以テ中津侯ニ仕ヘシガ、一日同藩ノ士某、蘭書ノ殘篇ヲ購ヒ來リテ良澤ニ示シ、コノ文字ヲ讀ミ別ケテ其意ヲ解クコトヲ得ベキヤト言フ。良澤コレヲ見テ慨

然トシテ以爲ラク、國異ニシテ言殊ナリト雖モ、彼モ我モ同ジク人ナレバ、彼ノ述作セシモノ、我ノ讀ミ得ザル理アランヤト、發憤シテソノ讀法ヲ得ントシ、幕府儒官青木昆陽ニ就キテ和蘭ノ言語ヲ學ビタリ。コレヨリ先キ、新井白石アリ、德川將軍綱吉ノ侍讀タリシガ、寶永五年羅馬ノ人ノ漂泊シテ薩摩ニ來タリ、言語侏儒缺舌ニシテ譯官モ通ズルコト能ハズト聞キ、召シテ江戸ニ致シ、事情ヲ審問シテソノ要領ヲ得タリ。乃チ此時、聞クトコロニ依リテ西洋紀聞・采覽異言ノ二書ヲ作リテコレヲ將軍ニ上リタリ。而カモ白石ハ自ラ能ク西洋ノ言語ヲ解セザリシナリ。八代將軍德川吉宗、天文ノ學ヲ好ミ、和蘭人ノ學術ニ精シキコトヲ知リ、且ツソノ書籍ヲ見テ圖畫ノ精緻ナルニ感ジ、儒官青木昆陽、醫官野呂元丈ノ二人ニ命ジテ蘭書ヲ講習セシム。是ニ於テ昆陽等ハ當時、每年參府シテ都下ニ滯留スル和蘭甲比丹ニ就テ、蘭語ヲ學ビ、稍〻其語ヲ知ルコトヲ得タリ。昆陽ハ後又、命ヲ奉ジテ長崎ニ赴キ、和蘭人及ビ譯司ニ就キテ蘭書ヲ學ビ、五百餘言ヲ傳習シテ江戸ニ歸リ、和蘭文字略考、和蘭語譯ヲ著ハシタリ。元丈ハ江戸ニ滯在セル和蘭醫官ニ就テ、本草ノコトヲ質シ、コレヲ筆錄シテ和蘭本草和解ヲ著ハシタリ。前野良澤ガ始メテ蘭書ノ譯詁ニ志シ、青木昆陽ニ就テ、ソノ學ノ一端ヲ窺ヒシハ明和六年ニシテ、ソノ齡四十七歲ノ時ナリキ。サレバ昆陽モソノ志ノ厚キニ感ジテ、蘊ヲ盡シテ知ルトコロノモノヲ傳ヘタリトイフ。良澤ハ次デ笈ヲ長崎ニ負テ吉雄・楢林等ノ譯司ニ就テ、敎ヲ受ケ、彼邦譯辭ノ書及ビ醫書數部ヲ購ヒテ江戸ニ歸リ、日夜手ヲ釋カズ、昆陽竝ニ長崎ノ譯司ヨリ傳ヱ得タルトコロノ六百餘言

ヲ據トシ、蘭人マーリンノ辭書ヲ取テ彼此校考シ、略ボ和蘭語譯讀ノ端緒ヲ成スコトヲ得タリ。

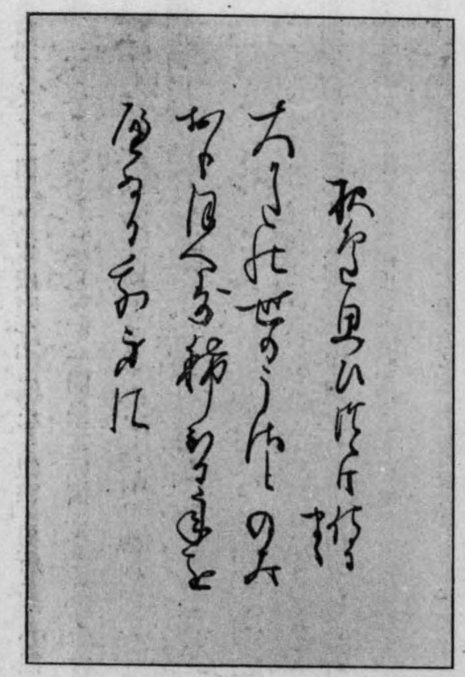
前野良澤、名ハ熹、字ハ子悅、樂山ト號セリ。家世々醫ヲ以テ中津侯ニ仕ヘテ二百石ヲ領セリ。幼キ頃ニ父母ヲ失ヒ、外舅淀侯醫員宮田全澤ニ養ハル、全澤性頗ル奇僻ニシテ其好惡スルトコロ常人ノ如クナラズ、ソノ良澤ヲ敎育スルヤ、亦常ニ異ナルトコロアリ、常ニ良澤ニ敎ヘテ曰ク、世ニ廢タルベシト思フ藝術ヲバ能ク學ビ置キテ後ノ世マデモ絕エザルコトヲ謀ルベシ、世ノ人ノ已ニ打棄テテナサスコトハ之ヲ取出シテ世ノ中ニ存シ置クコトヲツトムベシ、世ノ人ノ爲スコトヲノミナサバ一生涯空シク人ノ後ニ居ルモノナリ、苟モ男子タルモノハ必ズ一事ハ人ノナサスコトヲ創メテ以テ世ノ先導者タラムコトヲ心ニカクベシト。良澤幼ニシテソノ薰陶ヲ受ケ常ニ之ヲ以テ心ニ銘ス、ソノ所行亦常人臆度ノ外ニ出デ、遊藝ニテモ世ニ廢レタリシ鮹節ヲ學ビテソノ祕曲ヲ窮メ、猿若狂言ノ會ナドニモ臨ミテ之ヲ習ヒタリト云フ。年四十七ニシテ幕府儒官青木昆陽ニ就テ和蘭ノ言語ヲ學ブ、昆陽亦ソノ意ノ厚キニ感ジテ記憶スルトコロノ五百餘言ヲ誦セシメ、且ツ自著ノ和蘭文字略考ヲ與ヘテ講讀ノ法ヲモ授ケタリト云フ。明和七年良澤ハ藩侯ニ從テ中津ニ赴ムクニ際シ暇ヲ得テ長崎ニ遊學セントヒフ、藩侯賢明ニシテ此學ノ有益ナルコトヲ知リ、且ツ深ク良澤ヲ信ズルトコロアリ、直チニ其請ヲ許シ、且ツ諭シテ曰ク、汝今和蘭ノ學ニ從事セントス、其志甚ダ善シ、然レドモ凡ソ事ハ兩途ニ涉ルベカラズ、汝其志ヲ遂ゲントセバ醫業ヲ廢シテ心ヲ此ニ專ニスベシ、予必ズ汝ガ志ヲ助クベシト、良澤感泣シテ退キ、直ニ旅裝ヲ調ヘテ長崎ニ至リ、譯司吉雄・楢林等ニ就テ學ビ、昆陽ヨリ受ケタル五百餘言ノ外ニ又二百餘言ヲ記スルヲ得タリ。越エテ明和八年三月四日、小塚原ノ刑場ニテ罪囚ノ觀臟ノ擧アリ、杉田玄白等共ニ往キテ之ヲ觀ル、兩人共ニ和蘭ノ解剖圖譜ヲ携ヘ來リテ觀臟ノ場ニ臨ミ、ソノ圖ヲ以テ之ヲ目擊スルトコロニ比スルニ一々吻合シテ

解体新書

前野蘭化自畫像

毫厘ノ差アルコトナシ、是ニ於テ益〻和蘭ノ學説ノ信ズベク、漢説ノ疎漏ナルコトヲ知リ歸路ニ立・白等ト共ニ其書ヲ飜譯スルコトヲ協議シ、翌日ヨリ直チニ同志ヲ自宅ニ會シ、自カラ盟主トナリ、杉田玄白、中川淳庵、桂川甫周等ト共ニ飜譯ノ業ニ從事シ、歳ヲ閲スルコト四年ニシテ其業始メテ成ル、解體新書コレナリ。良澤已ニ千載ノ鴻業ヲ成シ且ツ此學ノ筌蹄トナルベキ和蘭譯文略、蘭譯筌、助語參考等ヲ著述シ、盛名四方ニ弘マリ、欽仰ノ人爭フテ其門ニ入リタリ。中川淳庵・桂川甫周・源昌綱・嶺春泰・石川玄常・桐山正哲・大槻玄澤・宇田川玄隨・司馬江漢等ハ其選ナリ。然ルニ良澤ハ此學ヲ以テ終身ノ業トナシ、世間浮華ノ交ヲナサズ、天性多病

ナリト稱シテ常ニ戸ヲ閉ヂテ外ニ出デズ、心ヲ此學ニ潛ムルコト終始一日ノ如クナリキ。中津侯、良澤ヲ歎稱シテ戲ニ和蘭ノ化物ナリトイハレシニヨリテ自カラ蘭化ト號セリ。晩年退隱シテ居宅ヲ根岸貝塚ニ築キシガ、病起ルニ及ビテ女甥小島春庵ノ家ニ移リ、遂ニ歿セリ、享年八十又一、時ニ享和三年十月十七日ナリ。其墓ハ下谷池端慶安寺ニアリシガ、明治年間、市外堀ノ内ニ移轉シタリ。良澤柏木氏ヲ娶リテ一男二女アリ、男名ハ達、字ハ子通、良庵ト號ス、先ヅ歿ス、長女ハ未ダ算セズシテ歿ス、次女ハ小島春庵ニ適ケリ、良庵ノ子悅右衞門、ソノ子顒庵、ソノ子亦顒庵ト稱ス、顒庵ノ子良伯、良伯ノ子直久大正九年歿ス。



前野蘭化遺墨

小塚原觀藏

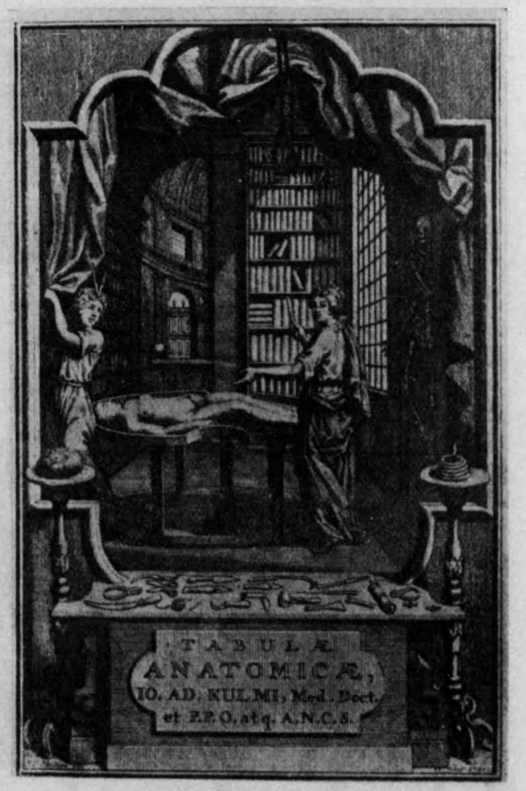
天其道ヲ開カントシテ人其時ニ遇フ、時ナルカナ、明和八年ノ三月四日、千住小塚原ニ腑分ケノ擧アリ、杉田玄白ハ前野良澤、中川淳庵等ヲ誘フテ共ニ行キテ之ヲ觀ル。此時、良澤ハ一冊ノ蘭書ヲ懷ヨリ出シ、披キ示シテ曰ク、『コレハ**ターヘル、アナトミア**トテ和蘭解剖ノ書ナリ、先年長崎ニ於テ之ヲ購ヒ求メタリ』トイフ。玄白モ亦、近日手ニ入リタル解剖書アリトテ、披キ見ルニ、同書同版ナリ、コレハ誠ニ奇遇ナリトテ一同手ヲ拍テ感嘆セリ。既ニシテ觀臓ノ場所ニ到リ、觀ルトコロヲ以テ之ヲ和蘭解剖圖ニ照スニ、復タ小差ナシ、是ニ於テ、一同ハ大ニ感憤スルトコロアリ、實驗ニ據リテ譯書ヲ作リ、以テ世人ヲ警醒セントシ、良澤ヲ以テ盟主トナシ、ソノ翌日ヨリ鐵砲洲ナル良澤ノ宅ニ會合シ、ココニ始メテ和蘭解剖圖譜ノ飜譯ニ著手シタリ。

解體新書

和蘭解剖圖譜飜譯ノ擧ハ前野良澤ヲ盟主トシテ、杉田玄白、中川淳庵、桂川甫周、嶺春泰、石川玄常、桐山正哲ノ諸氏ソノ同盟員トナリ、毎月數回、日ヲ定メテ相會シテ原書ノ文意ヲ考定シタリ。然レドモ此時、蘭語ヲ解セシハ前野良澤一人ノミ、良澤トテモ僅々六七百バカリノ和蘭單語ヲ暗記セルニ過ギズ、和蘭解剖圖譜ニ對シテハ恰モ異邦ニ漂泊シテ東西ヲ辨セズ、暗夜ヲ獨行スルガ如クナリキ。而カモ良澤、玄白等同人ハ忖度臆測、一行ノ文義ヲ解スルニ數日ノ精神ヲ費シ、尚ホ且

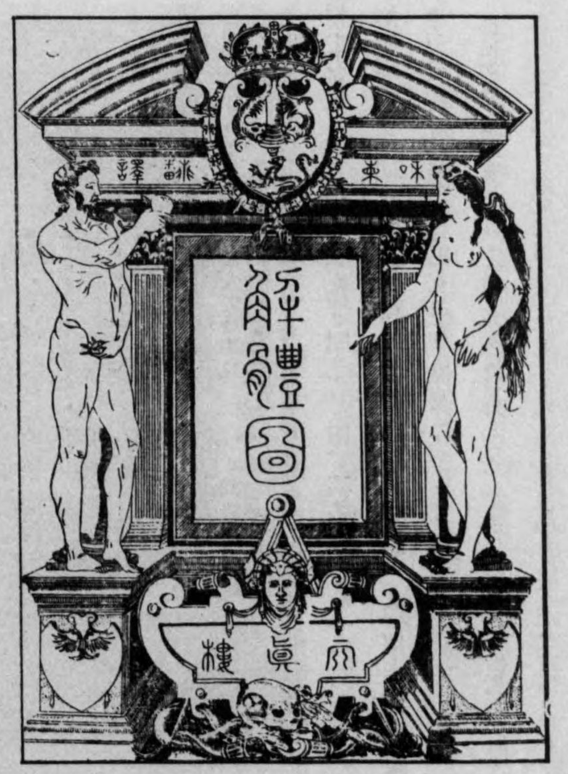
玄白ハ乃チ筆ヲ執テ稿ヲ起シ、歳ヲ閲スルコト四、稿ヲ易ユルコト十一回ニシテ其書始メテ成ル。名ヅケテ解體新書トイフ。我邦ニ西洋醫方ノ傳ハリテヨリ二百年、人ノ望ミテ而シテ未ダ企テ及バザリシトコロノモノ、今、前野良澤、杉田玄白等ノ偉業ニヨリテコレヲ得タリ。

杉田玄白、名ハ翼、字ハ子鳳、九幸又鶴齋ト號ス、家系ハ近江源氏ニ出ヅ、始メ間宮ト稱セシモ數世ノ祖某移リテ武藏國久良岐郡杉田ノ里ニ居リシヨリ姓ヲ改メ杉田トセリト云フ。父甫仙ハ和蘭流外科ニ精シク、若州酒



クルムス解剖圖譜扉

ツ解スベカラザルコトアルモ毫モ其志ヲ屈セズ。居ルコト歳餘ニシテ一日十行ヲ譯スルコトヲ得ルニ至リタリ。



解體新書扉

井侯ニ仕ヘテ祿二百五十石ヲ領シ、母ハ蓬田某ノ女、玄白ヲ江戸ノ邸ニ生ム、娩產頗ル難ク、玄白誕ルルヤ母氏ハ遂ニ絕命ス、傍人皆產婦ノ暈倒ヲ救ハムトシテ初生兒ノ事ニ及バズ、既ニ死セルナラントシテ褥側ニ置ク、後之ヲ顧ミルニ尚ホ命脈ヲ存セシヲ以テ、哺乳育養シテ漸ク生長スルニ至レリ、年甫メテ十七八歲ノ頃、幕府醫官西玄哲ニ就テ外科ヲ學ビ、又宮瀨龍門ニ從テ經史ヲ講シ、業大ニ進ム、齡二十五歲ニシテ俸五口ヲ賜フ、三十七歲ノ時父甫仙歿セシヨリ居ヲ新大橋ノ中邸ニ移シ、次デ蘭學創始ノ擧アリ。是ヨリ先キ、玄白年二十二ノ時、同僚小杉玄適ノ京都ヨリ歸ルニ遇ヒ、山脇東

杉田玄白像

洋、吉益東洞等ノ諸家京師ニアリテ古醫道ヲ唱フルヲ聞キ、憤然トシテ我ガ醫學ノ舊染ヲ洗ヒ、面目ヲ改メザルベカラザルコトヲ信ジ、前野良澤ト共ニ蘭館ヲ訪ヒ蘭醫バブル及譯司西・吉雄等ニ親炙シ、益〻和蘭醫方ノ精緻ナルコトヲ知ル、偶々明和八年三月四日一婦人ノ屍ヲ小塚原ニ解キ視ルニ及ビテ、遂ニ醫學ノ眞理ハ和蘭ニアルコトヲ信ジ、前野良澤等ト相謀リテ一社ヲ興シ、中川淳庵、桂川甫周、石川玄常、桐山正哲

ノ諸家ト共ニクルムスノ解剖圖譜ヲ飜譯スルコトニ著手シ、譯ヲ得ルヤ直チニ筆ヲ執リテ稿ヲ起シ、年ヲ經ルコト四年、稿ヲ易ユルコト十一回、安永三年秋八月ニ至リテ解體新書四卷トシテ之ヲ刊行シ世人ヲシテ始メテ和蘭醫學ノ眞相ヲ知ラシメタリ。玄白又家學ヲ全備セントスルノ志アリ、漢土ノ醫書中ヨリ外科ニ係ル確言ヲ抄出シ輯メテ瘍家大成ヲ成セリ。玄白著ストコロ、別ニ蘭學事始、形影夜話、狂醫之辯、野叟獨語等アリ。文化十四年四月、年八十五ニシテ歿ス。

解體新書既ニ成リタレドモ未ダコレヲ世ニ公ニスルニ至ラズ蓋シ是ヨリ先キ、後藤梨春紅毛談ヲ著ハシテコレヲ上梓セシニ、其内ニ西洋ノ「アルファベット」ヲ載セシヲ以テソノ梓ヲ毀タシメラレタリ。杉田玄白ハ先ツ此書ヲ幕府ニ上リ以テ嫌疑ヲ避ケントシ、法眼桂川甫三ニ依テ一部ヲ圖奥ニ上ツリ、別ニ老中ニ一部ヲ呈ス、又ソノ從弟吉村辰碩ニ托シテコレヲ九條關白、近衞准后、廣橋亞相ニ上ル、各々和歌ヲ賜フテ之ヲ賞セラレタリ。ココニ於テ遂ニ此書ヲ天下ニ公ニスルニ至レリ。時ニ安永三年甲午ノ仲秋ナリ。解體新書ノ一タビ世ニ傳ハルヤ、天下ノ士始メテ西洋ノ國ニコノ究理實測ノ學アリテ、ソノ治術ノ妙自カラ此間ニ度越スルコトヲ知リ、頴悟特達ノ士、雲霞ノ如ク都下ニ集マリ、皆杉田玄白ト前野良澤トノ門下ニ在リテ益〻斯學ノ開發ニ力メタリ。中ニツキテ中川淳庵、桂川甫周、源昌綱、嶺春泰、石川玄常、桐山正哲、大槻玄澤、宇田川玄隨、森島甫齋、司馬江漢等ハ其選ナリ。是等ノ諸家互ニ和蘭ノ書籍ヲ譯讀シ、醫書ヲ始メトシテ天文・星象・技術等ノ書ニ及ビ、遂ニ所謂蘭學ノ一

派ヲ成スニ至レリ。

解剖學

德川氏ノ中世、古醫方ノ盛ニ唱道セラレ、親試實驗ガ重ンゼラレシ時ニ方リテ、京都ニ山脇東洋アリ、後藤艮山ノ門ニ出デテ、香川修庵、吉益東洞ト併セテ古醫方ノ泰斗ト稱セラレシガ、唐後諸家ノ所說ノ荒誕無稽ナルヲ覺トリテ、第一ニ古來ノ内景說ニ疑ヲ容ルルトコロアリ、獺ヲ解テ、ソノ臟腑ヲ實視シ、遂ニ進ンデ刑屍ヲ剖觀シ、實地ニ就テ、ソノ眞ヲ觀、明カニ舊說ノ妄ヲ辯ズルコトヲ得テ、藏志ヲ著ハシ、以テ千古ノ冥蒙ヲ發キタリ。玆ニ於テカ、我邦、始メテ實驗ニ據リタル解剖學アリ。

按ズルニ、支那ノ古醫書、靈樞ニ『其死、可ニ解剖而視ヲ之』ノ語アリ。漢書王莽ガ傳ニ翟義ノ黨王孫慶ヲ誅シ、大醫尙方ト巧屠トヲシテ共ニ之ヲ刳剝セシメ、五度ヲ量度セルコトヲ記載シ、文獻通考ニ楊介ノ存眞圖一卷ヲ揭ゲタリ。又崇寧年間賊ヲ市ニ刑セシトキ、郡守李夷行、醫竝ビニ畫工ヲシテ親シクソノ屍ヲ解キテ實景ヲ圖セシメ、楊介コレヲ古書ニ比較セルニ、少シモ異ナルコトナカリシトイヒ、其他、歐希範五藏圖アリ、何一陽ノ解屍アリト傳フ。ソノ我邦ニ傳ハリシモノニ華陀内照圖ト題スルモノアリ、景岳内照圖ト題スルモノアリ。鎌倉時代、梶原性全ノ頓醫抄及ビ萬安方ノ中ニモ、内景圖說ヲ揭ゲタリ。(或ハ歐希範ノ解剖圖ヲ傳フルモノカ)。德川氏ノ時代ニ至リテ、享保年間、服部玄黃、

内景圖說ヲ著ハシテ華陀及ビ景岳ノ内景圖ヲ訂正シ、自カラ新圖ヲ造リテ一家ノ說ヲ成スモノアリト雖モ、シカモソノ說ハ揣摩臆測ニ出デ、固ヨリ依據スルニ足ラザルモノナリキ。山脇東洋ガ刑屍ヲ解剖セシハ寶曆四年ノ二月七日ニシテ、若狹候醫官小杉玄適等ト共ニ、ソノ事ニ當タリシガ、ソノ目的、主トシテ胸腹ヲ刳剝シテ以テ之ヲ古經九藏ノ目ニ徵セントスルニアリシヲ以テ、解剖說トシテハ粗鹵單簡ノモノナリシガ、寶曆九年ニソノ解剖紀事トシテ公ニセラレタル藏志ハ、從來ノ頑迷ヲ排斥シ、當時ノ醫家ヲシテソノ志ヲ先物實試ニ向ケシメタルノ功ハ爭フベカラザルナリ。

山脇東洋ノ藏志ハ固ヨリ一刑屍ヲ解視シタル記事ニ過ギズ、シカモ圖スルトコロハ剝胸腹圖、九藏前面圖、九藏背面圖、脊骨側面圖ノ四個ニ過ギズ、說明スルトコロモ亦、極メテ簡單ナリキ。シカモ『嚮者、獲ニ蠻人所ヲ作骨節剛剝之書、當時碌々不レ辨、今視レ之、胸脊諸藏、皆如ニ其所ヲ圖、履レ實者、萬里同レ符、敢不ニ嘆服』ト云ヘルヲ見レバ、當時、ソノ解視ノ實際ヲ西洋ノ解剖圖ニ參照セシコトハ明ナリ。タダ未ダソノ文字ヲ讀ムコトヲ得ザリシガタメニ、所說深遽ナルコトヲ得ザリシハ已ムヲ得ザルコトナラム。

山脇東洋、名ハ尙德、字ハ玄飛又子樹、初メ移山ト號シ、後東洋ト改ム、本姓ハ淸水氏、出デテ醫官法眼山脇玄修ノ家ヲ嗣グ、因リテ山脇氏ヲ稱ス、山脇氏ハ本ト橘姓ニ出ヅ、玄修ノ父玄心、醫ヲ延壽院玄朔ニ學ビ、東福門院ノ侍醫トナリ、法印ニ敍セラレ、養壽院ノ號ヲ賜ハル、延寶六年歿ス、玄修家ヲ嗣ギ、次デソノ祿

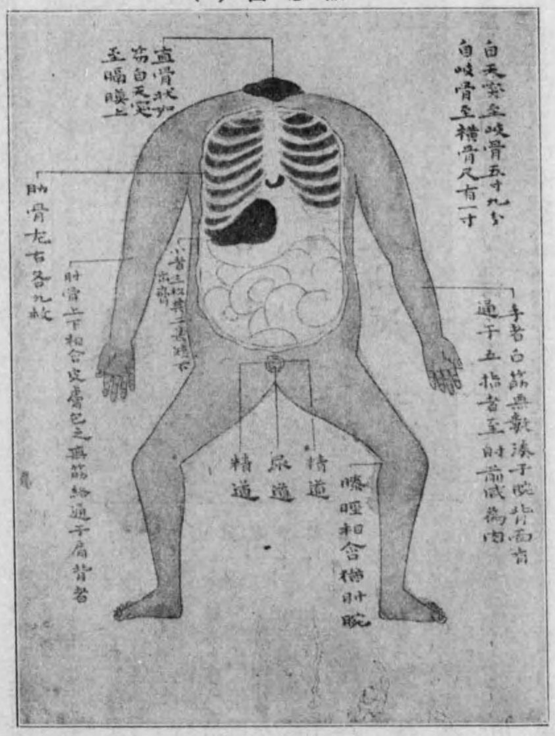
ヲ襲ヒ、法眼ニ敍セラル。東洋ノ父東軒ハ丹波亀山ノ人、遷テ京都ニ居リ、醫ヲ山脇玄修ニ學ビ、駒井氏ヲ娶テ二子ヲ產ム、長ハ卽チ東洋ナリ、東洋幼ニシテ頴敏、句讀ヲ渡邊蔑谷ニ受ク、年十三ニシテ能ク文ヲ屬シ、好ク修辭ヲナシ、又始メテ醫ヲ學ビテ、玄修ニ朝夕シ、大ニ奇愛セラル。年十八ノ時、父東軒歿ス、玄修老テ子ナシ、享保丙午ノ歲、東洋ヲ養テ嗣トナス。明年丁未七月玄修亦歿ス、翌月其業ヲ嗣グ、時ニ年二十三。東洋、後藤艮山ニ就テ醫方ヲ修メ、香川修庵・吉益東洞ノ諸家ト共ニ張仲景ヲ宗トシ、久シク廢シテ世ニ用ヒラレザリシ傷寒論、金匱要略ヲ爛讀シ、一二千年來ノ空論ヲ看破シ、專ラ古醫方ヲ唱道シ、後藤・香川・吉益諸家ト併セテ古方ノ四大家ト稱セラル。

山脇東洋像

寶曆甲戌ノ歲閏二月七日刑ヲ西郊ニ行フアリ、若狹候ノ侍醫某等、屍ヲ官ニ請テ獄中ニ就テ之ヲ解ク、東洋就テ其眞ヲ觀テ舊說ノ妄ヲ辨シ、コレガ圖志ヲ作リテ名ヅケテ藏志ト云フ。是ヨリ先キ、長門藩姦賊ヲ城中ニ獲ルアリ、侍醫請テ之ヲ剖剝シ、畫工ヲシテ圖セシム、然レドモ其圖祕シテ世ニ出サズ、故ニ觀藏ノ圖志ハ實ニ東洋ノ藏志ヲ以テ嚆矢トス、殊ニ其千古ノ迷蒙ヲ撥シ、濟生ノ標準ヲ揭ゲテ先物實試ノ重ンズベキヲ知ラシメタルハ則チ東洋ノ效績タ

ルコト不偉ナリト云フベシ。東洋ノ名、既ニ海内ニ滿チ、四方ノ士來タリ學ブモノ數百人、東洋教ヘテ倦マズ、門徒益〻進ム。寶暦十二年八月六日、東洋、鷹司右府ノ病ヲ療スルタメニ其殿ニ宿シ、夜ニ至リテ病俄ニ發シ、翌七日輿シテ家ニ歸リ、一日ヲ越エテ遂ニ歿ス、享年五十八。深草山霞谷眞宗院先塋ノ側ニ葬ムル。東洋六男一女アリ、元配鶴、侃及ビ女一人ヲ產ミ、次配龜、松ヲ生ミ、妾格ト周トヲ生ム鶴、松、周竝ニ早ク歿ス。侃字ハ仲陶、東門ト號ス、東洋歿スルノ後、ソノ祿ヲ襲フ。東洋著ストコロ藏志ノ外ニ養壽院醫則一卷及ビ文集若干卷アリ。

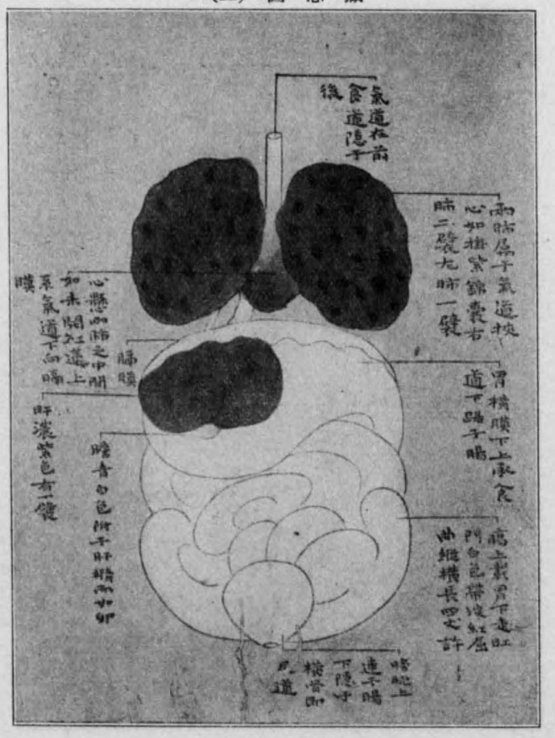
藏志圖（一）



剖胸腹圖

藏志ノ當時、西洋ノ文字ヲ讀ムコト能ハザリシニ異ナリテ、解體新書ハ直チニ和蘭ノ解剖書ヲ譯解セルモノニシテ、主ニキュルムスノ解剖圖譜ヲ譯述シタルモノナレドモ、ブランカーツ、ウエスリングス、バルフィン、カスパリユス、コイテル等ノ諸家ノ解剖學書ヲ參酌シタルモノナレバ、ソノ說精詳ニシテ、人身內景ノ實測ハコレニ依リテ始メテ闡明セラレタルナリ。然レドモ、西洋解剖學書ノ飜譯ハマコトニ破天荒ノ偉業ニシテ、從來諸家建ツルトコロノ人身ノ諸器、命名ノ義、ソノ據ルトコロ、コレラ實測、定ムルトコロノ名稱ニ較レバ大異小同ニシテ、多クハ相當ラズ、且ツ內景ノ

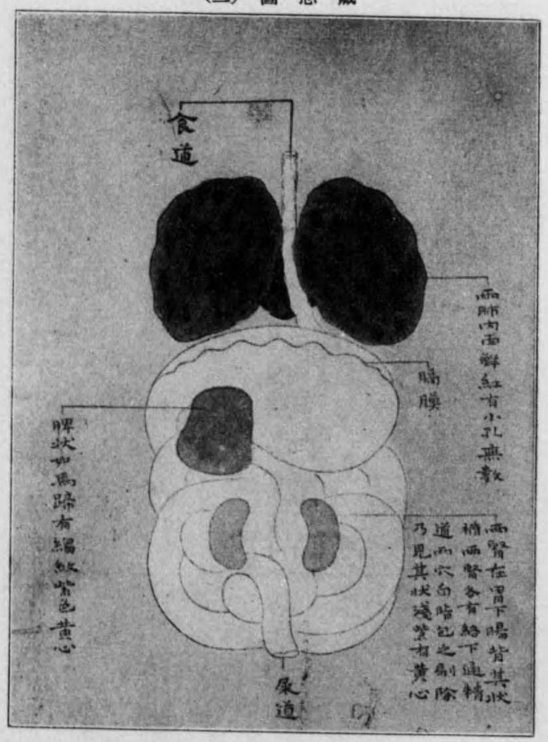
藏志圖（二）



九藏前面圖

名物ニシテ、支那醫書ニ說カザルトコロハ直チニ漢名ヲ以テ譯スベカラザルモノアリ。新譯ノ困難ナルコトハ、實ニ今日吾人ガ想像スルトコロノ外ニアリ。一例ヲ擧ゲテ言ヘバ、機里爾(キリール)(淋巴腺)ノ所在ヲ審ニシ、神經ノ視聽言動ヲ主ドルコト等ハ支那及ビ我邦醫家ノ從來未ダ說カザリシトコロニシテ、諸筋ノ集會スルトコロ及ビ脈道ノ循ルトコロヲ審ニスル等ハ支那醫家ノ說キタルトコロニ異ナリ。コレヨリ以前、和蘭ノ醫說ヲ傳ヘタルモノニ「セーニュ」ノ說アリ、手足九竅ノ運動ヲ司ドルコトヲ明ニシ、又髓筋(「子ルボ」)ノ說アリテ、總身ノ動クコトヲ覺ユルコトヲ論ジタレドモ、解體新書ニコレヲ神經

藏志圖(三)

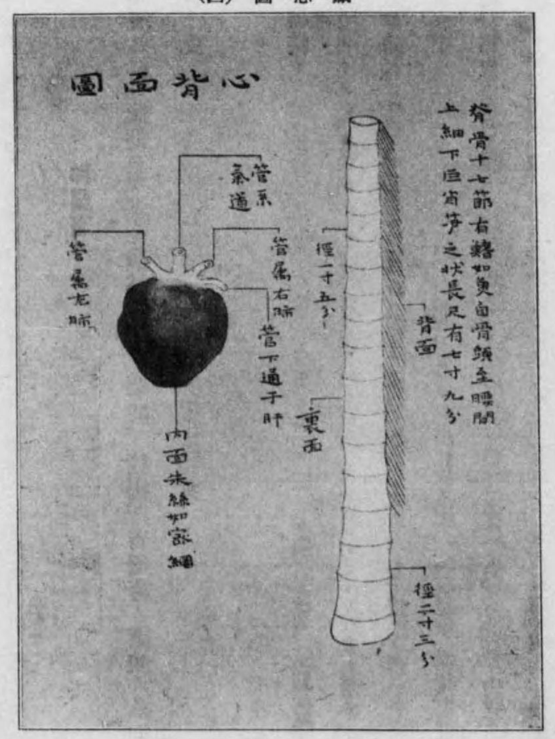


九藏背面圖

ト新譯シ、知覺運動ヲ主宰スルモノナルコトヲ說キテヨリ、ソノ理始メテ明ナルヲ得タリ。

按ズルニ、杉田玄白等ガ小塚原ノ腑分ヲ觀タル年ニ先ダツコト、明和七年、河口信任、ソノ師荻野元凱ト共ニ刑者ノ屍ヲ解キ、コレヲ西洋ノ解剖圖ニ對照シ、始メテ西洋ノ解剖圖說ノ正確ナルコトヲ確證シ解屍編一卷ヲ著ハシ明和九年コレヲ刊行シタリ。スナハチ解體新書ノ刊行ニ先ダツコト三年、山脇東洋ノ藏志ニ後ルコト十四年ナリ。

藏志圖(四)



脊骨側面圖

和蘭流外科

吉雄流外科

同時、和蘭全軀內外分合圖アリ、長崎ノ譯司本木丁意ガ和蘭ノ解剖書ヲ寫シテ、コレニ譯字ヲ附シタルモノニシテ、明和九年ノ刊行ニ係レリ。

和蘭流外科

和蘭流外科ハ此期ニ至リテモ楢林、西、栗崎、桂川、吉田等ノ諸流ノ前期ヨリ續キテ行ハレタルアリシガ、此期ニ至リテ更ニ吉雄流ノ一派アリテ新ニ興レリ。

吉雄流外科

吉雄耕牛、名ハ永章、俗稱幸左衛門、後名ヲ幸作（一ニ幸朔）ト改ム、長崎ノ譯司タリ。ブレンキノ外科書ヲ讀ミテ外科ノ伎ニ精シク、又蕃醫ニ就テ疑ヲ質シ、大ニ得ルトコロアリ、其名當時ニ高シ。門下ノ籍ニアルモノ六百餘人ニ及ブ。前野蘭化ノ長崎ニ遊ビテ蘭語ヲ學バントスルヤ、先ヅ耕牛ノ門ニ入レリ。明和ノ初年、和蘭貢使ニ陪シテ江戸ニ至ルヤ、杉田玄白亦コレニ從テ外科ノ術ヲ學ブ。蓋シ從來、和蘭流外科ヲ以テ家ヲ成スモノ長崎譯司中ニ多シト雖モ、彼邦ノ書ヲ讀ミ、其方法ヲ直チニ蘭醫ニ質シ、其術ヲ研究セシモノハ實ニ永章ニ始マルト云フ。晩年通詞ノ職ヲ辭シ、薙髮シテ耕牛ト號ス。寛政十二年八月病デ歿ス、年七十七。其子如淵、通稱權之助、父ノ業ヲ受ケテ亦時ニ名アリ。耕牛著ハス所、紅毛祕事記、吉雄流外科等ノ他ニ因液發備二卷アリ、小便ノ檢査法ヲ敍述セルモノニシテ、全ク西洋ノ說ニ出ヅ。我ガ醫學ノ診法ニ小便ノ檢査ヲ加ヘシハ此ヲ以テ嚆矢トス。

西流外科

桂川流外科

吉雄耕牛像

西流外科

西玄哲、名ハ規弘、延享四年召サレテ幕府醫官トナリ、俸二百苞ヲ賜フ。後奥外科ニ轉ジ、寶曆十年二月、年八十ニシテ歿ス。玄哲著ハストコロ金瘡跌撲療治之書アリ。大都アンブロアズ、パレーノ外科書ニ據リ、身體各部ノ創傷、骨折、脫臼等ノ手術ノ方法ヲ擧ゲ、多數ノ圖畫ヲ插シテ和蘭外科ノ大要ヲ示セリ。

桂川流外科

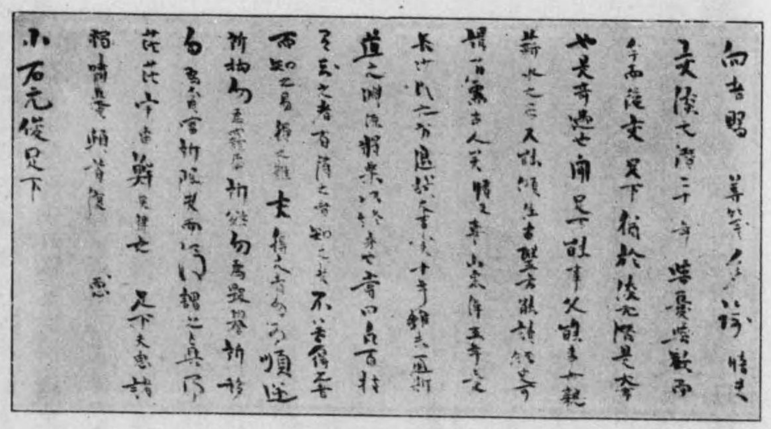
桂川國訓、通稱甫三、父ヲ國華トイヒ、祖父ヲ邦教トイフ。邦教ハ甫筑ト稱シ、桂川氏ノ祖タリ。元祿年間召サレテ幕府醫官トナリ延享四年歿ス。國華其業ヲ受ケテ寛保元年法眼ニ敍セラレ、仙鼎方ヲ著ハス。安永十年歿ス。國訓父祖ノ業ヲ嗣ギ、外科ヲ以テ名アリ。明和三年十二月法眼ニ敍セラレ、天明三年、五十六歳ニシテ歿ス。國訓著ハストコロ瘍府七卷、外科方藪九卷アリ。ソノ瘍府ノ書ハ支那ノ方書百餘部ヨリ瘡瘍ニ關スル記述ヲ摘錄シ、考證甚ダ力メタルモノナリ。

吐法

支那醫學ノ治療ノ方法ハ藥物・鍼灸・傳膏・導引ノ數種ニテ、就中、藥物ヲ用ヒテ治療スルノ方法ニハ古代ニアリテ汗・吐・下ノ三法アリ。周漢ノ代ヨリ隋唐ノ世ニ及ビ、張仲景善ク之ヲ用ヒシガ、宋以降服餌ノ說盛ナルニ至リテ、汗・吐・下ノ三法ハ漸ク衰ヘ、後世溫補ノ說行ハレテ、殆ド和ノ一法ノミヲ主トスルニ至レリ。金ノ張子和ソノ廢絕セルヲ興シタレドモ、後コレヲ繼グモノナク、ソノ弊延テ我邦ニ及ベリ。此期ニ後藤艮山、香川修庵、山脇東洋、吉益東洞ノ諸家出デテ溫補ヲ主トスルノ說ヲ非トシ、大黃・石膏・巴豆・柴胡等ノ寒藥ヲ用ヒテ汗・下ノ方法ヲ再興シタレドモ、未ダ吐方ニ及バズ。我ガ邦ノ治療ノ術ニ吐方アルハ實ニ奧村良竹ニ始マル。

奧村良竹像

奧村良竹、名ハ直、南山ト號ス。其先ハ加賀ノ人、仇ヲ避ケテ越前ニ來タリ、府中ニ住ス。父某氏ヲ娶リ、貞享元年良竹ヲ松森村ニ生ム。良竹幼ニシテ穎異、年十三山崎良伯ニ就テ醫ヲ學ビ居ルコト四五年、去テ大阪ニ赴キ、豪商某ガ家ヲ主トス。八年ノ後、鄕ニ歸リ、山崎良伯ノ業ヲ嗣グ。良伯歿スルニ方リテ家ヲ出デテ別ニ居ル。府中侯良竹ノ器ヲ愛シ、爲ニ之ヲ祿セントス、良竹始メ固辭シタレドモ遂ニ父ノ意ニ從フテ其命ヲ拜ス。府中侯ノ女岩倉源公ニ適ク、良竹從テ京師ニ入リ、伊



永富獨嘯庵遺墨

藤東涯、並河天民、後藤艮山、松岡恕庵等ト交ル。既ニシテ鄕國ニ歸リ、治效益〻著シク、名聲遠施、四方ヨリ來タリ學ブモノ、診ヲ乞フモノ日ニ頗ル多シ。寶曆丁巳ノ九月三日病デ歿ス。年七十五。

奧村良竹ノ吐方ハ其書ノ傳フルモノナキガ故ニソノ方ト法ト共ニ之ヲ概見スベカラズ、シカレドモ門人ニシテ、其法ヲ傳ヘテ之ヲ恢弘セルモノニ永富獨嘯庵、山脇東門、荻野元凱、田中必大等アリ。ソノ說クコトハ、疾病ハ人身ノ鬱スルモノニシテ、百病ノ多キモソノ鬱ヲナスハ一ナリ、ソノ土ニ處ルモノハ吐シテ之ヲ宣スベシトスルニアリ、新症ニシテ病者ノ未ダ虛脫セザルモノニ之ヲ用フベシトス。而シテ催吐ノ劑トシテ主ニ用ヒラレタルモノハ瓜蔕、藜蘆、常山等ナリキ。

永富獨嘯庵、名ハ鳳、字ハ朝陽、長門豐浦ノ人、

本姓勝原、出デテ馬關ノ醫永富友庵ノ嗣トナル、年年十三萩ニ遊ビ、醫方ヲ井上某ニ經書ヲ山縣周南ニ學ブ、年十七ニシテ京都ニ出デ、山脇東洋ニ從ヒテ醫方ヲ修ム。年二十一、東洋ノ子山脇東門ト共ニ越前ニ赴キ、奥村良竹ニ就テ吐方ヲ受ク。獨嘯庵倜儻奇偉ニシテ、ソノ行フ所常ニ人ノ意表ニ出ヅ、諸侯屢ゝ辟スレドモ應ゼズ、年二十九家ヲ出デテ足跡諸州ニ遍シ、後來タリテ大阪ニ住ス、明和八年三月五日病デ大阪ニ歿ス、年僅ニ三十五、著ハス所漫遊雜記、吐方考、微瘡口訣、囊語等アリ。

萩野元凱、字ハ子原、台州ト號ス、金澤ノ人、醫ヲ以テ名アリ、朝ニ仕ヘテ、左衞門尉トナル、寛政ノ初、皇子ノ脈ヲ候ヒ、典藥大允ニ拜ス、御醫皆僧官ヲ以テ進ム、此命降ルニ及ビテ時論之ヲ榮トス、九年德川幕府召シテ江戸ニ抵ラシム、命アリテ躋壽館ニ瘟疫論ヲ講ズ、明年再ビ皇子ノ疾ニ侍シ、功ヲ以テ尙藥ニ任シ、河内守ニ敍セラル、文化三年四月歿ス、年七十。著ハストコロ吐法編、刺絡編、瘟疫餘論等アリ。

萩野元凱遺墨

永富獨嘯庵、山脇東洋、萩野元凱等ト、時ヲ同フシテ、安藝ニ惠美三白アリ、亦古醫方ヲ以テ家ヲ成シ、佛書ノ說ニ『四百四種病、以ニ宿食一爲ニ根本一』トアルニ基ヅキ、又南海寄歸傳ニ載スル所、

斷食シテ病ヲ療スルノ法ニ依リ、百病ハ飲食ニ依ルコト最モ多ク、而シテ吐ノ一法ハ病ヲ除クノ捷徑タルコトヲ說キ、專ラ吐法ヲ講ジ、其名大ニ世ニ著ハル。其子大笑、亦吐方ヲ以テ名アリ。關西ニ吐方ノ興リシハ惠美三白父子ノ力多キニ居ル。

惠美三白、名ハ貞榮、字ハ子軒、寧固ト號ス、本姓堤氏、幼ニシテ父母ヲ失ヒ、外家藤岡氏ニ養ハル、時ニ伊豫ノ醫惠美良玄來タリテ廣島ニ居リ、老テ子ナシ、三白遂ニ之ガ爲ニ子養セラレ、因テ惠美氏ヲ冒ス。已ニ長ジテ張仲景ノ傷寒論ヲ誦シ、古醫方ヲ唱道ス。同時吉益東洞、同國ノ人ヲ以テ出デテ京師ニアリ、萬病一毒ノ說ヲ唱フ。年齡殆ド相伯仲ス、三白コレト往復論辯シ、其說相合スルモノアリ、東洞亦三白ヲ推シテ一俊人トナス。三白名聲已ニ顯ハレ治驗頗ル饒シ。安藝侯聞テ之ヲ喜ビ、數々謁見ヲ賜ヒ、後苞二百俵ヲ下シ、世襲トナサシム。天明元年十月八日病ヒテ歿ス、年七十五。室石橋氏ニ男三女ヲ生ム、季子名ハ貞秀ノ他ハ盡ク夭死ス、三白年老テ貞秀尙ホ幼ナルヲ以テ門人長尾貞璋ヲ養ヒテ嗣トナス。貞璋字ハ君達、大笑ト號シ、三白ヲ襲稱ス、後侍醫ニ進ム、三百石ヲ食ム、惠美氏ノ業益ゝ大ナリ。

惠美三白像

刺絡

刺。鍼。シテ病ヲ療スルノ法ハ、既ニ古代ニ行ハレシガ、其法ガ盛ニ醫家ノタメニ用ヒラルルニ至リシハ明和安永ノ頃、山脇東門ガ西洋ノ方ヲ傳ヘ、三稜針ヲ用ヒテ所謂瘀血ヲ取ルコトヲ稱揚セシニ始マル。

山脇東門、名ハ陶、字ハ大鑄、東門ハ其號ナリ。一ニ方學居士ト號ス、通稱玄侃、東洋ノ第二子、寶暦十二年父ノ官職ヲ襲ヒ、明和三年法眼ニ敍セラル。年十七父東洋ノ命ヲ承ケ、永富獨嘯庵ト共ニ越前府中ニ赴キ、奥村良竹ニツキテ吐方ヲ學ビ、京ニ歸リテ大ニ其術ヲ行ヒ、始メテ古醫方ニ汗・吐・下ノ三法備ハレリ。明和八年父東洋ノ遺緒ヲ嗣ギ、一婦人ノ屍ヲ解視シ、以テ解剖ガ醫學ノ基本タルベキコトヲ唱道セリ。天明二年七月病ヲ以テ家ニ歿ス、享年僅ニ四十七。著ハストコロ東門隨筆一卷アリ。

山脇東門像

刺絡ノ術ヲ以テ聞エタルモノ、東門ノ他ニ荻野元凱アリテ刺絡箭ヲ著ハシ、垣本鍼源アリテ熙載錄ヲ著ハシ、入江大六アリテ刺血絡正誤ヲ著ハシタリ。

灸法

灸法ハ鍼術ト併ビテ、古代支那ヨリ傳ハリ、平安朝時代ヨリ、鎌倉時代ヨリ經テ室町時代ニ至ルマデ、主ニ癰疽、疔瘡、瘰癧等瘡瘍ヲ治スルタメニ用ヒラレ、湯治ト併ビ稱セラレタリ。然レドモ、灸法ハ要スルニ瘡瘍ノ治ヲ施スタメニ用ヒラレタルニ過ギズ。然ルニ、此期ニ至リテ後藤艮山出デテ、百病ハ一氣ノ留滯ニ因ルノ說ヲ立テ、內傷癥疝ノ病ハ皆恬熙遊惰ノ致ストコロトナシ、灸法ヲ施シテ開表行經溫導徹底ノ效ヲ得ベシト說キ、熊膽、蕃椒、溫泉ト併セテ灸法ヲ賞用シ、ソノ艾炷ハ鼠糞麥粒ノ大サヲ以テ則トシ、壯數ハ固ヨリ病ノ輕重ニ依リテ異ナレドモ、二三千ヨリ六七千ニ至ルヲ度トナセリ。此時

艮山門下ノモノ四方ニアリテ盛ニ灸法ヲ賞用シ、一時後藤流一派ハ灸家ノ稱ヲ得タルホドナリキ。

溫泉

溫泉ニ浴シテ病ヲ療スルコトハ神代以來、我ガ國史ニ散見スルトコロナレドモ、醫學的ニコレヲ研究セルハ實ニ後藤艮山ニ始マル。艮山年五十一ノ時、但馬ノ城崎ニ遊ビ、ソノ煖潤活暢ノ效アルヲ認メ、コレヲ疾病ノ治療ニ應用スベキコトヲ唱ヘ、浴法、服法及ビ主治ニツキテ研究セシガ、門人香川修庵ソノ志ヲ嗣ギ、大ニ溫泉ノ效能ヲ研究シ、溫泉ノ良惡ヲ鑑別スルノ法ヲ示シ、浴法ニツキテ則ヲ立テ、痔、脫肛、梅瘡、便毒、疥癬、諸瘡、結毒、婦人腰冷、帶下等ニ用フルニ宜シト論ゼリ。

香川修庵ト同時ニ山村通庵アリ、同ジク後藤艮山ノ門ニ出デ、最モ力ヲ溫泉ノ攻究ニ用ヒ、諸州ヲ遍歷シテ親シク、ソノ氣味、主能ヲ驗シ、上野草津溫泉ハソノ效、城崎ニ劣ラザルコトヲ認メシガ、路程悠遠ニシテ病客ノ往キ難キヲ憾ミトシ、自カラ一種ノ人工溫泉ヲ創製シタリ。

醫學教育

大寶ノ令ニ、醫學教育ノ制度ヲ立テ、大學及ビ國學ヲ置キ、醫科ノ專門ヲ別チ、修學ノ科目ヲ定ムルコト等、一ニ唐ノ制度ニ依倣セシガ、ソノ制度ハ果シテ眞ニ實行セラレシカ否カ明ナラズ。平安朝時代ヨリ鎌倉時代及ビ室町時代ニ及ビテハ大學及ビ國學ハ漸次ニ廢セラレ、醫學ノ教育ハ學校ニテ施サルルコトナク、醫學ヲ修メムトスルモノハ各々其師ニ就キテ、經驗ノ要項ヲ傳承スルニ過ギズ。德川氏初

世ノ頃ニ及ビテ今大路氏ノ啓廸院アリ。古林見宜及ビ堀杏庵ノ嵯峨ノ學舍アリ、醫學教育ノタメニ設ケラレタル校舍アリシガ、ソノ最モ盛ナリシハ、コノ期ニ興サレタル多紀氏ノ躋壽館ナリキ。

躋壽館

躋壽館ハ明和二年五月多紀元孝ガ江戸神田佐久間町ニ創立セルモノニシテ、藥園及ビ書庫ヲ始トシテ、諸般ノ設備アリ。教課ハ本草經、素問、靈樞、難經、傷寒論、金匱要略ノ六部ヲ講ジ、更ニ經絡、針灸、診法、藥物、醫案、疑問ノ六課ヲ設ケ、醫案、疑問ハ文辭ニ預カリ、其他ハ皆事ニ就テ之ヲ傳ヘ、診法ニハ諸生ヲシテ鄙陋ノ治ヲ乞フモノヲ診シ、都講之ヲ教導シテ習熟セシメタリ。元孝歿スルノ後ハ其子元德代リテ之ヲ監理シ、天明四年ヨリ百日教育ノ擧ヲ始メタリ。ソノ法格ハ毎年二月十五日ヨリ百日ノ間有志ノ生徒ヲシテ學舍ニ入リテ研學セシメ、又外來ノ生徒モ日々講義ヲ聞クコトヲ得セシメタリ。ソノ教課ハ前例ニ仍リ、元德ノ子、元簡ハ素問ヲ講ジ、山田圖南、桃井陶庵ハ傷寒論、目黑道琢ハ難經、服部玄廣ハ靈樞、加藤俊又ハ難經、田村元雄、太田長元ハ本草、小坂立祐、岡田道民ハ經絡ヲ講ジ、儒家井上金峨、吉田篁墩、龜田鵬齋等モ亦、經書ヲ講ジタリ。

醫學院

同時、京都ニ醫學院アリ。天明元年ニ御醫畑黃山ガ創立セルトコロニシテ、ソノ教課ヲ醫經、經方、兒科、女科、瘍醫、鍼灸、本草ノ七部トナシ、別ニ經史子集四部ノ中ヨリ切要ナルモノヲ取リテ之ヲ講習セシメタリ。

畑黃山、名ハ惟和、字ハ厚生、一字柳安、黃山ハ其號ナリ、本ト安藤氏、平安ノ人、幼ニシテ穎敏、讀書ヲ好ム、醫官畑柳景之ヲ奇トシ、配スルニ女ヲ以テシ其後ヲ嗣ガシム、因リテ畑氏ヲ冒ス、延享二年法橋ニ敍シ、寶

養生所

畑黃山ノ像

曆七年法眼ニ進ム、安永五年初メテ御脈ヲ診シ、天明七年尙藥奉御トナリ、法印ニ敍シ、醫學院ノ號ヲ賜フ。文化元年病デ歿ス、享年八十四。黃山居恒世俗ノ浮靡ニ趨リ人ノ講學ヲ厭ヒ徼倖ニシテ技ヲ售ルモノ比々皆是ナルヲ見テ慷慨已ム能ハズ、ソノ法印ニ敍シ醫學院ノ號ヲ賜フニ及ビテ慨然トシテ志ヲ起シ、私財ヲ投ジテ學館ヲ城西ニ建テ醫學院ト稱シ、黃帝ノ遺經、諸方伎ノ書及ビ鍼灸本草等各之ガ師ヲ立テ以テ弟子ヲ誘掖シ、又儒家ヲシテ六經孔子ノ書ヲ講ゼシメ諸生ヲシテ先ヅ聖賢ノ書ヲ讀ミテ以テ其本ヲ立テ、本立チテ後ニ醫經ヲ學ビ而シテ終ニ方伎ヲ習ハシム、別ニ學範ヲ著ハシテ醫學ヲ講習スルノ次序ヲ說ク、是ニ於テカ始メテ醫學ノ教育ニ次序アリ。黃山著ハストコロ、醫範ノ外ニ、斥醫斷アリ、吉益東洞ガ論說ノ粗梗武斷ノ弊ヲ指摘セリ。辨瘟疫論アリ、明ノ吳有性ガ著ストコロノ瘟疫論ノ奇ヲ立テ、異ヲ造シトスルヲ論駁セリ。

養生所

豐臣秀吉施藥院ノ遺制ヲ再興シタレドモ其後、コレヲ嗣グモノナク、德川吉宗、將軍ノ職ニ就キ、銳意治ヲ圖ルニ及ビテ施藥院ヲ設ケ、貧民ノ疾病ニ罹リテ醫藥ノ資ニ乏シキモノヲ救療セムトスルノ志アリ。偶々江戸小石川ノ醫家ニ小川笙船トイフモノアリ、書ヲ上リテ時政十九條ヲ陳疏セシガ、中ニ施藥局ヲ設ルノ議アリ、幕府コレヲ採用シ、享保七年新ニ施藥局ヲ小石川藥園中ニ建設シ、コレヲ養生所ト名ヅケ町奉行ヲシテ之ヲ支配セシメ、與力二名、同心六名ヲコレニ屬セシメ、取締以下一切ノ事ヲ

江戸時代後期

(1)西暦十八世紀ノ終ヨリ十九世紀ノ中頃

取扱ハシメ、小川笙船、林良適、岡丈庵、木下道圓、八尾伴庵、堀長慶ノ諸家ヲ擧ゲテ醫務ヲ主宰セシメタリ。ソノ經費ハ初メ年額七百兩ナリシト、後ニハ增シテ八百四十兩トナシ、附屬町屋敷ヲ置キ、ソノ借料ヲ以テ經費ヲ支辨セシニ、寶曆以降ハ地料ヲ官庫ニ收納シ、別ニ經費ヲ支出スルコトトナレリ。昔時施藥院ノ制ハ詳ナラズ、官立ノ療病院ニシテ其制ノ備ハレルハ蓋シコレニ始マル。

小川笙船、名ハ廣正、雲語ト號ス、ソノ先ハ近江ノ人、笙船ニ至リテ江戸小石川ニアリテ醫ヲ業トス、享保七年施藥局ヲ小石川白山ニ開カル、之ヲ養生所ト稱ス、笙船其子圖治ト共ニソノ肝煎ヲ命ゼラル、幕府擢デテ醫官トナサントシタレドモ老ヲ以テ辭シ、寶曆十年、八十九歳ニシテ歿ス。

江戸時代後期

寛政ノ初ヨリ慶應ノ末ニ至ルマデ、(1)凡ソ八十年ノ間ヲ德川氏ノ季世トス。此間、寛政文化ノ交ニハ露人ノ來タリテ我ガ北陲蝦夷ヲ窺フアリ、英船ノ來タリテ西邊長崎ヲ侵スアリ、嘉永年間ニハ米艦ノ浦賀ニ來タリテ開港ヲ催カスアリ。幕府ハ已ムコトヲ得ズシテ遂ニ五港ヲ開キタレドモ、國內ニハ攘夷鎖國ノ說盛ニ行ハレテ、幕府ノ勢威ハ漸ク衰ヘ、慶應年間ニ至リテ幕府ハ遂ニ瓦解シタリ。政治上ニ於テ此ノ如キ變化アリシトキニ方リテ、儒學ニハ古賀精里、尾藤二洲、柴野栗山以下ノ學者アリ。國學ニハ本居宣長アリ。前期ノ末ヨリ駿速ノ勢ヲ以テ進ミタル文運ハ紛擾ノタメニ甚シキ影響ヲ受クルニ至ラズ。

此期ノ醫學

古醫方

我ガ醫學ノ如キハ前期蘭學創始以來盛ニ西洋ノ學術ヲ攻究シ、外國トノ交通頻繁トナルニ及ビテ益益新知識ヲ輸入シ、而シテ蘭方醫家ハ獨リ治病ノ方術ヲ彼ニ學ブニ止マラズシテ、進ンデ兵法、天文、地理等ノ學ニ至ルマデ、彼邦ノ書ニツキ之ヲ修メ、コレニ依リテ遂ニ西洋ノ學術ヲ我邦ニ移植スルニ至レリ。

此期ノ醫學

此期ノ醫學ハ前期ノ後ヲ承ケ、支那ノ醫方ニ本ヅキタル漢方醫學ニ併ビテ、新ニ興リタル和蘭醫方アリ。漢方醫學ニアリテハ、前期ニ興リタル古醫方ガ漸次漢蘭折衷派ニ移リタル外、折衷派（考證學派）アリテ此期ニ行ハレシガ、コノ學派ノ牛耳ヲ執リシハ江戸ノ多紀氏ナリ。和蘭醫方モ主ニ江戸諸家ノ努力ニヨリテ大ニ發達シ、從來京都ニアリシトコロノ醫學ノ中心ハ此期ニ至リテ轉ジテ江戸ニ移リタリ。

古醫方

古醫方、殊ニ吉益東洞ノ論說ガ雄渾斬新ニシテ一世ノ耳目ヲ聳動セシヨリ世醫ハ始メテ李朱醫學ノ弊ヲ脫セシカドモ、ソノ治療ハ見證ヲ主トシ、攻擊過甚ニシテ假借ナキノ弊ナキコト能ハズ。吉益南涯、氣血水ノ說ヲ立テテ、其說ヲ修正シ、證異ナリテ病同ジク、病異ナリテ症同ジキモノアレバ見證ノミニヨリテ治ヲナスハ非ナリト論ジタリ、而カモ其病名ニ拘泥セズ、病因ヲ論ゼザルニ至リテハ兩氏ノ說共ニ同一ナリシガ、中神琴溪出デテ攻補不異ノ說ヲ立テ、方證相對ノ非ヲ辯ジ、病因ヲ究ムベキコトヲ唱ヘ、治

術ニ對證、對因、對標、對本等ノ別アルコトヲ言ヒシヨリ、古醫方ハココニ又一生面ヲ開キタリ。

中神琴溪、名ハ孚、通稱右内、字ハ以隣、琴溪ハ其號ナリ。近江山田村ノ人、琴溪幼ニシテ穎悟、出デテ大津ノ醫家中神氏ノ家ヲ嗣グ。年三十餘ニシテ、發憤醫ヲ以ッテ名ヲ擧ゲントシ、偶々古方便覽一册ヲ得大ニ之ヲ奇トシ、精讀シテソノ大意ヲ得タリ。是ニ於テ京都ニ移リ堺町四條ニト居シ醫ヲ以ッテ門戸ヲ張リ古醫方ヲ唱ヘ、其術大ニ行ハル。天保四年八月病デ歿ス、年九十一、著ハス所生生堂醫談、生生堂傷寒約言、生生堂養生論、生生堂治驗、生生堂雜記等アリ、皆門人ノ記述スルトコロニ係ル。琴溪別ニ師受スルトコロナシ、深ク吉益東洞ノ所說ニ推服シ、常ニ東洞ノ著述ヲ取リテ精讀シタリト云フ。

中神琴溪像

中神琴溪ニ嗣ギテ宇津木昆臺アリ、張仲景ノ書ニ據リテ之ヲ病者ニ徵スルコト四十年。一家ノ說ヲ立テ、傷寒論ハ傷寒一病ヲ論ズルノ書ニアラズ、萬病ヲ治スルノ規範其中ニアリトナシ、傷寒論ヲ以テ漢志ヲ擧ゲタル風寒熱病方ナリト斷シ、古訓醫傳ヲ著ハシテ、ソノ趣旨ヲ明カニシタリ。

宇津木昆臺、名ハ益夫、字ハ天敬、俗稱太一郎、昆臺ハ其號ナリ。名古屋ノ人。幼ニシテ學ヲ好ミ、醫方ヲ淺井貞庵、平野龍門ノ二家ニ學ブ、十八歲ノ時笈ヲ負テ京都ニ出デ、諸大家ノ門ニ出入シ、益スルトコロ多シ、遂ニ留マリテ刀圭ノ業ヲ開キ、古醫方ヲ以ッテ一世ニ鳴ル。嘉永元年五月八日車屋町御池ノ視別軒ニ歿ス。年七十。

考證學派

宇津木昆臺像

著ハス所、古訓醫傳二十五卷、日本醫譜七十卷等アリ。

宇津木昆臺ハ諸病ノ原因ヲ概括シテ、コレヲ風・寒・熱ノ三ニ歸シ、コレガタメニ氣・血・水ノ變ヲ致スニ由リテ萬般ノ症狀ヲ呈スルモノナリト說キ、以テ吉益南涯ノ氣血水論ヲ整ヘタリ。

古方醫學起リテ後世醫方ノ假見謬說ヲ排斥シ、漢唐以上ノ醫經ニ依リテ其說ヲ立ツベキコトヲ唱道シ一世ヲ風靡スルモノアリシガ、ソノ說ノ粗梗武斷ニ過ギ、攻擊以外ニ治方アルコトヲ知ラズ、ソノ弊害尠カラザルモノアルヲ見テ、先ヅ起リテ古今諸派ノ偏取スベカラザルコトヲ痛論セシハ望月鹿門、淺井圖南ノ諸家ニシテコレニ嗣ギテ起リシハ山田圖南、多紀藍溪等江戸ノ醫家ナリキ。當時江戸ノ儒家ニ井上金峨アリテ、創メテ折衷ノ學ヲ唱ヘ、訓詁ヲ漢唐ニ取捨シ、義理ヲ宋明ニ撰擇シ、衆說ヲ折衷シ、穩當ヲ採羅シ、以テ先聖ノ遺旨ヲ闡發スルコトヲ務トシ、山本北山、吉田篁墩、太田錦城、龜田鵬齋等嗣テ起リテ考證學派ヲ立テショリ其學風ハ又延テ我醫學ニ影響シ遂ニ考證學派（又折衷學派）ト名ヅクベキ一新派ヲ生ズルニ至レリ、而シテ此派ノ代表者トシテ擧グベキモノハ多紀氏ナリ。多紀元孝、

本姓金保、名醫丹波康賴ノ裔ナリ、ソノ二十九代ノ孫元泰ニ至リ、族ヲ別チテ金保氏トナシ、口科ヲ以テ德川氏ノ醫官トナリ、累世其職ニアリ、元孝ニ至リテ姓ヲ多紀ト改メ、本道ヲ兼ネ、延享四年奥醫師ニ任ジ、法眼ニ叙セラル。明和二年躋壽館ヲ神田佐久間町ニ創建シ以テ醫學講習ノ道ヲ廣ム。元孝ノ子、元德ニ至リテ父ノ遺志ヲ繼ギ、更ニコレヲ開拓シ、規摸ヲ擴大シ、寛政二年幕府ノ旨ニ依リテ家塾ヲ轉ジテ國學トナシ、更ニ修飾ヲ加ヘテ、醫官ノ子弟ニ命ジテ悉ク就キテ學バシメ、仍テ元德ヲ以テ教諭トナシ、子孫ヲシテ世々ソノ學務ヲ總ベシム。元德ノ子、元簡嗣デ父ノ業ヲ受クルニ及ビ、井上金峨、太田錦城等儒家ノ說クトコロニ據リテ考證ノ學風ヲ醫學ニ移シ、博ク歷代諸家ノ著書ヲ探リ、衆說ヲ條陳シ、精義ヲ酌酌シ、考計精詳、引據宏博ニシテ一ニ偏執ノ說ヲナサズ、醫經、經方ノ本義ハ此ニ至リテ始メテ闡發セラレ、粗梗武斷ノ弊ハコレニ依リテ始メテ除カレタリ。

多紀元簡、字ハ廉夫、通稱安長、桂山ト號ス、別ニ櫟窻ト號ス。父名ハ元德、通稱安元、藍溪ト號ス。明和中、醫學館ヲ創メテ後進ヲ訓督シ、法印ノ位ニ陞リ、永壽院ト號ス、享和元年、七十ニシテ歿ス。元簡幼ニシテ頴悟、文學ヲ井上金峨ニ受ク、父ノ業ヲ受ケテ甚ダ醫學ヲ嗜ミ專心力學、人ソノ勵精ニ驚ク、寛政二年侍醫ニ擧ゲラレ法眼ニ敍セラル、十一年父藍溪致仕ス、元簡ソノ祿秩ヲ襲テ侍醫兼督醫學事トナル、享和元年、事ヲ以テ上旨ニ忤ヒ、外斑ニ黜ケラル。文化七年再ビ召サレテ後宮醫斑ニ列ス、其年冬十二月二日奄一夕ニシテ歿ス、享年五十六、武州平塚城官寺先塋ノ次ニ葬ムル。男二人、元胤、元堅。元胤ソノ祿ヲ襲フ。元簡著ハストコロ素問

多紀元簡像

ビテ海内醫籍ヲ講ズルモノ率由スルトコロヲ知リ、而シテ粗梗武斷ノ弊始メテ熄ミタリト云フ。

識、靈樞識、傷寒論輯義、金匱要略輯義、醫賸、櫟窻類鈔、觀聚方、麻疹三書其他十數部アリ。ソノ素問、靈樞、傷寒、金匱等ノ諸註ハ衆說ヲ參酌シ、箋釋ヲ加ヘ、訛謬ヲ正シ、以テ完璧ヲ成ス。是ヨリ先キ、古方ノ學起リテヨリ、天下皆、五行經絡ノ說ヲ非トシ、諸家各々論述スルトコロアリト雖モ、指歸一ナラズ、元簡ノ書出ヅルニ及

元簡ノ子、元胤(柳汴ト號ス)及ビ元堅(苣庭ト號ス)、家學ヲ承ケ、共ニ醫學ニ精シキヲ以テ名アリ。元胤ハ醫籍考、體雅、疾雅、藥雅等ヲ著ハシ、元堅ハ傷寒論述義、金匱要略述義、雜病廣要、女科廣要、藥治通義等ノ著述ヲナシ、歷代諸家ノ萃ヲ拔キテ以テ世醫ニ好標準ヲ授ケタリ。多紀氏ト同時ニ、京都ニ和田東郭、福井楓亭ノ二人アリ、亦折衷ノ說ヲナシ、名聲關西ニ震ヒシガ、寛政ノ初、共ニ擧ゲラレテ、朝廷及ビ幕府ノ醫官トナリ、ソノ治術ハ一世ノ推奉スルトコロトナリタ